愛知県環境学習等行動計画 2030

ー持続可能な社会を支える「行動する人づくり」ー

中間評価

令和６年３月

愛知県

目　次

１　概要 1
（１）愛知県環境学習等行動計画 2030 の概要 1
（２）中間評価の目的 1
（３）中間評価の対象期間 1

２　中間評価の方法 1
（１）定量的評価 1
（２）定性的評価 3

３　中間評価 5
（１）定量的評価 5
ア　家庭における環境学習等の推進 5
イ　学校における環境教育の推進 5
ウ　社会における環境学習等の推進 8
（２）定性的評価 10
ア　家庭における環境学習等の推進 10
イ　学校における環境教育の推進 10
ウ　社会における環境学習等の推進 12

４　総括 14
（１）家庭における環境学習等の推進 14
（２）学校における環境教育の推進 14
（３）社会における環境学習等の推進 15

５　今後の愛知県環境学習等行動計画 2030 の推進について 18

資料
1　愛知県環境学習等行動計画 2030 中間評価【概要版】 19
2　令和４年度実施アンケート結果 23
3　愛知県環境学習等行動計画 2030 中間評価（定量的評価） 51
4　代表的な事業に対する定性的評価　ステップアップ・ワークシート 55
5　各主体の取組事例に対する定性的評価　ステップアップ・ワークシート 65
6　各主体の事例から得られた知見～学びをサポートするためのポイント～ 85
7　愛知県環境教育等推進協議会開催要領 87
8　愛知県環境教育等推進協議会委員名簿 89

１　概要

（１）愛知県環境学習等行動計画 2030 の概要

本県では、「環境教育等による環境保全の取組の促進に関する法律（平成 15 年法律第 130 号)」に基づき、2018（平成 30）年３月に、愛知県環境学習等行動計画を見直し、本県の環境学習の方向性を示すものとして「愛知県環境学習等行動計画 2030」（計画期間：2018（平成 30）年度から 2030（令和 12）年度）を策定しました。

持続可能な社会を支える「行動する人づくり」を進めるに当たり、取り組むべき環境学習等の課題として、行動につなぐ力を育むこと、そしてそのために環境学習等の機会の拡充と質の向上を図ることを目標として、学びを行動につなぐため、県民一人一人に身に付けることが望ましい「五つの力」を育むことを念頭に置きながら、「家庭」「学校」「社会」において各主体が環境学習等に取り組めるようにすることで、持続可能な社会を支える「行動する人づくり」を推進しています。

（２）中間評価の目的

本計画の計画期間（2018（平成 30）年度から 2030（令和 12）年度）の中間年度である 2024（令和６）年度を迎えるに当たり、計画の進捗状況を把握し、各主体における環境学習等の現状を取りまとめ、今後の環境学習等の推進に活用するために、中間評価を実施しました。

また、本計画の目的の達成に向けて課題等について整理し、今後の計画推進の方向性を明らかにしました。

（３）中間評価の対象期間

対象期間は、本計画開始の 2018（平成 30）年度から 2023（令和５）年度までの６年間としました。

２　中間評価の方法

（１）定量的評価

各主体の取組の進捗状況については、表１に示す各主体に期待される主な取組を数値により定量的に評価しました。

本計画の各主体に期待される主な取組を評価軸として、2022（令和４）年度及び 2016（平成 28）年度に実施した各アンケート結果（資料２）を比較することで定量的評価を行いました。

県の取組については、毎年度、愛知県環境教育等推進協議会で報告している環境学習等に関する取組内容を用いて、定量的評価を行いました。

なお、地域コミュニティは本計画で追加した主体であり、2016（平成 28）年度のアンケート結果がないため、評価の対象外としました。

表１　各主体に期待される主な取組

主体		期待される主な取組
家庭 （県民）		直接体験（身近な自然の体験等）の機会の確保
		エコアクションの実践
		世代間の学び合い・育ち合い
学校 （幼稚園等 小学校 中学校 高等学校 特別支援学校 大学）		発達段階に応じた環境教育の実施
		体験学習・問題解決的な学習の充実
		ESDの視点を意識した環境教育の実施
		多様な主体との連携・協働による環境教育の実施
		学校の外へと発展する環境教育の実施
		環境教育やESDの推進のための人材育成と研究
社会	事業者	社員教育の中での環境学習等の実施
		事業活動での環境負荷低減を通した実践的な環境学習等の実施
		多様な主体との連携・協働による環境学習等の実施
	NPO 等	地域における発展的な環境学習等の実施
	地域 コミュニティ	地域の行事や課題を素材にした環境学習等の実施
	行政 （市町村）	地域の特性を活かした環境学習等を実施できる環境づくり
		事業体としての環境負荷低減に向けた、職員への環境学習等の実施
		環境学習等を行う各主体への支援
	行政 （県）	地域の特性を活かした環境学習等を実施できる環境づくり
		事業体としての環境負荷低減に向けた、職員への環境学習等の実施
		環境学習等を行う各主体への支援
		県内全域を対象とした環境学習等の推進のための環境づくり
		環境、環境学習等に関する情報の収集・提供

（２）定性的評価

本計画では、学びを行動につなぐために一人一人に身に付けることが望ましい力を「五つの力」として示し、それを「家庭」「学校」「社会」において育んでいくに当たって、各主体に期待される主な取組を促進しています。（図１、図２）

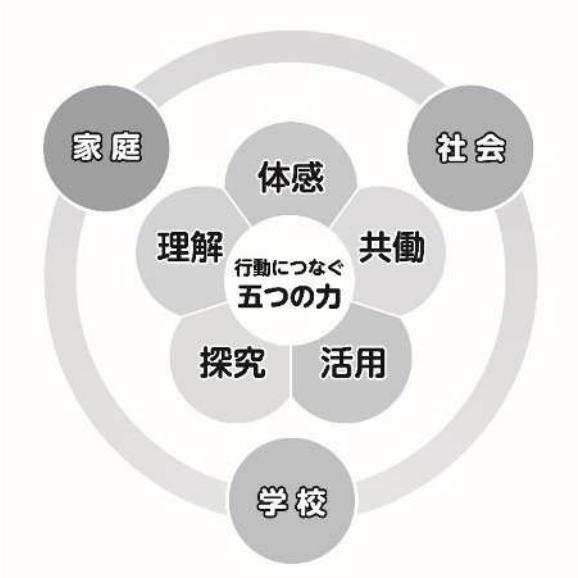


図１　「家庭」「学校」「社会」において育む、学びを行動につなぐ「五つの力」

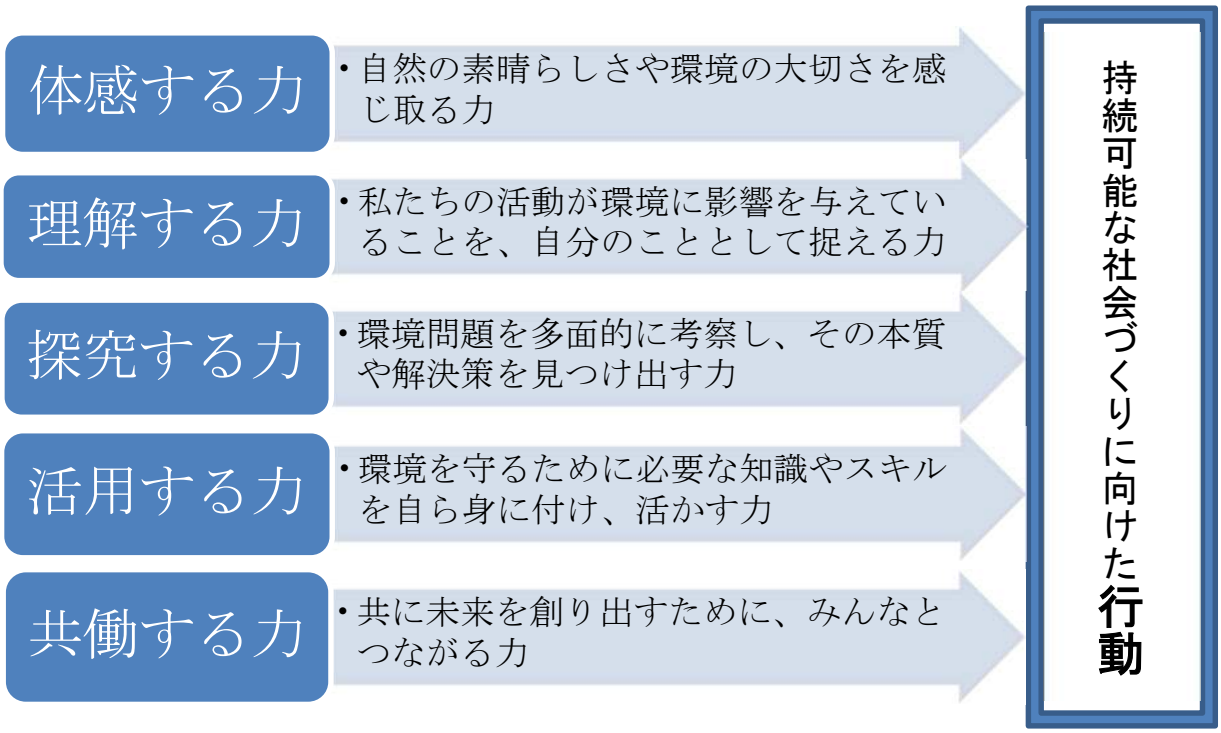


図２　本計画における「五つの力」とその定義

※「五つの力」は、様々な主体が様々な機会を通じて働きかけていくことで、一人一人の中に培われていくものです。

ここでは、各主体における取組の進捗状況を事業の内容や成果により定性的に評価しました。

本計画の目的である持続可能な社会を支える「行動する人づくり」を進めるために、事業（表２）及び事例（表３）についてステップアップ・ワークシート（資料４、５）を作成し、一人一人に身に付けることが望ましい「五つの力」が育まれたかで定性的評価を行いました。「五つの力」の評価軸には、表４に示すとおり、本計画の指標例を採用しました。

また、表１に示す各主体に期待される主な取組の進捗についても、ステップアップ・ワークシート等を踏まえて評価を行いました。

表２　五つの力ごとの代表的な県の５事業

五つの力	事業名
体感する力	もりの学舎ようちえん
理解する力	プラザ環境学習講座
探究する力	あいちの未来クリエイト部
活用する力	かがやけ☆あいちサスティナ研究所
共働する力	環境学習コーディネート事業

表３　各主体の取組事例

事例	区分		団体名
①	学校	幼稚園等	蒲郡あさひこ幼稚園
②		小学校	犬山市立羽黒小学校
③		中学校	豊田市立猿投台中学校
④		高等学校	愛知県立安城高等学校
⑤		特別支援学校	愛知県立みあい特別支援学校　高等部
⑥		大学	愛知淑徳大学
⑦	事業者		株式会社ダイセキ
⑧	NPO 等		特定非営利活動法人犬山里山学研究所
⑨	地域コミュニティ		刈谷市立双葉小学校 PTA・地域学校協働活動
⑩	市町村		大府市

表４　五つの力と指標例

五つの力	成果指標例
体感する力	新たな気づきや発見が得られたか等
理解する力	環境問題を自分のこととして捉えられたか等
探究する力	物事を他の側面から捉え、次の疑問や課題を見つけられたか等
活用する力	自分のすべきことに必要な知識やスキルに気づいたか等
共働する力	他者と共働することの価値を感じられたか等

３　中間評価

（１）定量的評価

ア　家庭における環境学習等の推進

・家庭での日々の生活には、環境学習等の機会が数多くあり、特別に学習の機会を設けなくても、暮らしの中の様々な場面が気づきや学びのきっかけとなります。

・家庭における環境学習等については、県政世論調査[1]の結果から実施状況を把握しました。

・「直接体験（身近な自然の体験等）の機会の確保」は、環境学習や環境保全活動に参加したことがある人の割合が 2022 年度は 61.8％となり、2016 年度（66.0％）と比較して、横ばいとなっています。

・「エコアクションの実践」は、毎日の暮らしの中で何らかのエコアクションに取り組む人の割合が 2022 年度は 96.6％となり、2016 年度（95.7％）と比較して、引き続き高い水準にあります。

・「世代間の学び合い・育ち合い」は、家族や友人で、環境についての話し合いや環境活動に参加した人の割合が 2022 年度は 65.0％となり、2016 年度（72.1％）と比較して、横ばいとなっています。

イ　学校における環境教育の推進

（ア）幼稚園等

・「発達段階に応じた環境教育の実施」「体験学習・問題解決的な学習の充実」「ESD の視点を意識した環境教育の実施」は、実体験を取り入れた環境教育を実施した幼稚園等の割合が 2022 年度は 87.9％となり、2016 年度（97.7％）と比較して、引き続き高い水準にあります。

・「多様な主体との連携・協働による環境教育の実施」「学校の外へと発展する環境教育の実施」は、環境教育や環境保全活動を連携・協働により行った幼稚園等の割合が 2022 年度は 60.3％となり、2016 年度（57.3％）と比較して、増加しています。

・「環境教育や ESD の推進のための人材育成と研究」は、教職員が環境教育に

[1] 2022（令和４）年度県政世論調査

関する研修等に参加した幼稚園等の割合が 2022 年度は 36.2%となり、2016 年度（33.0%）と比較して、増加しています。

（イ）小学校

・「発達段階に応じた環境教育の実施」「体験学習・問題解決的な学習の充実」は、実体験を取り入れた環境教育を実施した学校の割合が 2022 年度は 100.0%となり、2016 年度（100.0%）と比較して、引き続き高い水準にあります。

・「ESD の視点を意識した環境教育の実施」は、SDGs の視点を導入又は環境教育が SDGs の一部であると意識している学校の割合が 2022 年度は 99.8%（2016 年度：97.9%）、総合的な学習の時間等の授業における各種環境の視点を導入した学校の割合が 2022 年度は 98.9%（2016 年度：99.3%）と、引き続き高い水準にあります。

・「多様な主体との連携・協働による環境教育の実施」「学校の外へと発展する環境教育の実施」は、環境教育や環境保全活動を連携・協働により行った学校の割合が 2022 年度は 97.5%となり、2016 年度（96.8%）と比較して、引き続き高い水準にあります。

・「環境教育や ESD の推進のための人材育成と研究」は、教職員が環境教育に関する研修等に参加した学校の割合が 2022 年度に 61.6%となり、2016 年度（60.3%）と比較して、増加していますが、他分野の研修への参加で環境教育研修に参加できる余裕がないなどの意見がありました。

（ウ）中学校

・「発達段階に応じた環境教育の実施」「体験学習・問題解決的な学習の充実」は、実体験を取り入れた環境教育を実施した学校の割合が 2022 年度は 98.5%となり、2016 年度（99.6%）と比較して、引き続き高い水準にあります。

・「ESD の視点を意識した環境教育の実施」は、SDGs の視点を導入又は環境教育が SDGs の一部であると意識している学校の割合が 2022 年度は 100.0%（2016 年度：96.9%）、総合的な学習の時間等の授業における各種環境の視点を導入した学校の割合が 2022 年度は 88.8%（2016 年度：77.6%）と、引き続き高い水準にあります。

・「多様な主体との連携・協働による環境教育の実施」「学校の外へと発展する環境教育の実施」は、環境教育や環境保全活動を連携・協働により行った学校の割合が 2022 年度は 92.2%となり、2016 年度（89.4%）と比較して、引き続き高い水準にあります。

・「環境教育や ESD の推進のための人材育成と研究」は、教職員が環境教育に関する研修等に参加した学校の割合が 2022 年度は 58.5%となり、2016 年度（59.2%）と比較して、横ばいとなっており、小学校と同様に、時間的余裕がないなどの意見がありました。

（エ）高等学校

・「発達段階に応じた環境教育の実施」「体験学習・問題解決的な学習の充実」は、実体験を取り入れた環境教育を実施した学校の割合が 2022 年度は 92.2%となり、2016 年度（94.6%）と比較して、引き続き高い水準にあります。

・「ESD の視点を意識した環境教育の実施」は、SDGs の視点を導入又は環境教育が SDGs の一部であると意識している学校の割合が 2022 年度は 98.4%（2016 年度：90.6%）、総合的な探究の時間等の授業における各種環境の視点を導入した学校の割合が 2022 年度は 82.0%（2016 年度：68.5%）と、引き続き高い水準にあります。

・「多様な主体との連携・協働による環境教育の実施」「学校の外へと発展する環境教育の実施」は、環境教育や環境保全活動を連携・協働により行った学校の割合が 2022 年度は 82.8%となり、2016 年度（77.2%）と比較して、増加しています。

・「環境教育や ESD の推進のための人材育成と研究」は、教職員が環境教育に関する研修等に参加した学校の割合が 2022 年度は 57.0%となり、2016 年度（64.4%）と比較して、横ばいとなっており、多忙なため、時間的余裕がないなどの意見がありました。

（オ）特別支援学校

・「発達段階に応じた環境教育の実施」「体験学習・問題解決的な学習の充実」は、実体験を取り入れた環境教育を実施した学校の割合が 2022 年度は 98.7%となり、2016 年度（100.0%）と比較して、引き続き高い水準にあります。

・「ESD の視点を意識した環境教育の実施」は、SDGs の視点を導入又は環境教育が SDGs の一部であると意識している学校の割合が 2022 年度は 97.4%（2016 年度：85.1%）、総合的な学習（探究）の時間等の授業における各種環境の視点を導入した学校の割合が 2022 年度は 80.5%(2016 年度:71.6%）と、引き続き高い水準にあります。

・「多様な主体との連携・協働による環境教育の実施」「学校の外へと発展する環境教育の実施」は、環境教育や環境保全活動を連携・協働により行った学校の割合が 2022 年度に 81.8%となり、2016 年度（61.2%）と比較して、増加しています。

・「環境教育や ESD の推進のための人材育成と研究」は、教職員が環境教育に関する研修等に参加した学校の割合が 2022 年度 39.0%となり、2016 年度（32.8%）と比較して、増加していますが、研修内容が本校児童生徒の実態に合わないなどの意見がありました。

（カ）大学

・「発達段階に応じた環境教育の実施」「体験学習・問題解決的な学習の充実」「ESD の視点を意識した環境教育の実施」は、環境保全・環境教育や ESD に

関する研究や講座、イベント等を実施した大学の割合が 2022 年度は 71.8%となり、2016 年度（51.3%）と比較して、増加しています。

・「多様な主体との連携・協働による環境教育の実施」「学校の外へと発展する環境教育の実施」は、環境教育や環境保全活動を連携・協働により行った大学の割合が 2022 年度は 89.3%となり、2016 年度（85.0%）と比較して、引き続き高い水準にあります。

・「環境教育や ESD の推進のための人材育成と研究」は、教員養成カリキュラムのある大学のうち、環境教育の指導方法を教授するような授業を実施した大学の割合が 2022 年度は 39.3%となり、2016 年度（15.0%）と比較して、増加しています。

ウ　社会における環境学習等の推進

（ア）事業者

・「社員教育の中での環境学習等の実施」は、社員教育の中で環境教育を実施した事業者の割合が 2022 年度は 96.3%となり、2016 年度（100.0%）と比較して、引き続き高い水準にあります。

・「事業活動での環境負荷低減を通した実践的な環境学習等の実施」は、サービスや情報提供などでの環境負荷低減の取組や、環境に配慮した製品・サービスの提供を行った事業者の割合が 2022 年度は 100.0%となり、2016 年度（97.1%）と比較して、引き続き高い水準にあります。

・「多様な主体との連携・協働による環境学習等の実施」は、環境保全活動や環境教育を実施した事業者のうち、こうした活動を連携・協働により行った事業者の割合が 2022 年度は 85.2%となり、2016 年度（93.9%）と比較して、引き続き高い水準にあります。

（イ）NPO 等

・「地域における発展的な環境学習等の実施」は、環境保全活動や環境学習を実施した NPO の割合が 2022 年度は 77.6%（2016 年度：88.4%）と減少し、コーディネーターの役割を実施したことがある NPO の割合が 2022 年度は 32.9%（2016 年度：42.0%）と横ばいとなっているものの、環境保全活動や環境学習を実施した NPO のうち、こうした活動を連携・協働により行った NPO の割合が 2022 年度は 94.9%（2016 年度：93.4%）と引き続き高い水準にあります。

（ウ）地域コミュニティ

・PTA では、「地域の行事や課題を素材にした環境学習等の実施」は、地域のリサイクル活動、自然保護活動、地球温暖化対策に関する活動などの環境保全活動を連携・協働により行った PTA の割合が 2022 年度は 75.1%、地域の清掃活動や草刈りなどの環境美化活動を連携・協働により行った PTA の割合が 2022 年度は 67.5%、その他の環境に関する活動を連携・協働により行った PTA の割合が 2022 年度は 14.8%という結果でした。

・PTA 以外の地域団体（自治会、コミュニティ、老人クラブ、子ども会）では、市町村向けアンケート[2]の「問９　地域の多様な主体による地域特性を踏まえた環境学習等の取組について」の「市町村と地域団体が連携・協働して行った環境保全活動や環境学習」では「自然観察会などの体験学習」で 33 事例、「地域団体が行った環境保全活動や環境学習」では「環境保全活動」で 47 事例の回答があり、今後さらなる進展が期待されます。

（エ）行政（市町村）

・「地域の特性を活かした環境学習等を実施できる環境づくり」は、地域住民向けの環境学習を実施又は地域の特性等を活かした環境学習を実施した市町村の割合が 2022 年度は 98.1%（2016 年度：94.4%）、連携・協働して環境学習を実施した市町村の割合が 2022 年度は 85.1%（2016 年度：88.9%）と、引き続き高い水準にあります。

・「事業体としての環境負荷低減に向けた、職員への環境学習等の実施」は、職員に対して環境学習を実施した市町村の割合が 2022 年度は 79.6%となり、2016 年度（85.2%）と比較して、横ばいとなっています。

・「環境学習等を行う各主体への支援」は、NPO や事業者、学校等が実施している環境学習への支援を行った市町村の割合が 2022 年度は 85.2%となり、2016 年度（81.5%）と比較して、引き続き高い水準にあります。

（オ）行政（県）

・「地域の特性を活かした環境学習等を実施できる環境づくり」は、2020 年４月に学校の社会見学にも対応した施設としてあいち環境学習プラザをリニューアルし、環境学習講座を拡充するなど、環境学習等を実施できる環境づくりに積極的に取り組んでいます。

・「事業体としての環境負荷低減に向けた、職員への環境学習等の実施」は、中期新規採用職員研修であいちエコマネジメントを科目として実施するなど、職員への環境学習等の実施に取り組んでいます。

・「環境学習等を行う各主体への支援」は、環境学習を受けたい方と、環境学習を提供できる方の橋渡し役を担うコーディネーター等により、環境学習等を行う各主体への支援を行っています。

・「県内全域を対象とした環境学習等の推進のための環境づくり」は、愛知県環境学習施設等連絡協議会加盟施設等の環境学習施設間の情報共有等を強化することにより、環境学習等の推進のための環境づくりに取り組んでいます。

・「環境、環境学習等に関する情報の収集・提供」は、環境白書・愛知の環境のあらましを作成することなどにより、県民への情報提供を行っています。

・学びを行動につなぐための「五つの力」を育んでいくよう、各種事業を推進しています。

[2] 2022（令和４）年度実施アンケート結果

（２）定性的評価

ア　家庭における環境学習等の推進

・家庭での日々の生活には、環境学習等の機会が数多くあり、特別に学習の機会を設けなくても、暮らしの中の様々な場面が気づきや学びのきっかけとなります。

・家庭における環境学習等については、表２（P.4）及び表３（P.4）に示す取組から実施状況を把握しました。

・これらの取組において、子どもが学んできたことを家庭で実践したり、家庭内で共有したりという様子から、家庭においてエコアクションを実践したり、世代間の学び合いにつなげていることがうかがえます。さらに、生きものや植物をじっくりと観察するようになったとの声もあり、直接体験の機会を大切にしている様子が分かります。五つの力のうち、「体感する力」「理解する力」「共働する力」に結び付けられる取組であることがうかがえます。

イ　学校における環境教育の推進

（ア）幼稚園等

・幼少期には、様々な感覚に働きかけることが有効であり、生涯の記憶として残りやすくなります。このため、楽しみながら自然にふれることで、自然に対する感性や環境を大切に思う心を養うことができるような学習に重点を置いています。

・表３（P.4）事例①では、同じ場所に何度も出かけ五感で季節の変化を感じとり、実感を伴った学びとしています。また、自然とのふれあいや野菜作り等の場面において SDGs につながる保育を行っています。さらに、保護者が保育に参加できる機会や、地域の方と幼児との交流などを通して、家庭や地域との連携・協働や、発展的な環境学習につなげ、幼児の発達を促していることが分かります。他にも、教員同士の情報共有や協力体制を築くようにすることで、人材育成と研究を重ねられています。本事例は、五つの力のうち、「体感する力」に結び付けられる取組であることがうかがえます。

・幼稚園等向けアンケート[2]の「問２　継続的な自然体験を実施したことで、幼児の行動や発言に変化はありましたか。」では、「変化があった」と９割以上の方が回答しており、幼児の行動等の変化を読み取ることできます。

（イ）小学校

・自然や生きもの、人間を取り巻く環境問題を学習する際に、児童の発達段階に合わせて体験的・探究的な内容を盛り込むことにより、深い学びにつなげていきます。

・表３（P.4）事例②では、第５学年の総合的な学習の時間として「米作り」を取り上げています。一つのテーマから、自然環境、歴史、食などに関する知識同士を結び付けることで SDGs の視点を意識した横断的な学びとしているほか、学校の中だけではできない体験を地域との連携により実現していること、また、保護者も活動に参加することで、家庭内で共有が図られ世代間の

学び合いにつなげていることが分かります。さらに、地域の方のもつ豊富な知識・経験を児童によりよく伝えられるよう工夫し、環境教育を充実させていることが分かります。本事例は、五つの力のうち、「体感する力」「理解する力」「共働する力」に結び付けられる取組であることがうかがえます。

（ウ）中学校

・自然や生きもの、人間を取り巻く環境問題について学習する際に、体験的・探究的な内容を盛り込むことにより、深い学びにつなげていきます。

・表３（P.4）事例③では、第１学年の総合的な学習の時間として「菜の花プロジェクト」を取り上げています。地域の特色を活かした取組から、持続可能な社会のためにできることを具体化するために、NPO を始めとする地域の方と連携・協働することで、地域社会を見据えた発展的な環境学習につなげていることが分かります。また、学んだことを家庭で実践することが振り返りとなり、世代間の学び合いにつながっている様子がうかがえます。さらに、一つのテーマを多面的に捉えることができるよう工夫し、効果的な環境教育を実施していることが分かります。本事例は、五つの力のうち、「体感する力」「理解する力」「共働する力」に結び付けられる取組であることがうかがえます。

（エ）高等学校

・自然や環境を守り、環境問題や人間を取り巻く様々な問題の解決に向けて、具体的な行動に結び付けていくことが期待されます。

・表３（P.4）事例④では、総合的な探究の時間として「ABP SDGs 探究学習」を取り上げています。地域の特色を活かした「あんじょう SDGs 共創パートナー」と連携した学習では、クラス・学年の枠を超えたグループ編成により生徒同士が学び合う環境を整えるとともに、多様な主体との連携・協働による環境教育が実施されていることが分かります。さらに、SDGs を踏まえた学習により、地域社会に貢献できる自己のあり方を考える機会とするとともに、具体的な行動に移すことを目標にすることで行動につなげられるような発展的な学習としている様子がうかがえます。本事例は、五つの力のうち、「探究する力」「共働する力」に結び付けられる取組であることがうかがえます。

（オ）特別支援学校

・生徒一人一人の障害特性にあわせた効果的な環境教育を実施することが期待されます。

・表３（P.4）事例⑤では、高等部が行う「農福連携の取組」を取り上げています。生徒の特性に配慮し、体験や実感を伴った学びにより、主体的な参加や経験を培うように工夫していることが分かります。さらに、地域と連携した取組を実施することで、世代を超えた交流の場として、社会とのつながりを意識した学びにつなげている様子がうかがえます。本事例は、五つの力のうち、「体感する力」「共働する力」に結び付けられる取組であることがうかがえます。

（カ）大学

・高等教育機関は、学校であると同時に、その専門性から、社会における環境学習等を担う重要な主体の一つであり、教育機関として学生に向けた環境教育を実施するほか、多様な主体との連携・協働により専門性を活かした環境学習等を実施することが期待されます。

・表３（P.4）事例⑥では、地域との相互理解と連携を進めるための施設である「コミュニティ・コラボレーションセンター（CCC）」を取り上げています。同施設は、カリキュラムとしての講座や、学生団体の活動支援を担う施設として、2006（平成18）年に開設されました。学生による多様な主体との連携・協働が進められていることや、「自らが主体的に行動するための『行動力』が大切であると気づき、この力が培われたと思う」と、学生が自身の変容について感じており、行動することの重要性を日々の活動を通して認識していることなど、環境学習等の広がりがみられます。本事例は、五つの力すべてに結び付けられる取組であることがうかがえます。

ウ　社会における環境学習等の推進

（ア）事業者

・環境と経済の両立を目指した事業活動を進める中で、様々な環境問題の解決に寄与することができます。また、学校や地域との連携・協働により、事業者としてのノウハウやスキルを活かした環境学習等を積極的に行うことで、学校や地域へ寄与することができます。

・表３（P.4）事例⑦では、事業活動として「産業廃棄物処理と資源リサイクル」を行っている企業を取り上げています。新入社員から管理職という階層別研修では、持続可能な社会の発展に向けた事業活動を進める上で必要な環境意識を高めていることが分かります。また、限られた資源を活用するために産業廃棄物を可能な限りリサイクルしているほか、各工程における環境負荷の低減に努めており、事業活動を持続可能なものとしている様子がうかがえます。さらに、大学へのセミナーや地域住民への社会見学など、専門的な知識や技術等を活用した連携・協働を進めているほか、参加者からの意見が社員の環境への動機付けにつながっていることが分かります。本事例は、五つの力のうち、「活用する力」「共働する力」に結び付けられる取組であることがうかがえます。

（イ）NPO 等

・NPO 等は、持続可能な社会づくりに向けた様々な課題解決のための活動を行っています。それぞれの取組を活かして地域における環境学習等をさらに発展・拡大させていくことは、持続可能な社会を支える人づくりを充実させるための一翼を担うことにもつながります。

・表３（P.4）事例⑧では、尾張地域で環境保全活動をしている NPO を取り上げています。里山での調査等により専門的な知識や経験を蓄積するとともに、そこで得られたものを活用するため環境学習講座の実施や、学校等への出前

授業を行うことで、多様な主体との連携・協働につなげています。本事例は、五つの力のうち、「体感する力」「活用する力」「共働する力」に結び付けられる取組であることがうかがえます。

（ウ）地域コミュニティ

・自治会、老人クラブ、子ども会、PTA などの地域コミュニティは、目的に応じて様々な団体が活動を行っており、地域づくりの主要な担い手となっています。

・表３（P.4）事例⑨では、小学校の取組として「PTA・地域学校協働活動」を取り上げています。地域、家庭、学校が一体となり、よりよい学校生活の実現に向け、体験的な環境学習等も含めて児童をサポートしている様子がうかがえます。保護者が活動に参加することで、家庭内で共有が図られ、世代間の学び合いにつなげていることが分かります。本事例は、五つの力のうち、「共働する力」に結び付けられる取組であることがうかがえます。

（エ）行政（市町村）

・市町村には、多様な主体が持続可能な社会を支える人づくりとしての環境学習等に取り組める環境を整えることが求められます。また、基礎的自治体である市町村は、地域の多様な主体による地域特性を踏まえた環境学習等を進める役割を担っていると言えます。

・表３（P.4）事例⑩は、多様な主体により構成されている「環境パートナーシップ」を取り上げています。各関係者をつなぐ環境活動のプラットフォームを整備し、地域の環境課題等の解決に向けて取り組んでおり、地域の特性を活かした環境学習等を実施しているとともに、環境学習等を行う各主体への支援にもつながった取組であることが分かります。本事例は、五つの力のうち、「体感する力」「活用する力」「共働する力」に結び付けられる取組であることがうかがえます。

（オ）行政（県）

・県には、市町村と同様に、多様な主体が持続可能な社会を支える人づくりとしての環境学習等に取り組める環境を整えることが求められます。加えて、広域自治体として県内全域を対象とした環境学習等の推進のための環境づくりや、情報の収集・提供が期待されます。

・五つの力ごとの代表的な県の５事業は、表２（P.4）に示すとおりです。本計画では、取組の効果的な展開に向けて、「世代に応じた取組の拡充」「連携・協働の強化」を進めているところです。未就学児童から大学生を対象にした各事業では、世代に応じた環境学習等を実施しています。また、環境学習コーディネート事業では、多様な主体との連携・協働を進めるよう工夫しています。「行動する人づくり」を進めるために、環境学習等を通じて五つの力を育む事業を実施しています。

４　総括

本計画の進捗状況を把握するために、各主体に期待される主な取組を評価軸とし、アンケート結果等（資料２、３）を用いて、定量的評価を行いました。そして、事業（表２（P.4））及び事例（表３（P.4））についてステップアップ・ワークシート（資料４、５）を作成し、本計画の成果指標例を基に、一人一人に身に付けることが望ましい「五つの力」が育まれたかで定性的評価を行いました。この定量的評価及び定性的評価の結果を、以下にまとめました。

また、環境学習等は、自然、社会などの実体験を通して、より実践的に実感を持って学ぶことが重要です。定性的評価としてステップアップ・ワークシートに取りまとめた事例では、いずれにおいても連携・協働により、環境学習等を気づきや発見を得る実践的な学び合い・育ち合いにつなげていました。このため、「家庭」「学校」「社会」に関連する３事例を紹介します。

（１）家庭における環境学習等の推進

・家庭での日々の生活には、環境学習等の機会が数多くあり、特別に学習の機会を設けなくても、暮らしの中の様々な場面が気づきや学びのきっかけとなります。

・定量的評価では、毎日の暮らしでのエコアクションの実践は多くの方が取り組んでいるものの、負担感が大きい活動への参加が進んでおらず、意欲的な環境学習等への参加や世代間の学び合い・育ち合いは、あまり進展がみられないことが分かります。環境にやさしい生活を共に考え、互いの成長につなげていくため、環境学習等への参加や世代間の学び合い・育ち合いを進めていくことが求められます。

・定性的評価では、子どもが学んできたことを家庭で実践したり、家庭内で共有したりという様子から、家庭においてエコアクションを実践したり、世代間の学び合いにつなげていることが分かります。

・環境学習等の情報や機会の提供等を行い、自発的な活動を促すことで、家庭での取組を積み重ねていき、社会全体への課題解決に向けた力としていくため、家庭における学び合い・育ち合いや、多様な主体との連携・協働を一層促進することが求められます。

（２）学校における環境教育の推進

・教育を通じて、未来の創り手として必要な基礎知識や主体的に考え自主的に行動する力を養うことで、持続可能な社会の実現に向け、様々な課題の解決のために考え、行動できる人材の育成を行うことができます。

・定量的評価では、各発達段階において、ほとんどの学校で総合的な学習（探究）の時間等を活用し、体験学習や SDGs の実現に向けた環境教育は実施されています。環境教育を実施していくための人材育成や、多様な主体との連携・協働を促していく必要があることが分かります。

・定性的評価では、各事例から発達段階に応じた環境教育が実施されており、さらに、「自らが主体的に行動するための『行動力』が大切であると気づき、この力が培われたと思う」と、学生が自身の変容について感じており、行動することの重

要性を日々の活動を通して認識していることなど、環境学習等の広がりがみられます。

・環境教育に求められる役割や手法は発達段階ごとに異なり、各段階に応じた内容を実施することで、社会の一員として、実社会における課題に対して向き合い、解決に向けて主体的に行動することのできる人材の育成へとつながっていきます。地域や学校の実態に応じた環境教育を行っていくために、必要な情報等を得られるような研修の機会や、多様な主体との交流の場を設けることで、連携・協働につなげ、より社会に開かれた教育を進めていくことが求められます。

（３）社会における環境学習等の推進

ア　事業者

・環境と経済の両立を目指した事業活動を進める中で、様々な環境問題の解決に寄与することができます。また、学校や地域との連携・協働により、事業者としてのノウハウやスキルを活かした環境学習等を積極的に行うことで、学校や地域へ寄与することができます。

・定量的評価では、いずれの取組も高い水準にあることが分かります。引き続き、環境と事業活動との関わりについて社員の意識を高めつつ、SDGs に関する取組を推進していくことが期待されます。また、事業者は、自らが持つノウハウ、人材、施設等を活かすために、環境学習等に関する情報の発信が大切だと考えていることが分かります。

・定性的評価では、限られた資源を活用することで、事業活動を持続可能なものとしているほか、専門的な知識や技術等を活用した連携・協働を進めており、こうした取組が社員の環境への動機付けにつながっていることが分かります。

・持続可能な社会の実現に向けて、環境に配慮した事業活動やその発信に加え、これまでに蓄積した専門性を活用し、多様な主体との連携・協働を進めていくことが求められます。

イ　NPO 等

・NPO 等は、持続可能な社会づくりに向けた様々な課題解決のための活動を行っています。それぞれの取組を活かして地域における環境学習等をさらに発展・拡大させていくことは、持続可能な社会を支える人づくりを充実させるための一翼を担うことにもつながります。

・定量的評価では、多くの団体が環境学習等を他の主体と連携・協働しながら実施していることが分かります。コーディネーター的な役割を担っている団体の割合にはあまり進展がみられないため、NPO 等の持つネットワークや経験などの強みを活かすことのできる連携・協働につなげていくことが求められます。

・定性的評価では、専門的な知識や経験を蓄積するとともに、そこで得られたものを活用するため環境学習講座の実施や、学校等への出前授業を行うことで、多様な主体との連携・協働につなげていることが分かります。

・ネットワークや経験などの強みを活かす連携・協働や、コーディネーター的な役割により、地域における環境学習等をさらに発展させていくことが求められます。

ウ　地域コミュニティ

・自治会、老人クラブ、子ども会、PTA などの地域コミュニティは、目的に応じて様々な団体が活動を行っており、地域づくりの主要な担い手となっています。

・PTA 向けアンケート[3]から、環境の保全・美化に取り組んでいる団体では、機会を捉えた環境学習を実施していることが分かります。

・定性的評価では、地域、家庭、学校が一体となり、よりよい学校生活の実現に向け、体験的な環境学習等も含めて児童をサポートしている様子や、保護者が活動に参加することで、家庭内で共有が図られ、世代間の学び合いにつなげていることが分かります。

・地域ぐるみの様々な環境学習等の機会を提供することや、あらゆる世代が参加しやすいしかけをつくることで、主体間の連携・協働、世代間の学び合い・育ち合いにつなげていくことが求められます。

エ　行政

・多様な主体が持続可能な社会を支える人づくりとしての環境学習等に取り組める環境を整えることが求められます。市町村は、地域の多様な主体による地域特性を踏まえた環境学習等を進める役割を担っていると言えます。県には、県内全域を対象とした環境学習等の推進のための環境づくりや、情報の収集・提供が期待されます。

・定量的評価において、市町村では、多様な主体と連携・協働しながら、地域の特性を活かした環境学習等や、各主体への支援を実施していることが分かります。県では、県内全域の環境学習施設等をつなぐネットワークにより、環境学習等の推進のための環境づくりを実施しています。

・定性的評価において、市町村では、各関係者をつなぐ環境活動のプラットフォームを整備し、地域の環境課題等の解決に向けて取り組んでおり、地域の特性を活かした環境学習等や、環境学習等を行う各主体への支援にもつながる取組を実施していることが分かります。県では、未就学児童から大学生を対象にした各事業においては、世代に応じた環境学習等を実施しており、環境学習コーディネート事業においては、多様な主体との連携・協働を進めるよう工夫しているほか、各主体への事例調査により、優れた取組の情報収集・提供を行っています。「行動する人づくり」を進めるために、環境学習等を通じて五つの力を育む事業を実施しています。

・優れた取組の情報収集・提供をすること、環境学習施設等の連携の充実、各主体をつなぐコーディネート機能の充実など、連携・協働を促進するための取組を一層進め、家庭、学校、事業者、NPO 等、地域コミュニティなどの多様な主体が環境学習等を行う環境を整えることが求められます。

---

[3] 自治会、老人クラブ、子ども会、PTA などの地域コミュニティは本計画で追加した主体であり、2016（平成 28）年度のアンケート結果がないため、評価の対象外。

連携・協働からみた各主体の取組状況

「家庭」「学校」に関連した取組：蒲郡あさひこ幼稚園

表３（P.4）事例①　資料５（P.65）

・「お父さんウィーク」として、父親が自由に保育に参加できる日を設定し、父親にも幼稚園での子どもの様子を知ってもらう機会を設けることで、幼稚園と家庭をつなぎ、子育ての楽しさを共有しています。

・保育ドキュメンテーションとして、ブログ、SNS 等で毎日発信を行っており、保護者に保育内容を共有し、幼稚園と家庭の生活が連続したものとなるようにしています。

・地域の高齢者が、子どもに昔の遊びを伝えることで、世代を超えた学び合いを行っています。

・保護者や地域の方と積極的に園の様子を共有し、良好な関係を構築することで、より一層連携・協働しやすい環境づくりを行っています。

五感を使った自然体験

「学校」に関連する取組：愛知県立安城高等学校

表３（P.4）事例④　資料５（P.71）

・高校生のうちからキャリアに視点を置いて、自らの在り方・生き方を考えられるように学校教育活動全体で学びを進めており、あんじょう SDGs 共創パートナーとなっている地元企業等から協力を得て連携する SDGs 探究学習がその中核となっています。

・第１学年で SDGs に関して得た知識を活かし、興味・関心を持って探究できるよう、生徒自身がテーマを選択しています。第２・３学年では、テーマごとにクラス・学年の枠を超えたグループ編成とすることで、生徒同士が学び合いにより、幅広い視点を持てるよう工夫しています。

・あんじょう SDGs 共創パートナーとして、生徒の学習をサポートしている企業は、生徒の主体性を伸ばすために、新たな気づきを促すような学びの場をサポートしています。各企業とつながりのある団体、担当者の個人的なつながりで、別の企業や大学関係者とゼミナールとを接続し、生徒の学びを膨らませるよう工夫しています。学校と地域が一体となり、より社会に開かれた教育を行っています。

探究学習の様子

「社会」に関連する取組：大府市

表３（P.4）事例⑩　資料５（P.83）

・「大府市環境パートナーシップ」は、市民団体・地域コミュニティ・事業者など、環境づくりに関心のある地域に密着したプレイヤーの組織として 2003（平成 15）年度に発足した「環境活動プラットフォーム」です。

・2019（令和元）年度に、従来までの行政主導で行う会議形式から、メンバー同士が課題・提案を持ち寄り、その解決に向けた意見交換ができる場へと方向転換をしました。オープンスペースで会議を開催するほか、メンバー同士が互いを尊重し合うためのルールを説明するなど、各主体が意見交換をしやすい環境づくりを行っています。
・各メンバーが持つ専門的な知識や経験を活かし合うことや、メンバー同士が会議を通して、連携・協働先を見つけることができ、環境保全活動等が広がっています。

意見交換の様子

５　今後の愛知県環境学習等行動計画 2030 の推進について

SDGs の普及も背景とした、「誰一人取り残さない」公正な社会の実現を目指すことの認識の高まりなどから、社会変革における若者の参画や人材確保等が重要となっています。また、各主体・世代間の学び合い・育ち合いの場では、多様な視点、能力等が育まれることが期待されるため、以下を踏まえた環境学習等を推進していきます。

・「行動する人づくり」を一層促進するため、必要な情報等を得られるような研修の機会や、多様な主体との交流の場を設けるなど、コーディネート機能を充実させ、各主体の連携・協働を促していきます。
・子どもに最も身近であるものの、環境学習等の進展が把握しにくい家庭や地域コミュニティに対して、情報収集・提供をより積極的に行い、生活や身近な活動に関わる環境学習等を促進していきます。
・各世代の環境学習等に十分には対応できていない現状を踏まえ、多様な主体が行う環境学習等の情報を蓄積し、インターネット等を通じて分かりやすく発信するなど、優れた事例を広く活用できる体制づくりを進めていきます。
・様々な機会を環境学習の場として活用できるよう、身近な事例を具体的に紹介するなど、気軽に参加できる環境を創出して自発的な行動を促し、環境問題を自分のこととして主体的に取り組むことのできる「行動する人づくり」を進めていきます。

資　料

資料１

愛知県環境学習等行動計画 2030 中間評価【概要版】

行動計画の目的

持続可能な社会を支える「行動する人づくり」

行動計画の概要

本県では、「環境教育等による環境保全の取組の促進に関する法律（平成 15 年法律第 130 号）」に基づき、2018（平成 30）年３月に、愛知県環境学習等行動計画を見直し、本県の環境学習の方向性を示すものとして「愛知県環境学習等行動計画 2030」を策定しました。

持続可能な社会を支える「行動する人づくり」を進めるに当たり、取り組むべき環境学習等の課題として、行動につなぐ力を育むこと、そしてそのために環境学習等の機会の拡充と質の向上を図ることを目標として、学びを行動につなぐため、県民一人一人に身に付けることが望ましい「五つの力」を育むことを念頭に置きながら、「家庭」「学校」「社会」において各主体が環境学習等に取り組めるようにすることで、持続可能な社会を支える「行動する人づくり」を推進していきます。

行動計画の期間

2018（平成 30）年度から 2030（令和 12）年度まで

学びを行動につなぐ「五つの力」

◆**体感する力**：自然の素晴らしさや環境の大切さを感じ取る力

◆**理解する力**：私たちの活動が環境に影響を与えていることを、自分のこととして捉える力

◆**探究する力**：環境問題を多面的に考察し、その本質や解決策を見つけ出す力

◆**活用する力**：環境を守るために必要な知識やスキルを自ら身に付け、活かす力

◆**共働する力**：共に未来を創り出すために、みんなとつながる力

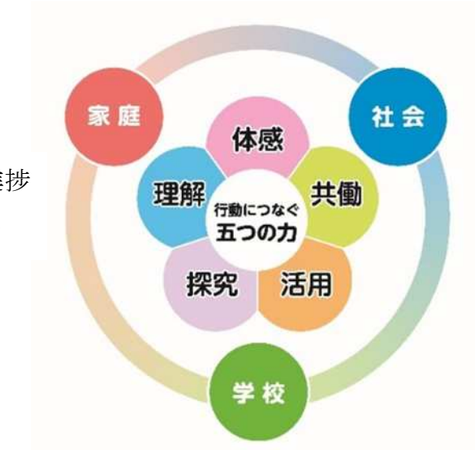
行動計画の推進

推進体制

愛知県環境教育等推進協議会を中心に、取組の推進、進捗状況の把握、施策へのフィードバックなどを実施します。

進捗状況の把握

・代表的な取組の進捗を数値的に把握（定量的評価）
・各種アンケートによる成果の把握（定性的評価）



中間評価の目的

本計画の計画期間（2018（平成 30）年度から 2030（令和 12）年度）の中間年度である 2024（令和６）年度を迎えるに当たり、計画の進捗状況を把握し、各主体における環境学習等の状況を取りまとめ、今後の環境学習等の推進に活用するために、中間評価を実施しました。

また、本計画の目的の達成に向けて課題等について整理し、今後の計画推進の方向性を明らかにしました。

中間評価の対象期間

本計画開始の 2018（平成 30）年度から 2023（令和５）年度までの６年間

中間評価の方法

定量的評価

本計画の各主体に期待される主な取組を評価軸として、2022（令和４）年度及び 2016（平成 28）年度に実施したアンケート結果や、毎年度、愛知県環境教育等推進協議会で報告している環境学習等に関する取組内容を用いて、定量的評価を行いました。

定性的評価

「五つの力」ごとの代表的な県の５事業及び各主体における取組事例についてステップアップ・ワークシートを作成し、本計画の成果指標例を基に、一人一人に身に付けることが望ましい「五つの力」が育まれたかで定性的評価を行いました。

中間評価（定量的評価・定性的評価）

<table>
<tr><th colspan="2">主体</th><th>期待される主な取組</th><th colspan="2">評価のポイント</th><th>総括</th></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="2">家庭
（県民）</td><td rowspan="2">・直接体験（身近な自然の体験等）の機会の確保
・エコアクションの実践
・世代間の学び合い・育ち合い</td><td>定量的評価</td><td>・エコアクションの実践は高い水準にある。
・負担感の大きな活動への参加が進んでおらず、意欲的な環境学習等の参加や、世代間の学び合い・育ち合いは、あまり進展がみられない。</td><td rowspan="2">・環境学習等の情報や機会の提供等を行い、自発的な活動を促すことで、家庭における学び合い・育ち合いや、多様な主体との連携・協働を一層促進することが求められる。</td></tr>
<tr><td>定性的評価</td><td>・子どもが学んできたことを家庭で実践や共有している。
・エコアクションの実践や、世代間の学び合いにつなげている。</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="2">学校
（幼稚園等
小学校
中学校
高等学校
特別支援学校
大学）</td><td rowspan="2">・発達段階に応じた環境教育の実施
・体験学習・問題解決的な学習の充実
・ESD の視点を意識した環境教育の実施
・多様な主体との連携・協働による環境教育の実施
・学校の外へと発展する環境教育の実施
・環境教育や ESD の推進のための人材育成と研究</td><td>定量的評価</td><td>・各発達段階において、総合的な学習（探究）の時間等を活用し、体験学習や SDGs の実現に向けた環境教育は実施されている。
・環境教育を実施していくための人材育成や、連携・協働を促していく必要がある。</td><td rowspan="2">・地域や学校の実態に応じた環境教育を行っていくために、必要な情報等を得られるような研修の機会や、多様な主体との交流の場を設けることで、連携・協働につなげ、より社会に開かれた教育を進めていくことが求められる。</td></tr>
<tr><td>定性的評価</td><td>・発達段階に応じた環境教育が実施されている。
・行動することの重要性を認識しており、環境学習等の広がりがみられる。</td></tr>
<tr><td rowspan="6">社会</td><td rowspan="2">事業者</td><td rowspan="2">・社員教育の中での環境学習等の実施
・事業活動での環境負荷低減を通した実践的な環境学習等の実施
・多様な主体との連携・協働による環境学習等の実施</td><td>定量的評価</td><td>・事業者に期待されている取組は実施されている。
・事業者は、自らが持つノウハウ、人材、施設等を活かすための情報の発信が大切である。</td><td rowspan="2">・環境に配慮した事業活動やその情報発信が期待される。
・これまでに蓄積した専門性を活用し、多様な主体との連携・協働を進めていくことが求められる。</td></tr>
<tr><td>定性的評価</td><td>・限られた資源を活用することで事業活動における環境負荷の低減に努めている。
・専門的な知識や技術等を活用した連携・協働により、社員の環境への動機付けにつなげている。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">NPO 等</td><td rowspan="2">・地域における発展的な環境学習等の実施</td><td>定量的評価</td><td>・多くの団体が連携・協働しながら環境学習等を実施している。
・コーディネーター的な役割を担っている団体の割合にはあまり進展がみられない。</td><td rowspan="2">・ネットワークや経験などの強みを活かす連携・協働を進めていくことが期待される。
・コーディネーター的な役割により、地域における環境学習等をさらに発展させていくことが求められる。</td></tr>
<tr><td>定性的評価</td><td>・専門的な知識や経験を蓄積している。
・環境学習講座等を実施することで、多様な主体との連携・協働につなげている。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">地域
コミュニティ</td><td rowspan="2">・地域の行事や課題を素材にした環境学習等の実施</td><td>定量的評価</td><td>－
（PTA では、環境の保全・美化に取り組んでいる団体がある。）</td><td rowspan="2">・地域ぐるみの環境学習等により、主体間の連携・協働、世代間の学び合い・育ち合いにつなげていくことが求められる。</td></tr>
<tr><td>定性的評価</td><td>・PTA・地域学校協働活動を行い、よりよい学校生活の実現に向けてサポートを行っている。
・学校の取組に保護者が参加することで、家庭内での共有が図られ、世代間の学び合いにつなげている。</td></tr>
</table>

<table>
<tr><th colspan="2">主体</th><th>期待される主な取組</th><th colspan="2">評価のポイント</th><th>総括</th></tr>
<tr><td rowspan="2">社会</td><td rowspan="2">行政</td><td rowspan="2">市町村
・地域の特性を活かした環境学習等を実施できる環境づくり
・事業体としての環境負荷低減に向けた、職員への環境学習等の実施
・環境学習等を行う各主体への支援

県
・地域の特性を活かした環境学習等を実施できる環境づくり
・事業体としての環境負荷低減に向けた、職員への環境学習等の実施
・環境学習等を行う各主体への支援
・県内全域を対象とした環境学習等の推進のための環境づくり
・環境、環境学習等に関する情報の収集・提供</td><td>定量的評価</td><td>市町村
・多様な主体と連携・協働している。
・地域の特性を活かした環境学習等や各主体への支援を実施している。

県
・環境学習講座や環境学習施設間の情報共有等の強化により、環境学習等の推進のための環境づくりを実施している。</td><td rowspan="2">・優れた取組の情報収集・提供が期待される。
・環境学習施設等の連携の充実、各主体をつなぐコーディネート機能の充実など、連携・協働を促進するための取組を一層進め、多様な主体が環境学習等を行う環境を整えることが求められる。</td></tr>
<tr><td>定性的評価</td><td>市町村
・環境活動のプラットフォームの整備や、地域の特性を活かした環境学習等を実施している。
・環境学習等を行う各主体への支援を実施している。

県
・世代に応じた環境学習等を実施している。
・環境学習コーディネート事業では、多様な主体との連携・協働を進めるよう工夫している。
・事例調査で、優れた取組の情報収集・提供を実施している。
・「行動する人づくり」を進めるために、環境学習等を通じて五つの力を育む事業を実施している。</td></tr>
</table>

今後の行動計画の推進について

SDGs の普及も背景とした、「誰一人取り残さない」公正な社会の実現を目指すことの認識の高まりなどから、社会変革における若者の参画や人材確保等が重要となっています。また、各主体・世代間の学び合い・育ち合いの場では、多様な視点、能力等が育まれることが期待されるため、以下を踏まえた環境学習等を推進していきます。

・「行動する人づくり」を一層促進するため、必要な情報等を得られるような研修の機会や、多様な主体との交流の場を設けるなど、コーディネート機能を充実させ、各主体の連携・協働を促していきます。

・子どもに最も身近であるものの、環境学習等の進展が把握しにくい家庭や地域コミュニティに対して、情報収集・提供をより積極的に行い、生活や身近な活動に関わる環境学習等を促進していきます。

・各世代の環境学習等に十分には対応できていない現状を踏まえ、多様な主体が行う環境学習等の情報を蓄積し、インターネット等を通じて分かりやすく発信するなど、優れた事例を広く活用できる体制づくりを進めていきます。

・様々な機会を環境学習の場として活用できるよう、身近な事例を具体的に紹介するなど、気軽に参加できる環境を創出して自発的な行動を促し、環境問題を自分のこととして主体的に取り組むことのできる「行動する人づくり」を進めていきます。

資料２

令和４年度実施アンケート結果

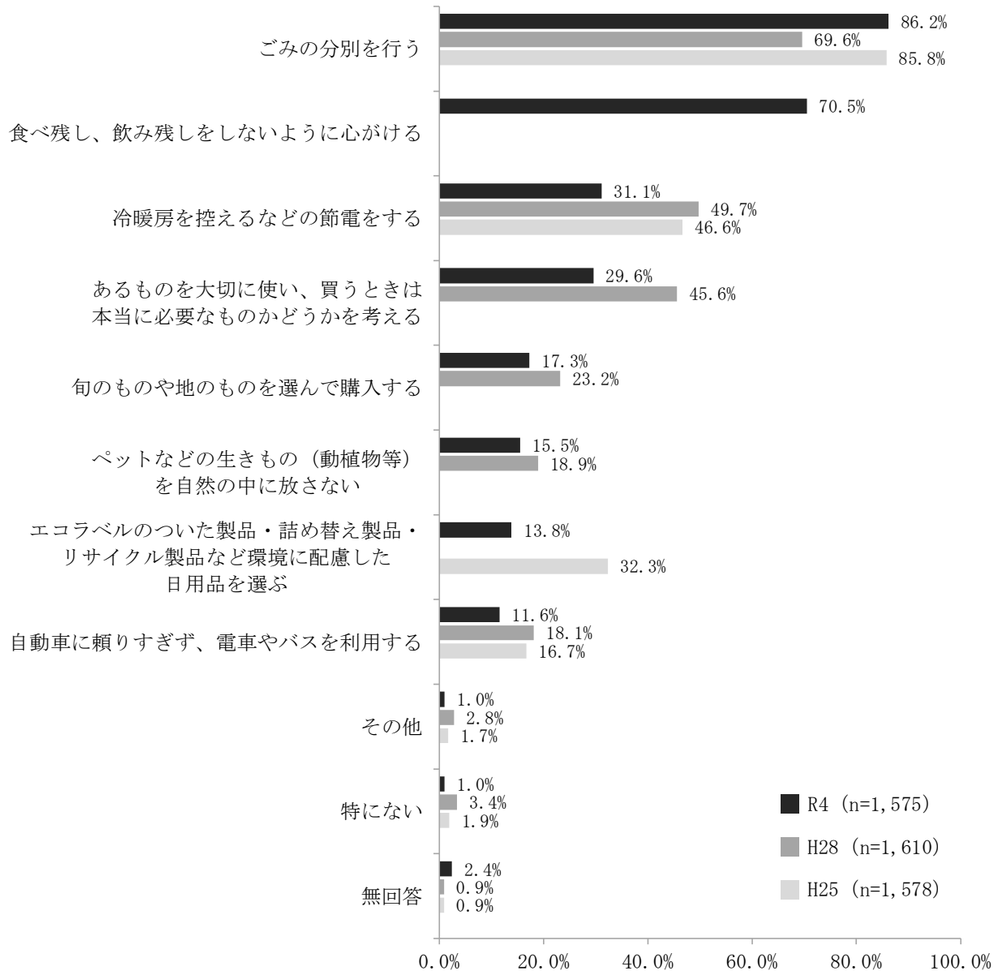
Ⅰ　県民

県政世論調査

2022(R4)　:1,575/3,000 者(52.5%)　　2021(R3)　:1,647/3,000 者(54.9%)

2016(H28):1,610/3,000 者(53.7%)　　2013(H25):1,578/3,000 者(52.6%)

問１　あなたは、毎日の暮らしの中でどのようなエコアクションをしていますか。【○は複数可】

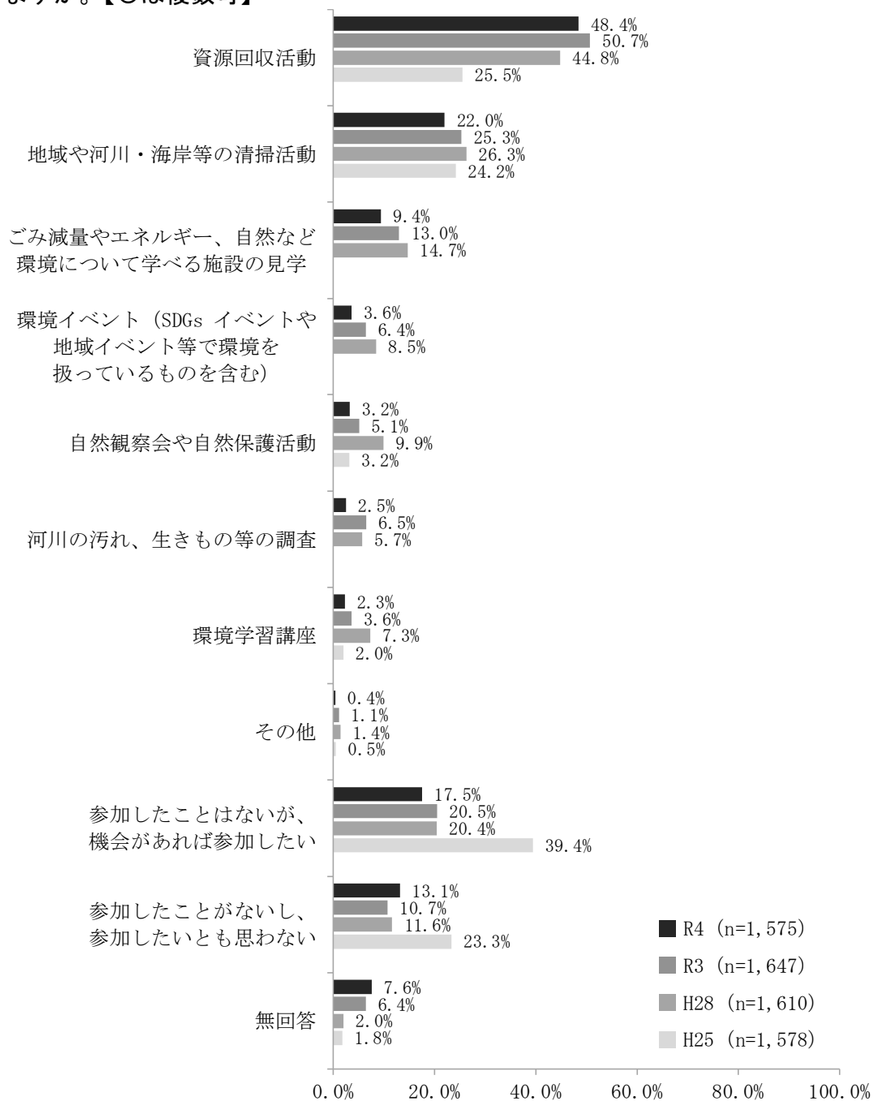


毎日の暮らしの中でのエコアクションに取り組む人の割合は、96.6%であり、2016(H28)［95.7%］、2013(H25)［97.2%］とほぼ同様の高い割合となった。

「自動車に頼りすぎず、電車やバスを利用する」といった利便性を犠牲にするようなエコアクションは実践率が低い傾向にある。

問２　一人一人が環境を大切に思う心を持ち、環境に配慮した行動へつなげていくためには、環境学習や環境保全活動に参加していくことが効果的です。

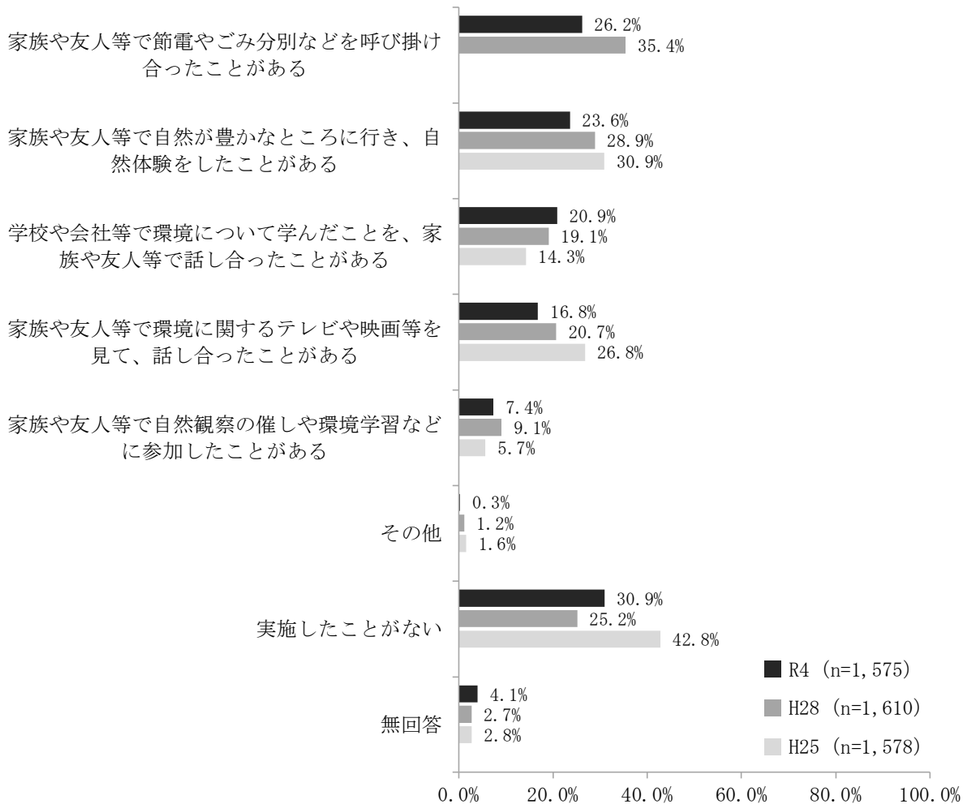
あなたはこれまでに、どのような環境学習や環境保全活動に参加したことがありますか。【○は複数可】



環境学習や環境保全活動に参加したことがある、又は機会があれば参加したいと思っている人の割合は、79.3%であり、2021(R3)［82.9%］や2016(H28)［86.4%］よりもやや減少している。

「資源回収活動」や「地域や河川・海岸等の清掃活動」などの地域のつながりによる活動への参加状況は比較的高い一方、自主的参加意欲を要する活動である「河川の汚れ、生きもの等の調査」「環境学習講座」は低い水準であった。

問３　一人一人が日常生活において環境に配慮した取組を行うために、あなたは、家族や友人等と共に、次のうちどれをしたことがありますか。【○は複数可】



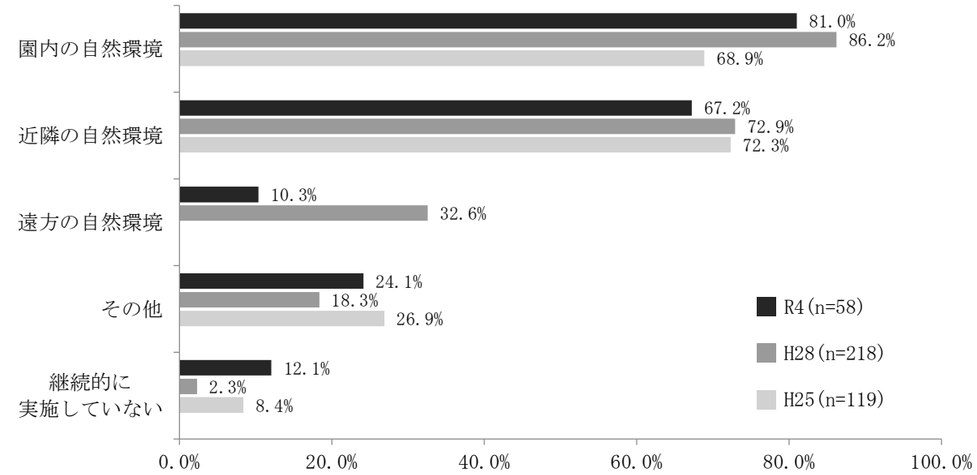
家族や友人等で環境についての話し合いや環境活動への参加をした人の割合は、65.0%であり、2016(H28)［72.1%］よりもやや減少している。

「学校や会社等で環境について学んだことを、家族や友人等で話し合ったことがある」については増加傾向にあった。

Ⅱ　幼稚園・認定こども園

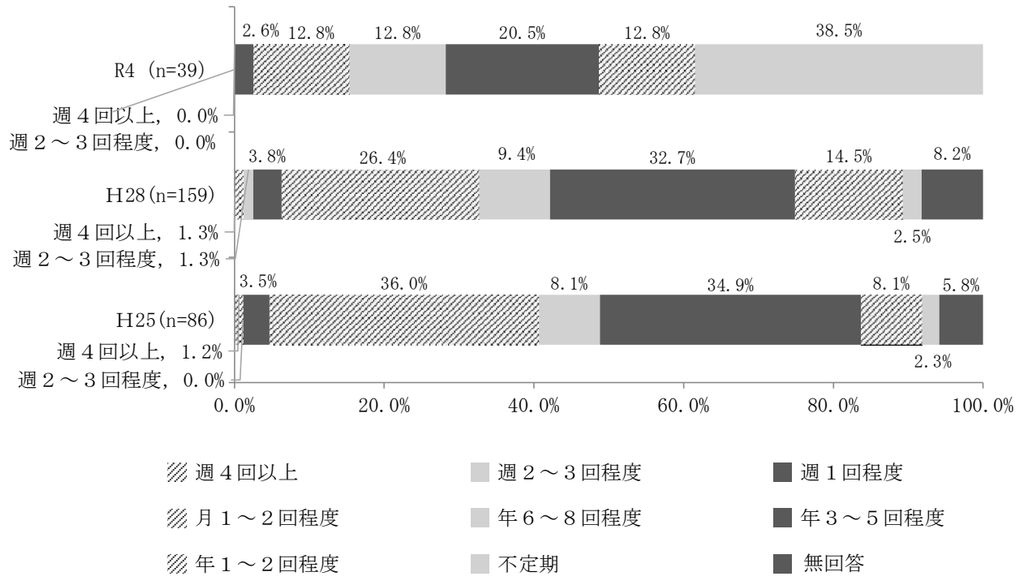
私立幼稚園、私立幼稚園型認定こども園、特別支援学校幼稚部
2022(R4)　:58/344 園(16.9%)
2016(H28):218/421 園(51.8%)　　2013(H25):119/421 園(28.3%)

問１　幼児教育において自然体験は継続的に実施することが望ましいと考えられていますが、貴園では自然体験をどのような場所で実施していますか。【○は複数可】



〈その他〉（抜粋）
・教室内での生物の飼育・観察　　・野菜収穫体験

【近隣の自然環境での実施頻度】

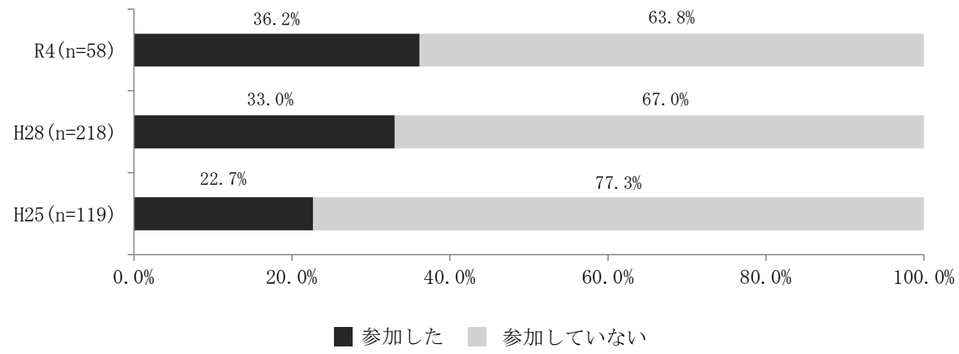


問２　継続的な自然体験を実施したことで、幼児の行動や発言に変化はありましたか。

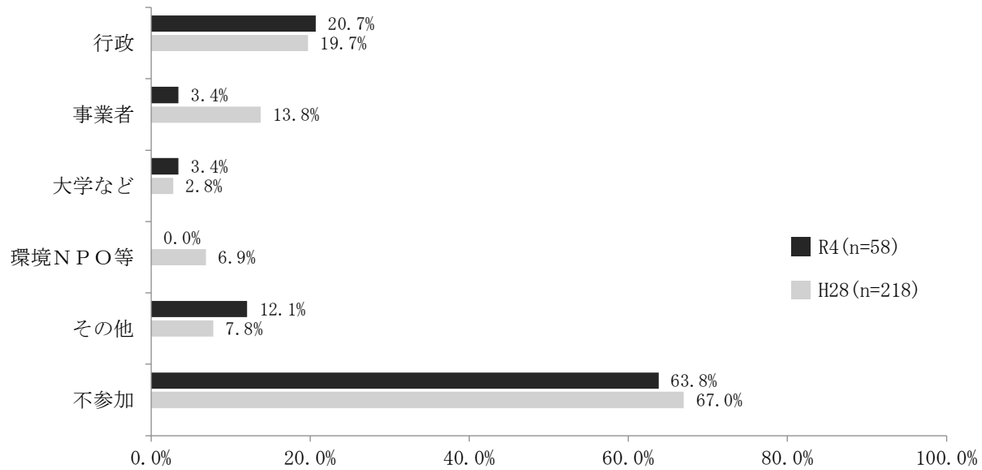
あった　　４８園
なかった　　３園

〈あった〉（抜粋）
・昆虫に興味を持つ、花が咲く、紅葉など自然の変化に興味を持つ
・身近に触れた環境に生息する生きものに興味を持つようになった。また、生態系に対する造詣を深める幼児が増えた。
・虫を触ることができるようになった。季節の移り変わりを知ることができた。食物を育て苦手な野菜でも食べられるようになった。
・意欲的に図鑑で調べたり、水かけをして成長を楽しむ姿が見られるようになった。且つ、優しい気持ちが、芽生えた。
・植物の生長や生物の変化に気付くことが増えた。また、毎年繰り返し同じ体験や題材を扱うことで、経験が積み重なっていき、過去と比べて気付いたことや分かったことを話すようになった。

問３　教職員が環境教育や自然体験に関する研修に参加しましたか。【○は複数可】



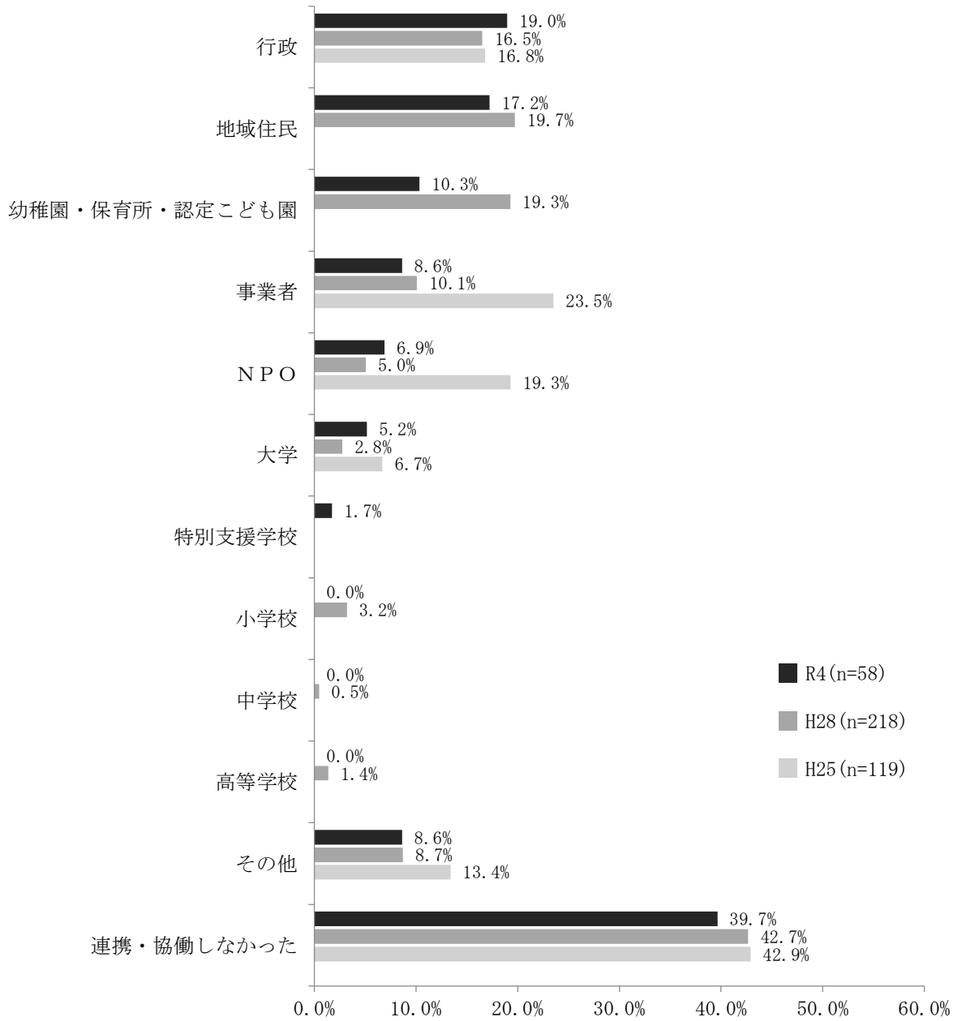
【参加した研修の実施者】



〈その他〉（抜粋）
・私立幼稚園連盟
・市の幼稚園連盟
・系列の幼稚園での研修

〈不参加の理由〉（抜粋）
・時間の余裕がない
・都合がつかなかった為
・必要性を感じなかった
・魅力的な環境教育や自然体験の研修が見つからなかった
・自園の活動で十分

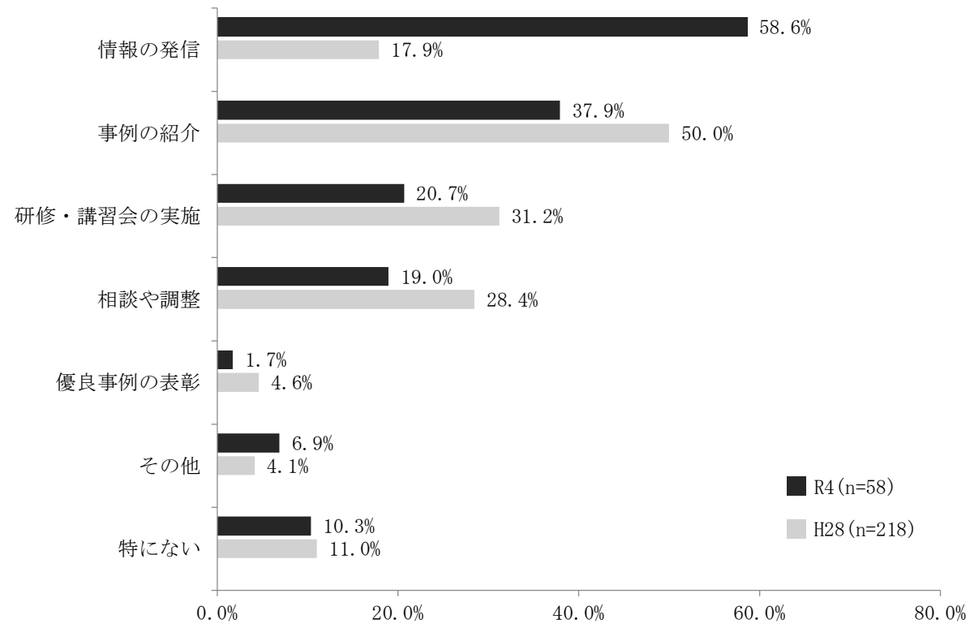
問４　環境教育や自然体験を実施する際、どのような主体と連携・協働して実施しましたか。【○は複数可】



〈その他〉（抜粋）
・知り合いの畑の方
・郵便局

〈連携・協働しなかった理由〉（抜粋）
・連携できる機関を見つけることができなかったため
・園内で普段から行っていることで環境教育や自然体験は十分と思います
・園単独で実施

問５　他の主体と連携・協働することで、より効果的で実感を伴った自然体験・環境教育の実施につながることが期待されます。
　こうした取組を推進していくうえで、愛知県はどのような施策に力を入れるべきだと思いますか。【○は２つ】



〈その他〉（抜粋）
・連携・協働して自然体験・環境教育を行う為の会場の設置・提供
・園庭の環境改善に伴う補助費の増額

問６　貴園が実施している環境教育、自然体験、環境保全活動（ごみの分別、グリーンカーテン等）などで、力を入れている取組、紹介したい事例がありましたら、御記入ください。【自由記載】

１９事例

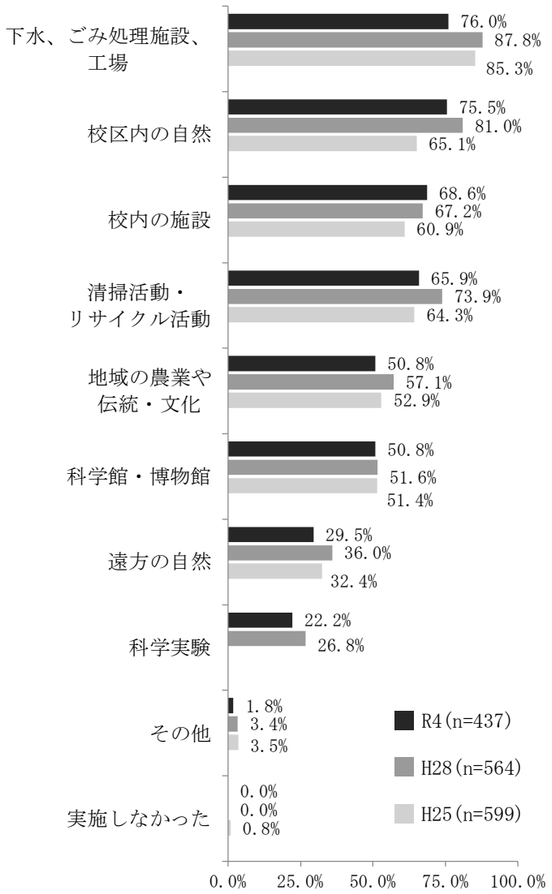
Ⅲ　学校

県内各学校（国立・名古屋市立を除く）
小　2022(R4):437/704 校(62.1%)　2016(H28):(78.7%)　2013(H25):(83.8%)
中　2022(R4):205/324 校(63.3%)　2016(H28):(77.3%)　2013(H25):(75.4%)

県内各学校（国立・名古屋市立を除く）
高　2022(R4):128/206 校(62.1%)　2016(H28):(72.3%)　2013(H25):(87.8%)
特支 2022(R4): 30/ 36 校(83.3%)　2016(H28):(87.9%)　2013(H25):(89.7%)

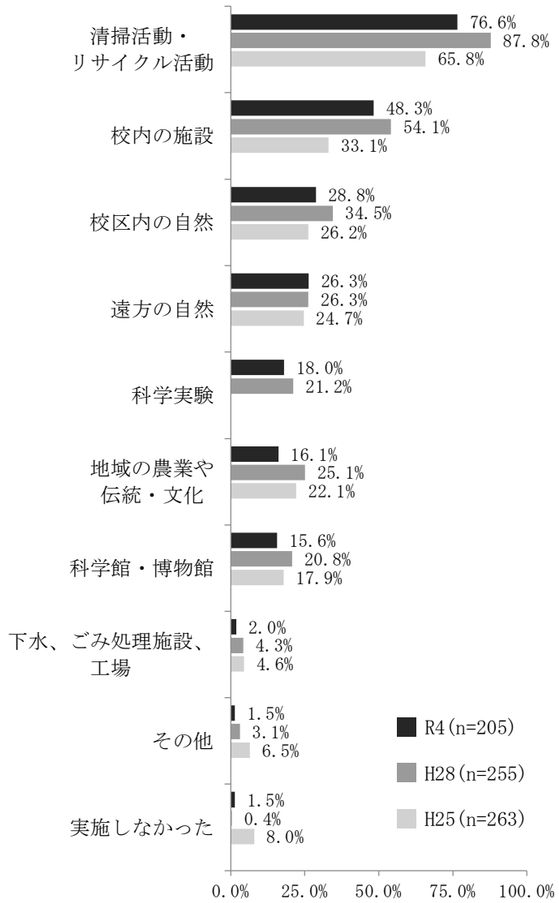
問１　環境教育は、地域の自然や社会を素材として活用し、人と環境の関わりを親しみと実感を伴って学ぶことが大切です。
貴校は、どのような実体験を取り入れた環境教育を実施していますか。【〇は複数可】

【小学校】



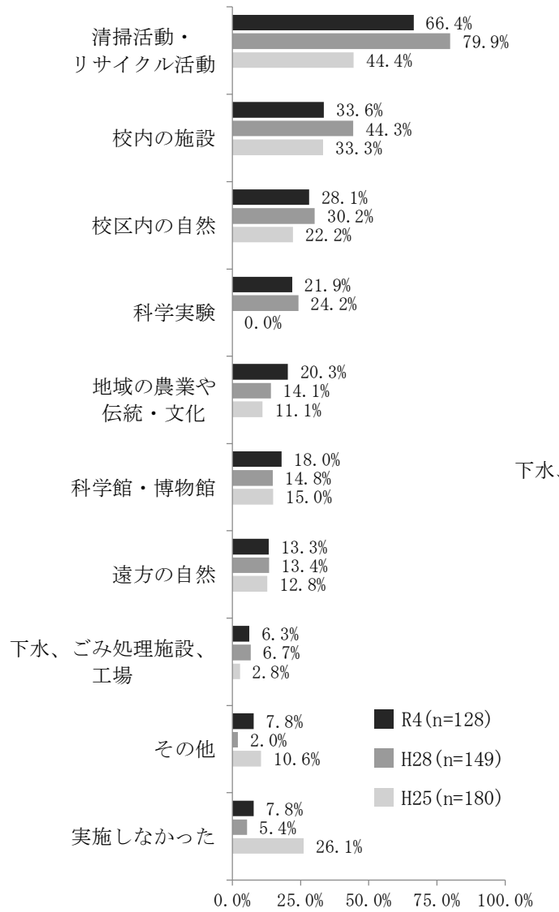
〈その他〉(抜粋)
・環境学習にとりくむ企業の協力
・野鳥観察、緑の少年団の活動

【中学校】



〈その他〉(抜粋)
・ゲンジボタルの保護活動
・菜の花プロジェクト

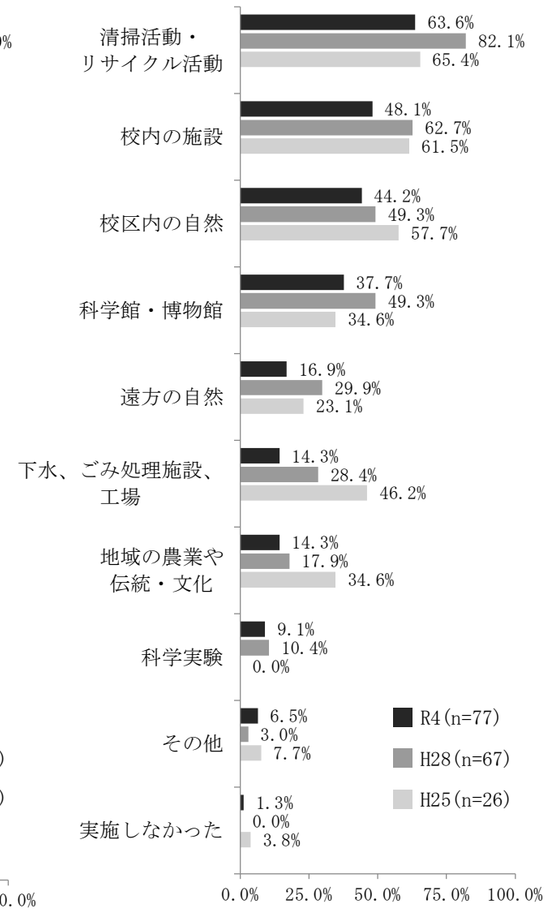
【高等学校】



〈その他〉(抜粋)
・SDGS を推進する企業との連携
・都市型養蜂

〈実施しなかった理由〉(抜粋)
・他にやりたいことがあり、時間がないから

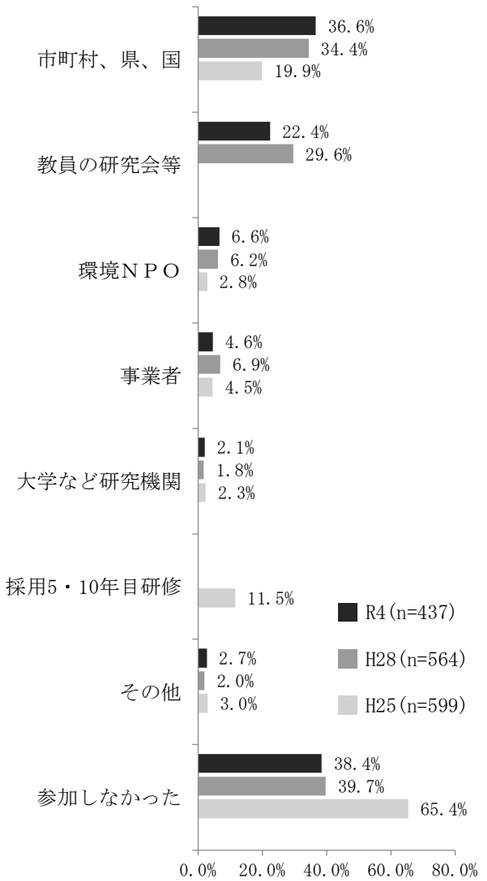
【特別支援学校】



〈その他〉(抜粋)
・竹害から山を守るために竹を使った製品作り、間伐材を使った製品作り

問２　環境教育をより推進するために、環境教育に関する教員向けの研修等が様々な場面で実施されることが期待されています。
貴校の教職員は、どのような環境教育に関する研修等に参加しましたか。
【〇は複数可】

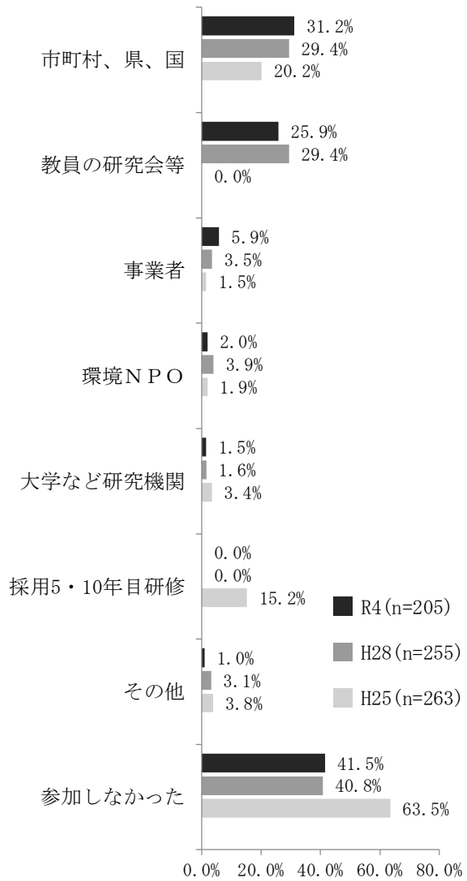
【小学校】



〈その他〉（抜粋）
・地域の方が行う環境教育の会に参加
・校内職員による現職研修

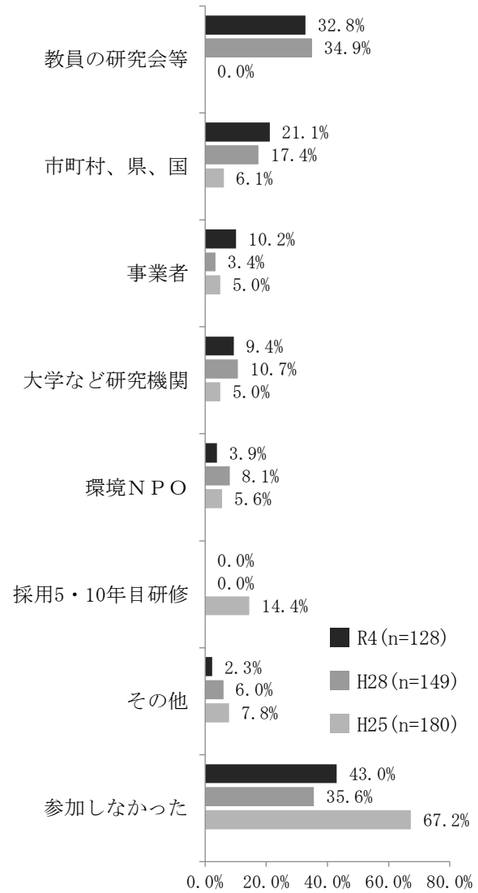
〈参加しなかった理由〉（抜粋）
・研修会に参加できる余裕がなかった
・他分野の研修へ参加したため
・環境教育について、周知がなされていなかったから

【中学校】



〈参加しなかった理由〉（抜粋）
・時間的な余裕がない
・どのような研修があるか、知らなかったため
・必要があるとは感じなかった

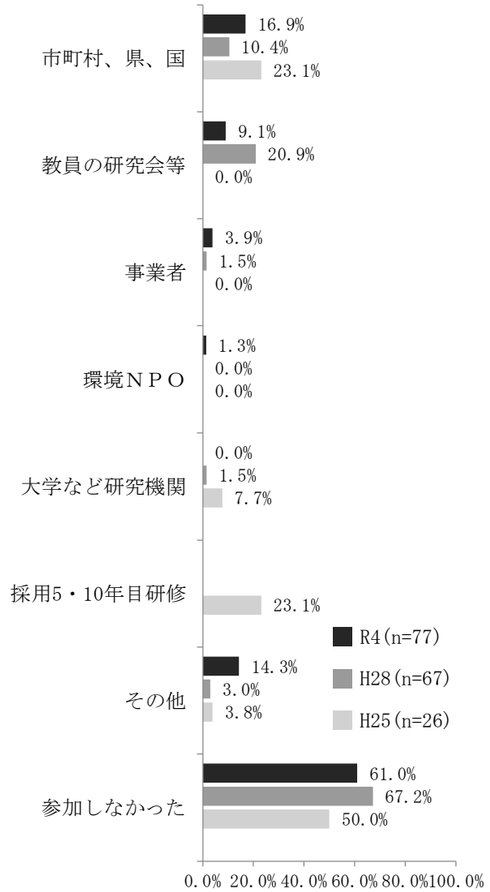
【高等学校】



〈その他〉（抜粋）
・JICA 主催の研修

〈参加しなかった理由〉（抜粋）
・希望者がいなかった
・多忙のため
・本校にとって適切なものがなかった

【特別支援学校】

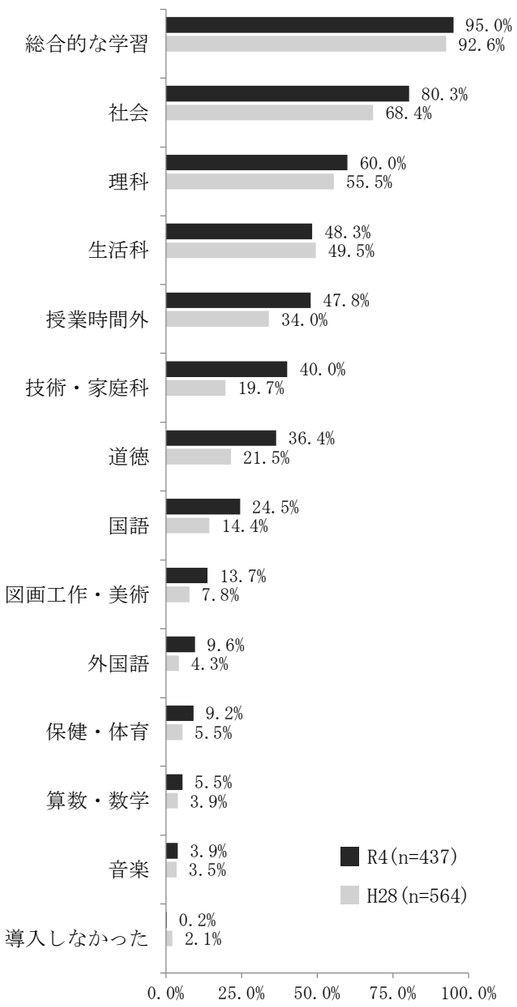


〈その他〉（抜粋）
・ｅラーニング
・ユネスコスクール関係機関主催の研修

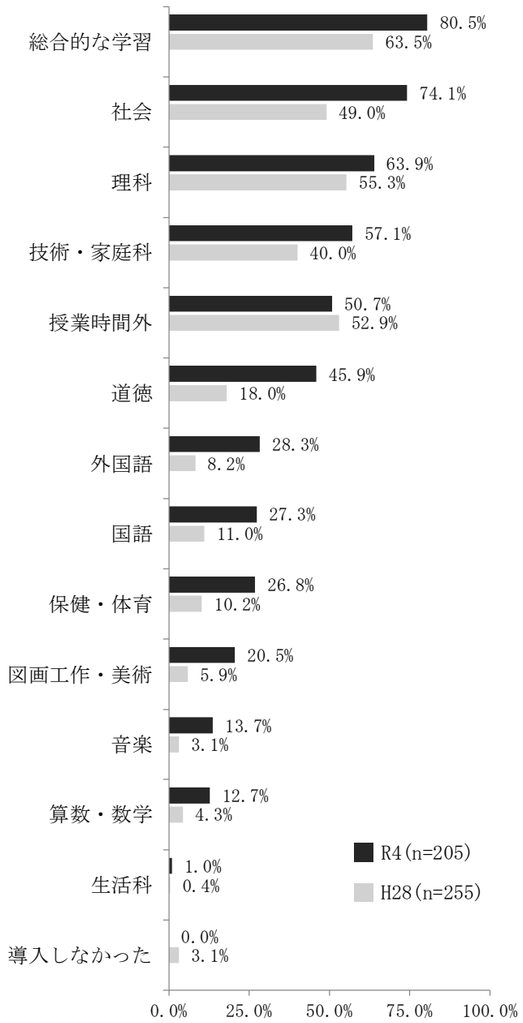
〈参加しなかった理由〉（抜粋）
・研修の機会がなかった
・研修内容が本校児童生徒の実態に合わなかったため
・都合がつかなかったため

問３　ＳＤＧｓの実現に向けて、「持続可能な社会の創り手」の育成が大切です。
貴校においては、次のどの教科でＳＤＧｓの視点を導入していますか。
【○は複数可】

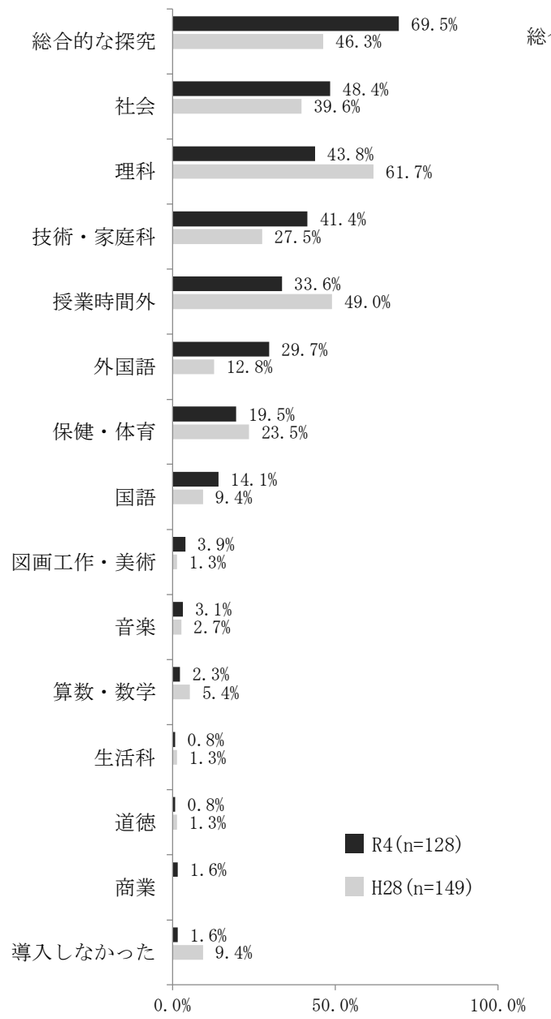
【小学校】



【中学校】

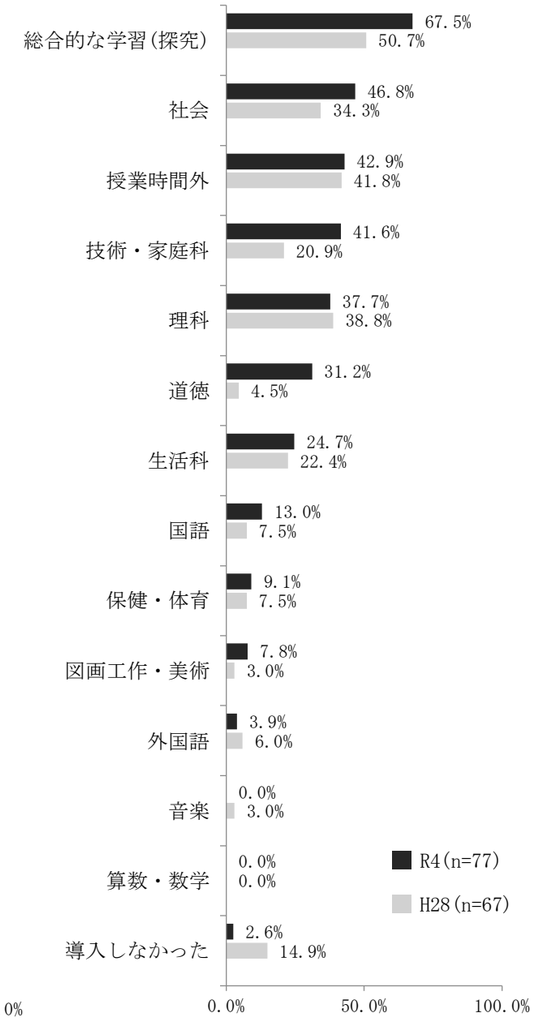


【高等学校】



〈導入しなかった理由〉（抜粋）
・環境教育を特に推進していないため

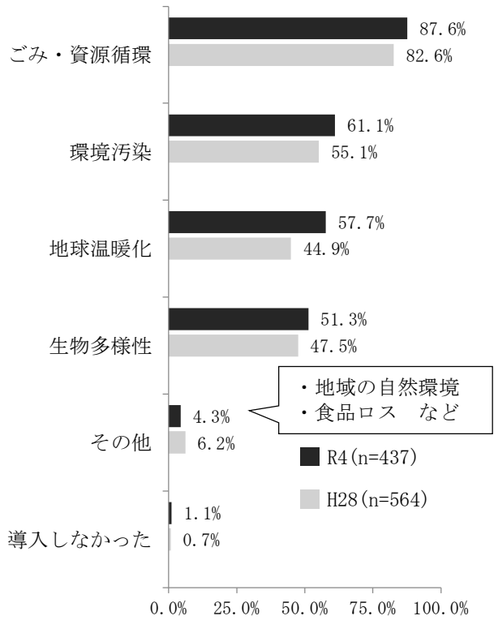
【特別支援学校】



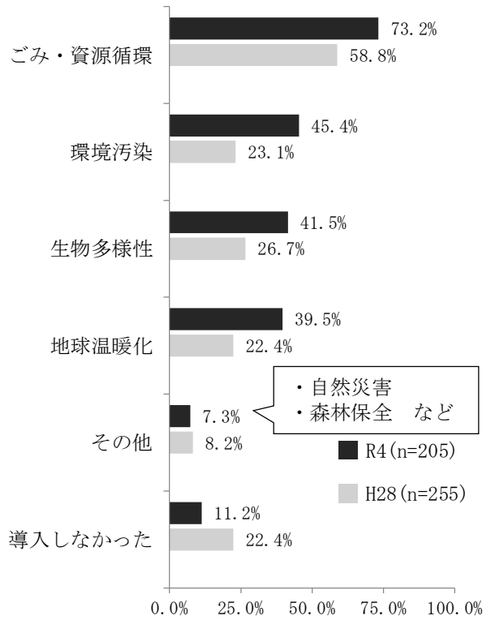
〈導入しなかった理由〉（抜粋）
・SDGs に関しての話し合いがまだ行われていない

問４　総合的な学習（探究）の時間等の授業において、どのような環境の視点を導入しましたか。【○は複数可】

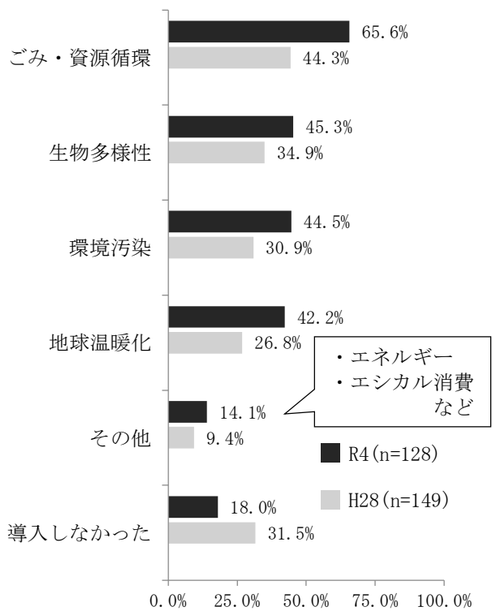
【小学校】



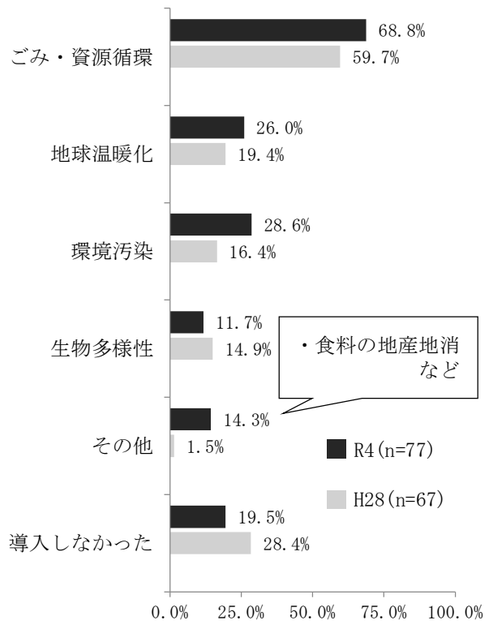
【中学校】



【高等学校】

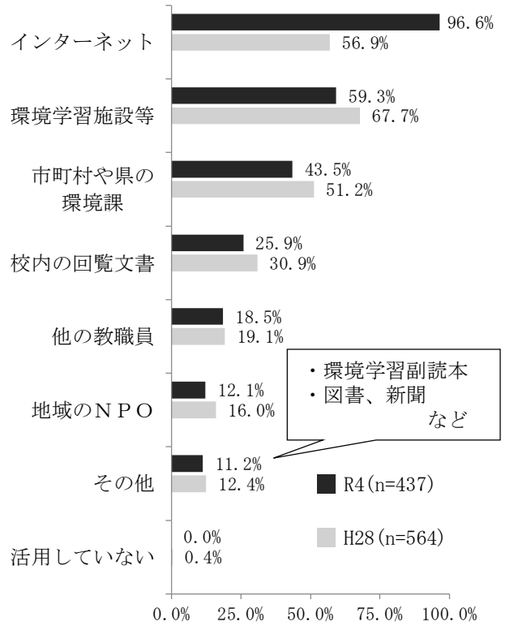


【特別支援学校】

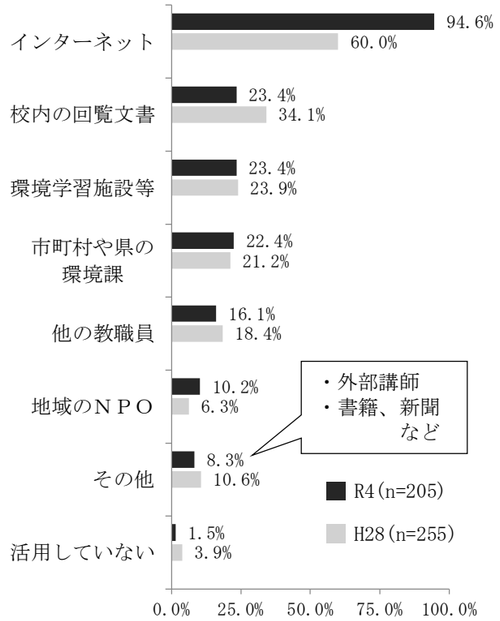


問５　環境教育に関する情報を収集する際、どのような情報源を活用しましたか。【○は複数可】

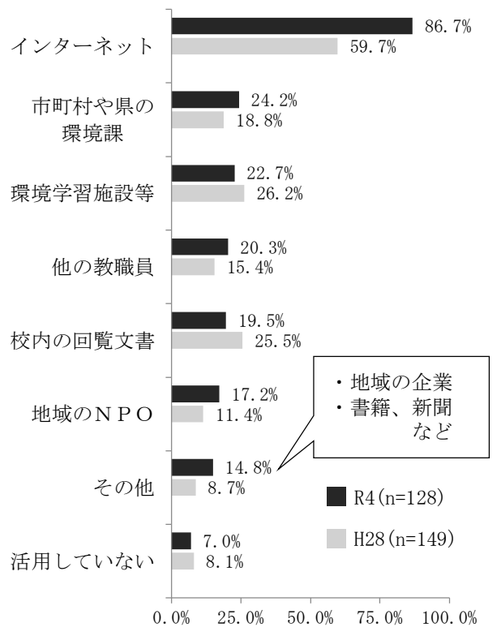
【小学校】



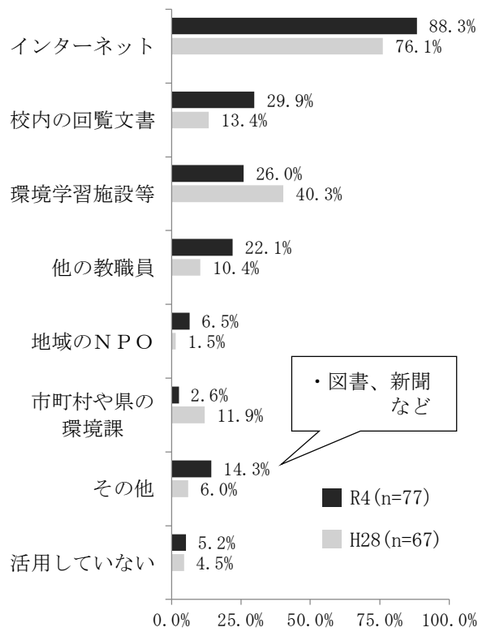
【中学校】



【高等学校】

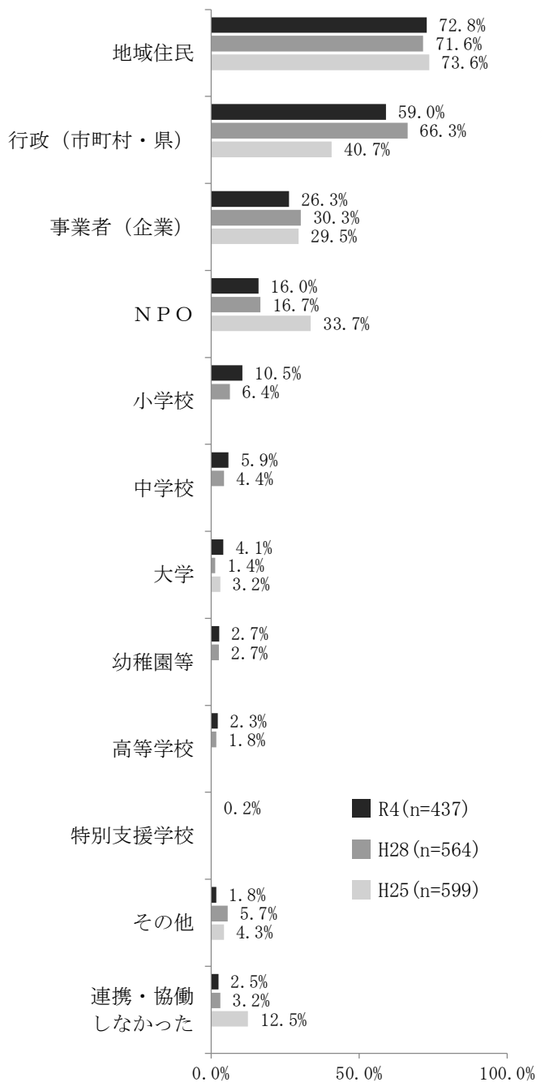


【特別支援学校】



問６　学習指導要領では「社会に開かれた教育課程の実現」が求められています。
　環境教育や環境保全活動を実施する際、どのような主体と連携・協働して実施しましたか。【○は複数可】

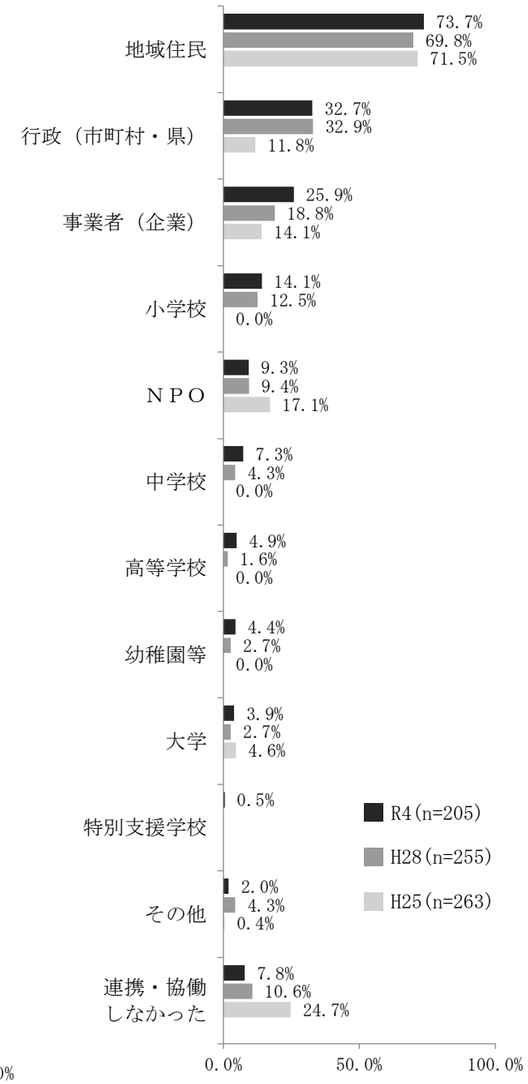
【小学校】



〈その他〉（抜粋）
・ロータリークラブ
・漁協

〈連携・協働しなかった理由〉（抜粋）
・特に必要性を感じなかった

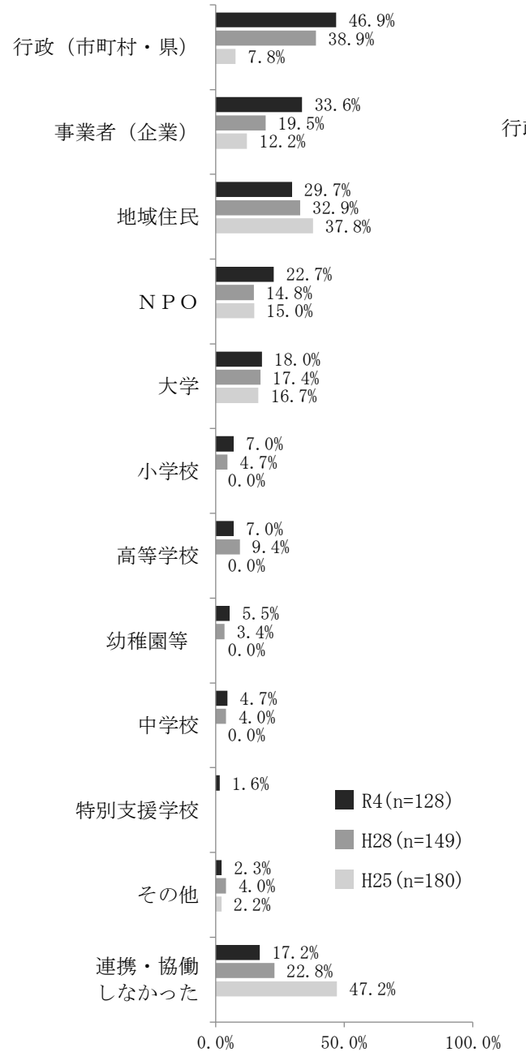
【中学校】



〈その他〉（抜粋）
・地域の林業クラブ
・科学館、動植物園等

〈連携・協働しなかった理由〉（抜粋）
・必要ないと思ったから

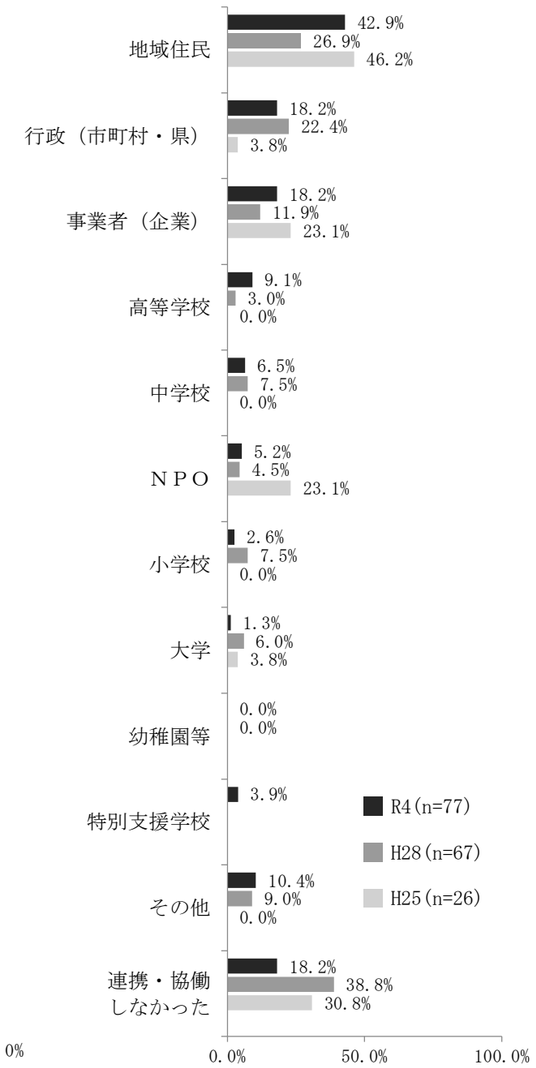
【高等学校】



〈その他〉（抜粋）
・海外の機関

〈連携・協働しなかった理由〉（抜粋）
・活動内容が必ずしも連携を必須とするものでは無いため

【特別支援学校】

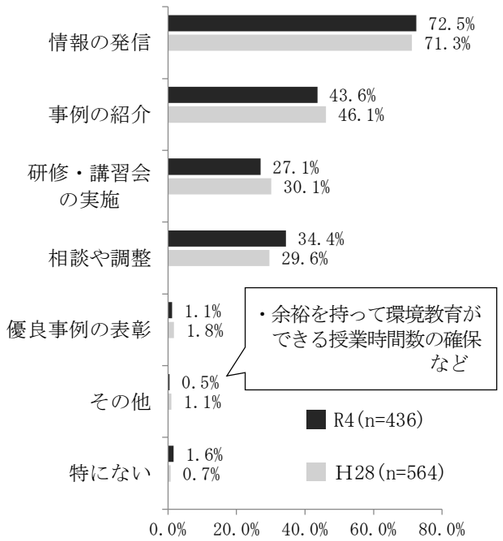


〈その他〉（抜粋）
・地域の環境学習施設
・郵便局

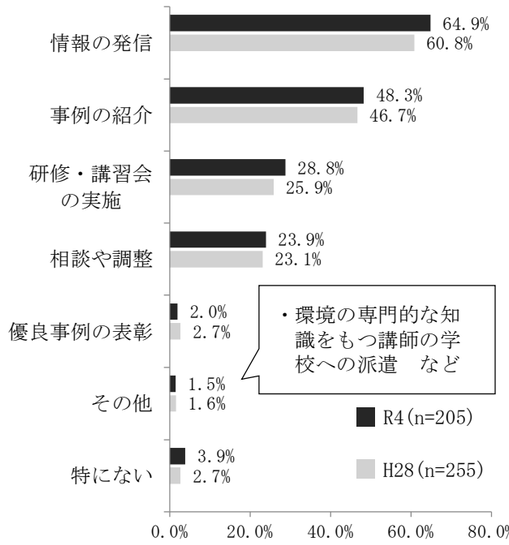
〈連携・協働しなかった理由〉（抜粋）
・機会がなかった

問７　社会に開かれた教育課程の実現に向けて、他の主体と連携・協働することで、より効果的で実感を伴った環境教育の実施につながることが期待されます。
　こうした取組を推進していくうえで、愛知県はどのような施策に力を入れるべきだと思いますか。【○は２つ】

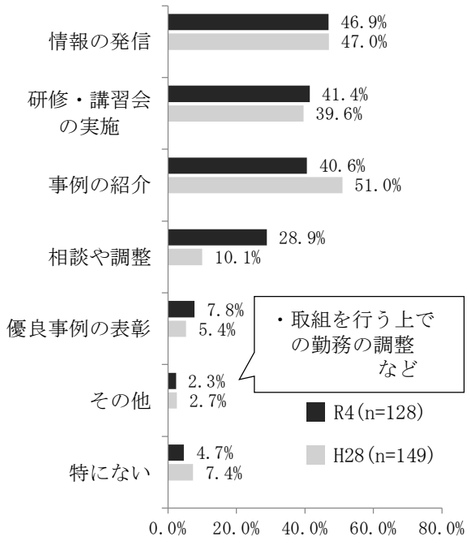
【小学校】



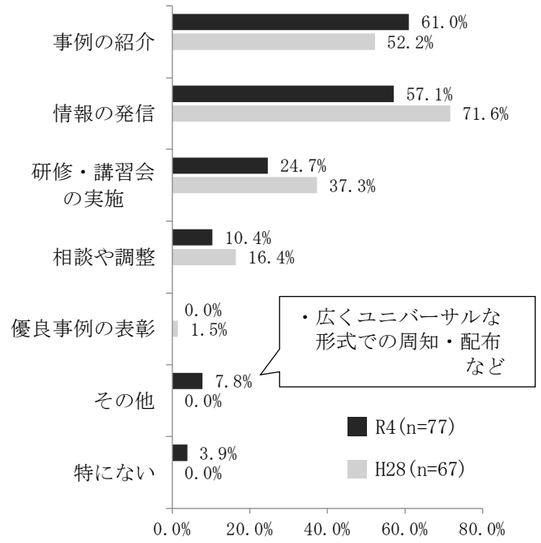
【中学校】



【高等学校】



【特別支援学校】



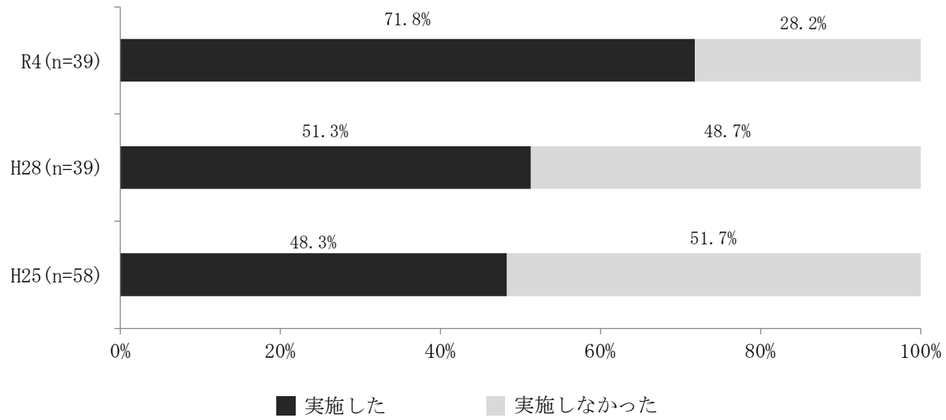
問８　貴校が実施している環境教育や環境保全活動で、力を入れている取組、紹介したい事例がありましたら、御記入ください。【自由記載】

回答合計	１４５事例
小学校	７２事例
中学校	３５事例
高等学校	２９事例
特別支援学校	９事例

Ⅳ　大学

県内各大学（短期大学を含む）
2022(R4)　:39/71 校(54.9%)
2016(H28):39/65 校(60.0%)　　2013(H25):58/72 校(80.6%)

問１　貴大学において、環境保全・環境教育やＥＳＤに関する研究や講座、イベント等を実施しましたか。



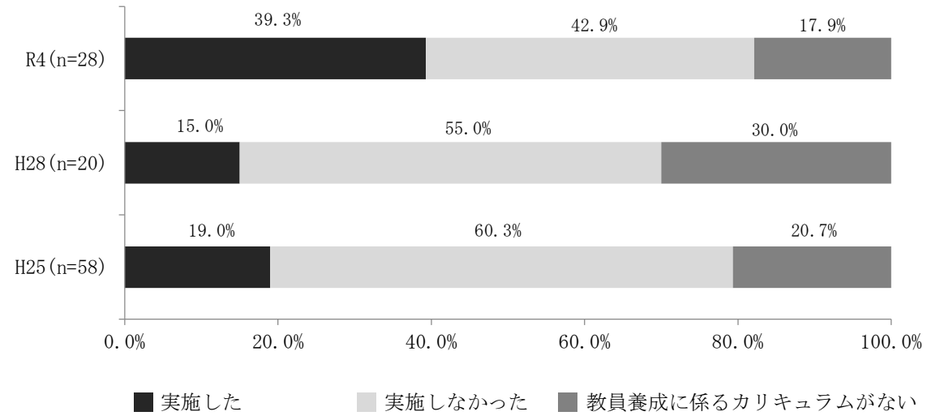
問２　別添様式に、環境に関する研究・講座・イベントを記入し、添付してください。

（１）研究
貴大学で実施した環境に関する研究を御記入ください。
４８事例

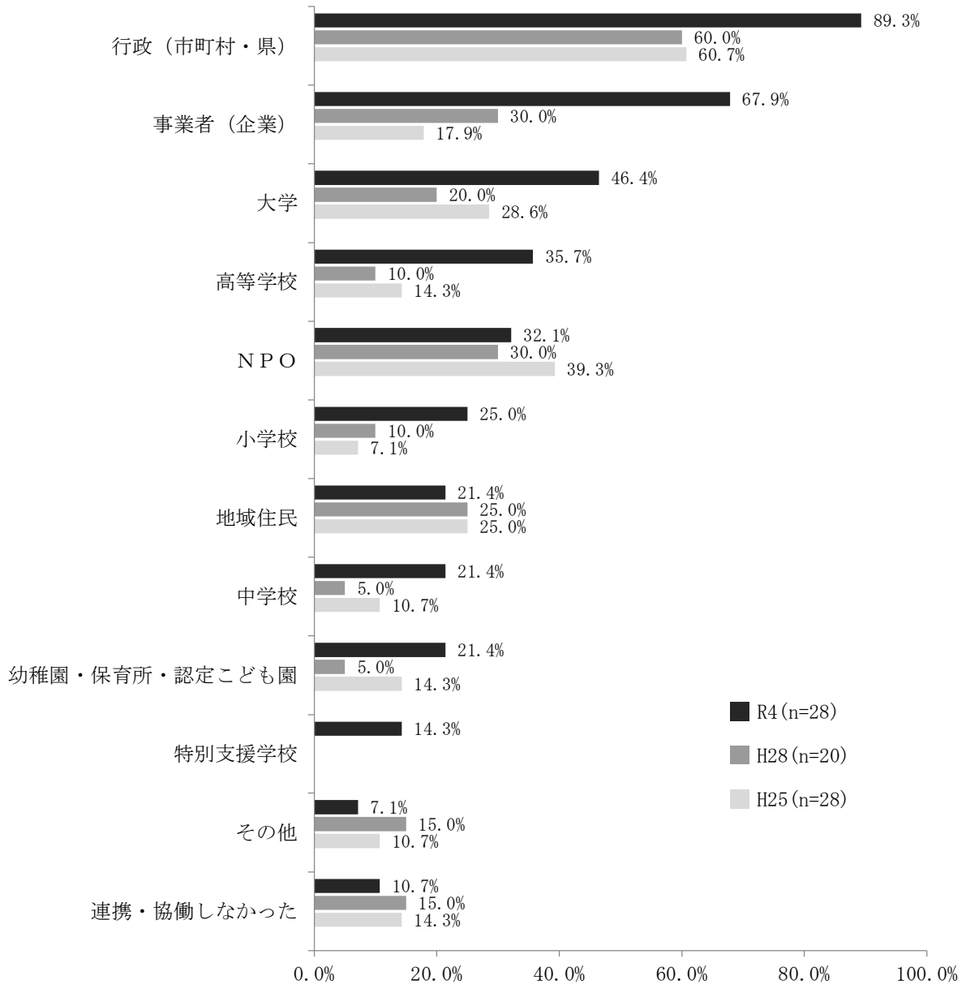
（２）講座（非公開）
貴大学の学生を対象とした環境に関する講座を御記入ください。
１２４事例

（３）講座・イベント
貴大学で実施した学外の方を対象とした環境に関する講座・イベントを御記入ください。
８２事例

問３　貴大学における教員養成に係るカリキュラムにおいて、環境教育の指導方法を教授するような授業を実施しましたか。



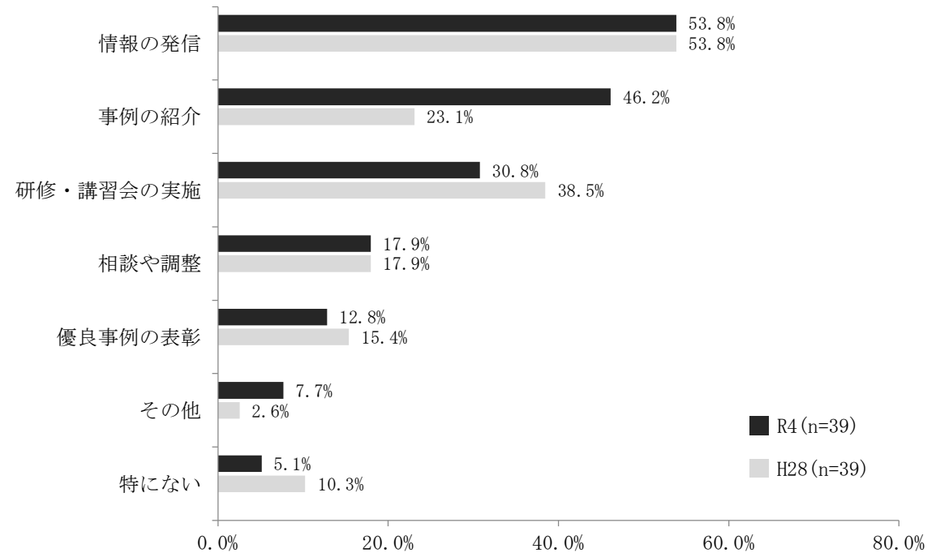
問４　大学での教育や研究の成果を地域に還元する際に、どのような主体と連携・協働して実施しましたか。【○は複数可】



〈その他〉（抜粋）
・研究所
・地域薬剤師会

〈連携・協働しなかった理由〉（抜粋）
・教養あるいは啓蒙的に位置づけられる正課科目であり、学外組織との連携のための整備が整っていなかったため

問５　環境教育を実施するうえで、大学は自身のノウハウや人材を地域、事業者、学校等で行われる環境教育に活用し、より発展的な学習にすることが期待されます。
　こうした取組を推進していくうえで、愛知県はどのような施策に力を入れるべきだと思いますか。【○は２つ】



〈その他〉（抜粋）
・取組に対しての助成
・環境に関する取組をしている大学や研究室と需要がありそうな地域との仲立ち

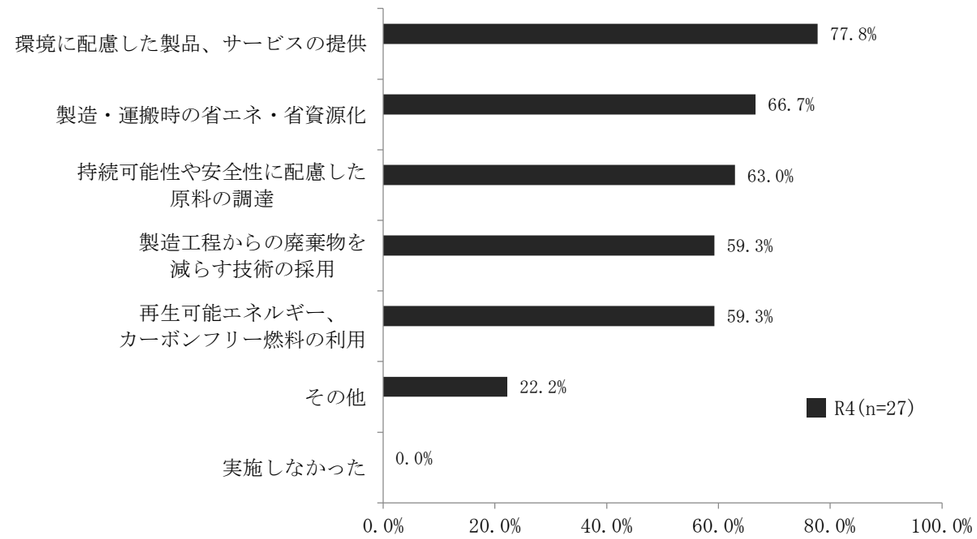
問６　貴大学が実施している環境教育や環境保全活動で、力を入れている取組、紹介したい事例がありましたら、御記入ください。【自由記載】

１３事例

Ⅴ　事業者

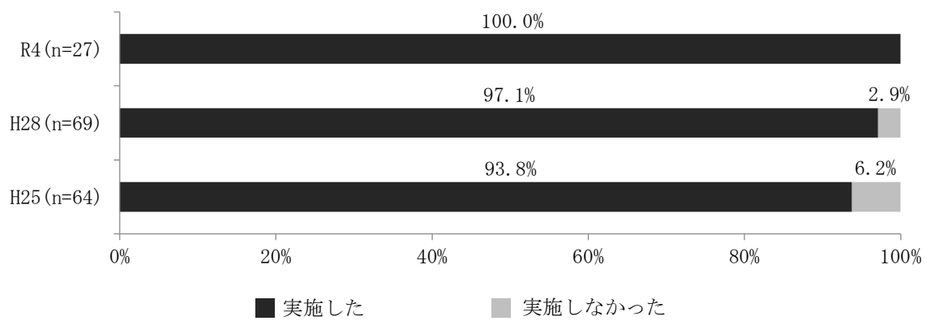
ＥＰＯＣ、名商エコクラブ
2022(R4)　:27/427 者(6.3%)
2016(H28):69/415 者(16.6%)　　2013(H25):64/386 者(16.6%)

問１　本県では、ＳＤＧｓに関する取組を推進するため、エコアクション 21 などのマネジメントシステムの導入を促進していますが、貴社では、事業活動においてどのような環境負荷の低減に関する取組を実施しましたか。【○は複数可】

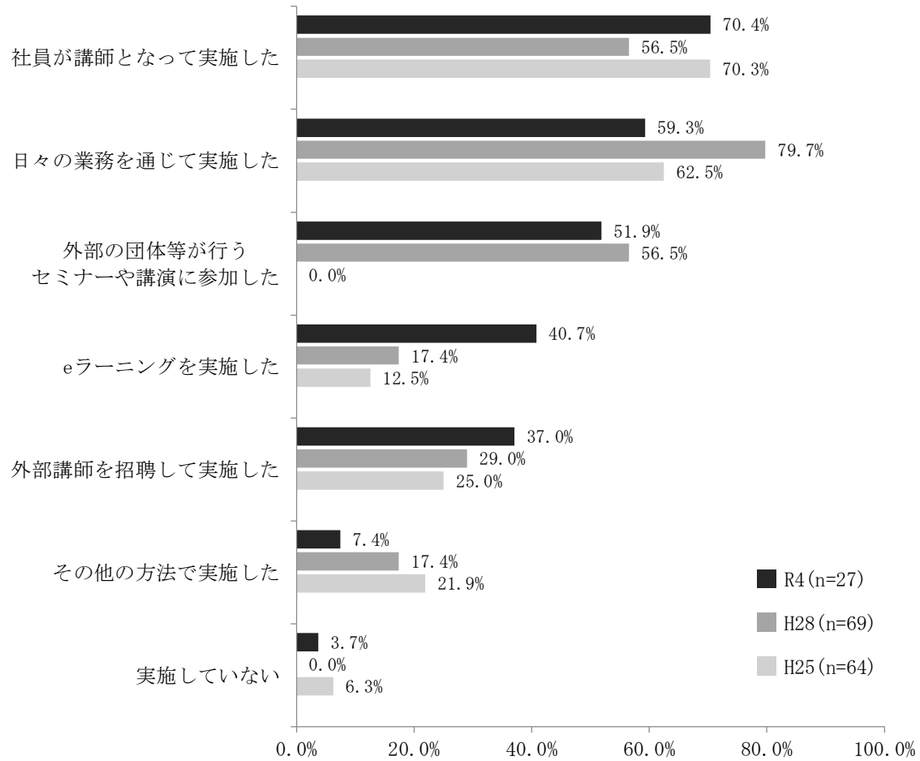


〈その他〉（抜粋）
・ペーパーレス化の推進
・クライアントへの SDG s 取組推進につながる企画提案

参考　過去との比較



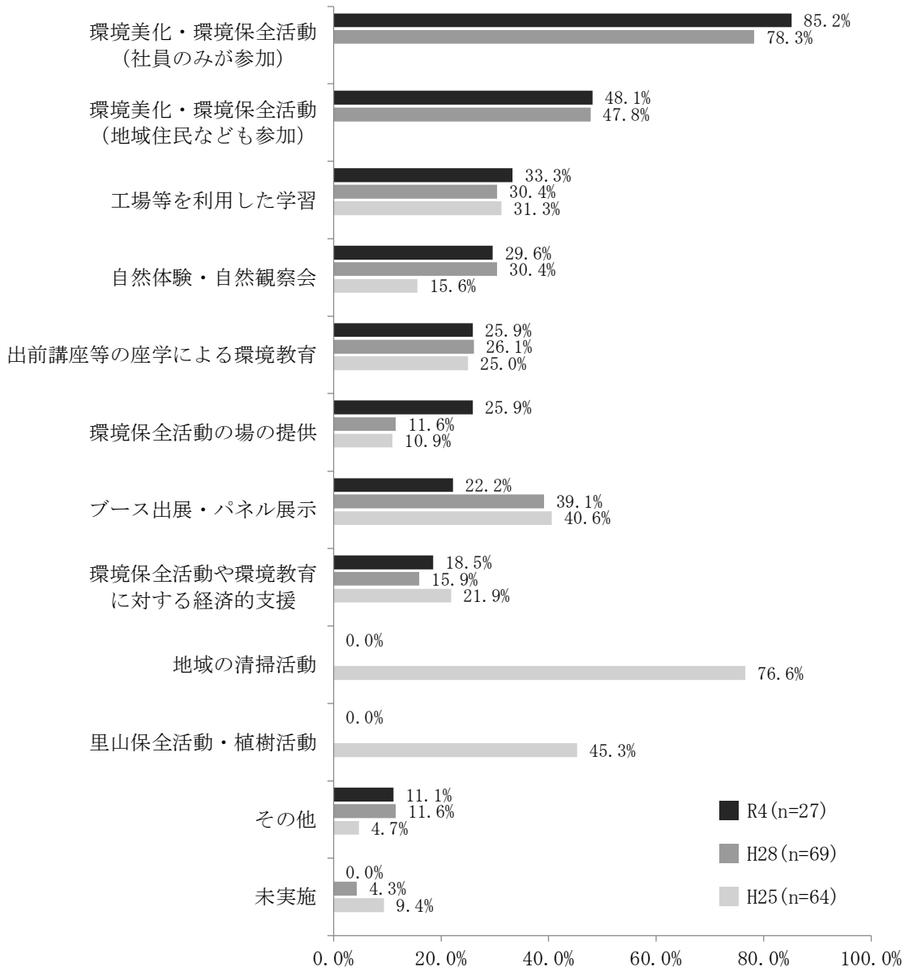
問２　ＳＤＧｓに関する取組を推進するために、環境と事業活動との関わりについて社員の意識を高めることが重要と考えられています。
貴社において、社員教育の中でどのように環境教育を実施しましたか。
なお、環境教育には、省エネや環境に配慮した製品づくりに関する教育も含みます。【○は複数可】



〈その他〉（抜粋）
・eco 検定取得の支援

問３　ＳＤＧｓに関する取組を推進するため、環境教育、植樹活動や地域の清掃活動、地球温暖化対策に関する活動などの環境保全活動を実施する事業者が増えています。

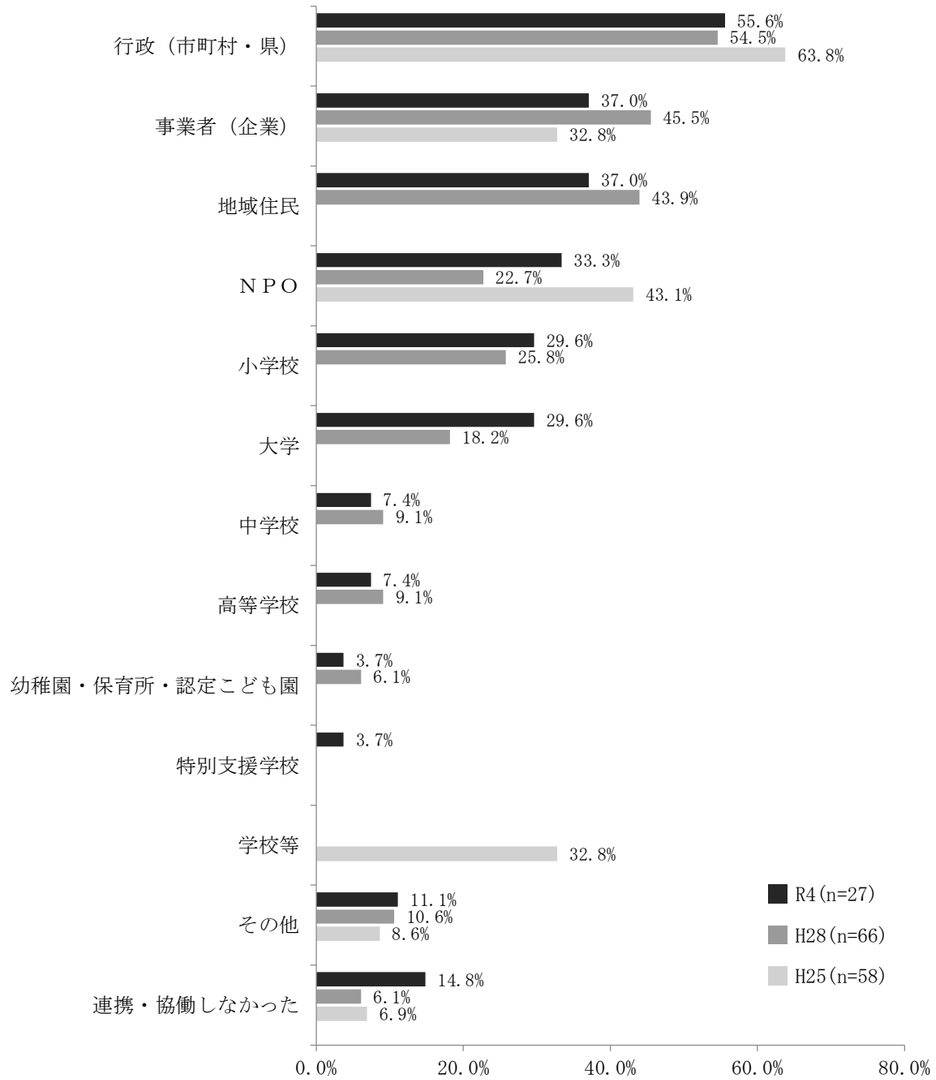
貴社において、どのような環境教育や環境保全活動を実施しましたか。
【○は複数可】
※環境美化・環境保全活動・・・清掃活動、植樹活動、里山保全活動など



〈その他〉（抜粋）
・「かがやけ☆あいちサスティナ研究所」研究チームへの支援

問４　環境教育や環境保全活動を実施している事業者にお聞きします。

環境教育や環境保全活動を実施する際、どのような主体と連携・協働して実施しましたか。【○は複数可】

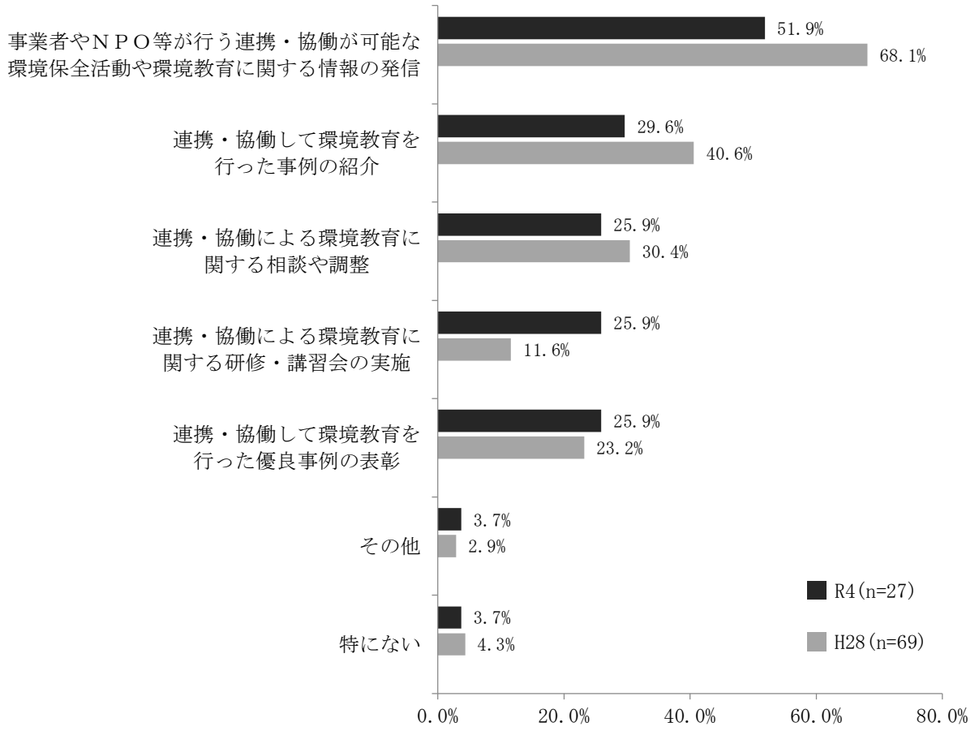


〈その他〉（抜粋）
・国の地方機関
・森林組合

〈連携・協働しなかった理由〉（抜粋）
・連携・協働のメリットが分かれば実施したい
・社員の業務負担増とならない範囲でできる方策があれば実施したい

問５　学校やＮＰＯ、行政などとの連携・協働により事業者が持つノウハウ、人材、施設等をさらに環境教育に活かすことで、より実践的に実感を伴った環境教育の実施につながることが期待されます。

事業者のこうした取組を推進していくうえで、愛知県はどのような施策に力を入れるべきだと思いますか。【○は２つ】



〈その他〉（抜粋）
・事業者が参画しやすい環境教育の企画の提供

問６　貴社において実施している環境教育や環境保全活動で、力を入れている取組、紹介したい事例がありましたら、御記入ください。【自由記載】

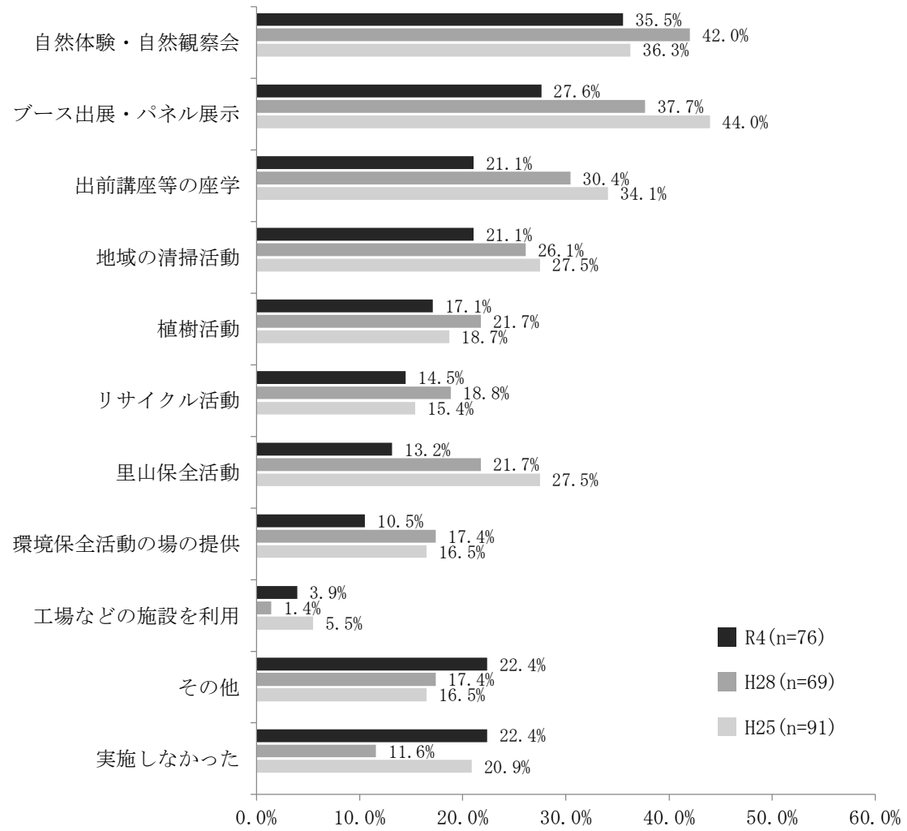
１４事例

Ⅵ　ＮＰＯ

環境保全を図る活動を行う者
2022(R4)　:76/387 者(19.6%)
2016(H28):69/404 者(17.1%)　　2013(H25):91/427 者(21.3%)

問１　多くのＮＰＯが、地域のリサイクル活動や自然保護活動などの環境保全活動や自然観察会、水生生物調査、地球温暖化対策などの環境学習を実施し、地域の環境に貢献しています。

貴団体では、どのような環境保全活動や環境学習を実施しましたか。【○は複数可】



〈その他〉（抜粋）
・野菜の栽培
・耕作放棄農地の再生と活用
・竹林整備
・海中清掃

〈実施しなかった理由〉（抜粋）
・コロナ感染対策のため活動をやめていた
・環境に関する活動をしていない
・防災・減災活動に注力しているため

問２　参加者から好評であった環境保全活動や環境学習の内容及びその参加人数を１事例ずつ御記入ください。

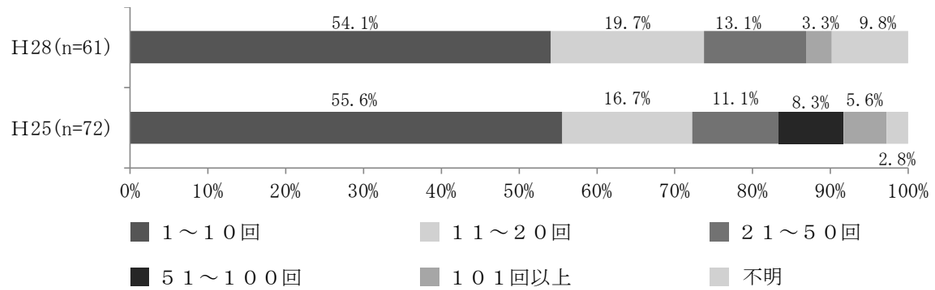
区分	回答数	参加人数平均	中央値
学校向け	20/59(33.9%)	259.9	58
その他	41/59(69.5%)	107.7	35

〈学校向け〉（抜粋）
・蛍の環境整備と幼虫の放流（75 人）
・食品ロス削減とフードバンク活動（50 人）

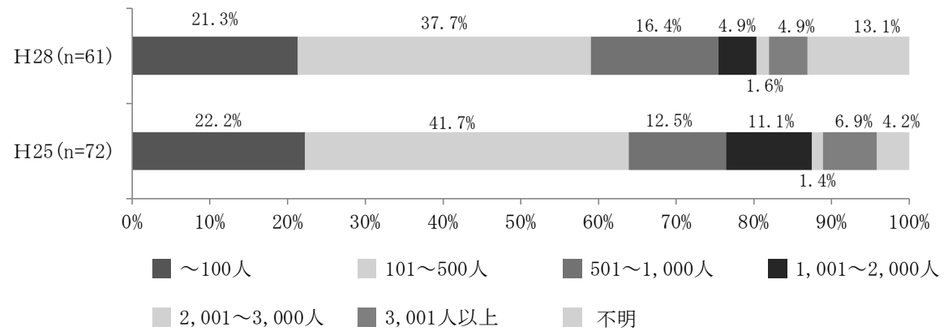
〈その他〉（抜粋）
・海の環境を学ぶ会（1065 人）
・いきもの観察会や竹林整備（280 人）
・植樹・自然観察会（150 人）
・間伐材を利用したテーブル、椅子づくり（80 人）

参考　環境保全活動や環境学習を何回実施しましたか。

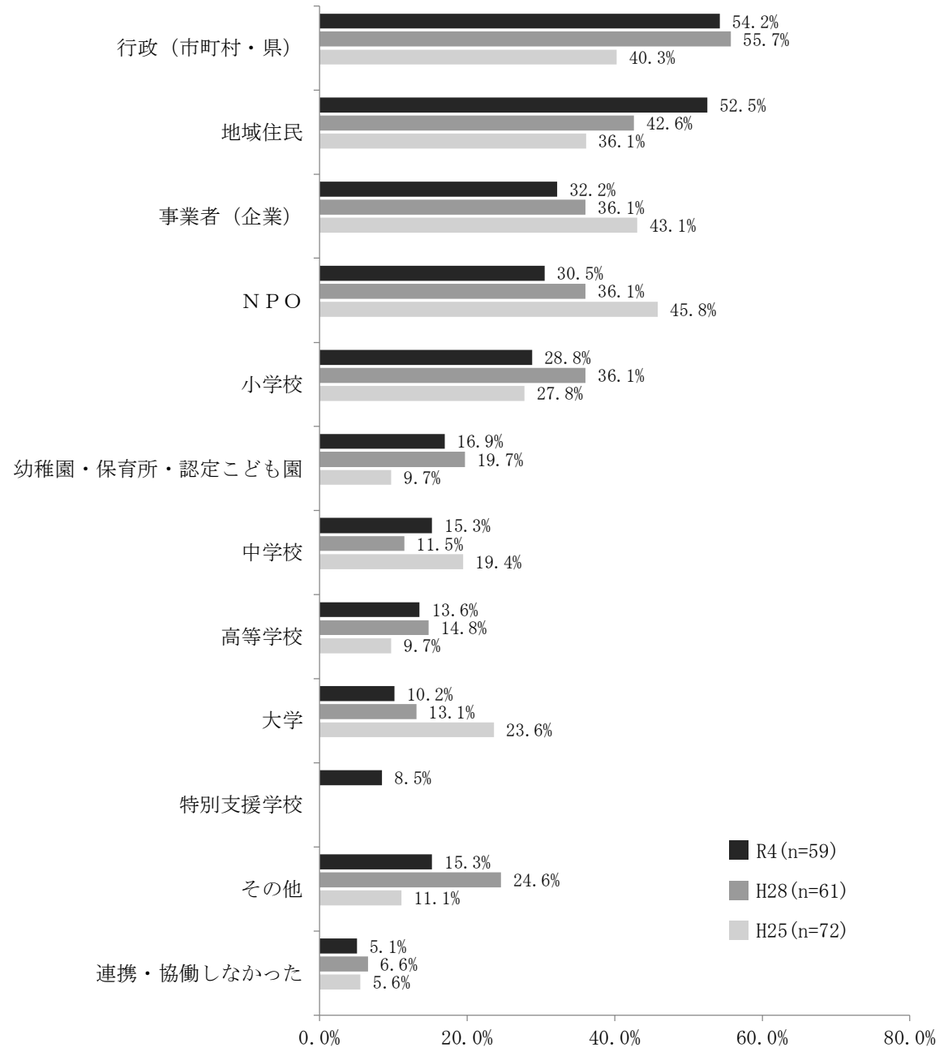
【回数】



【参加人数】



問３　環境保全活動や環境学習を実施する際、どのような主体と連携・協働して実施しましたか。【○は複数可】

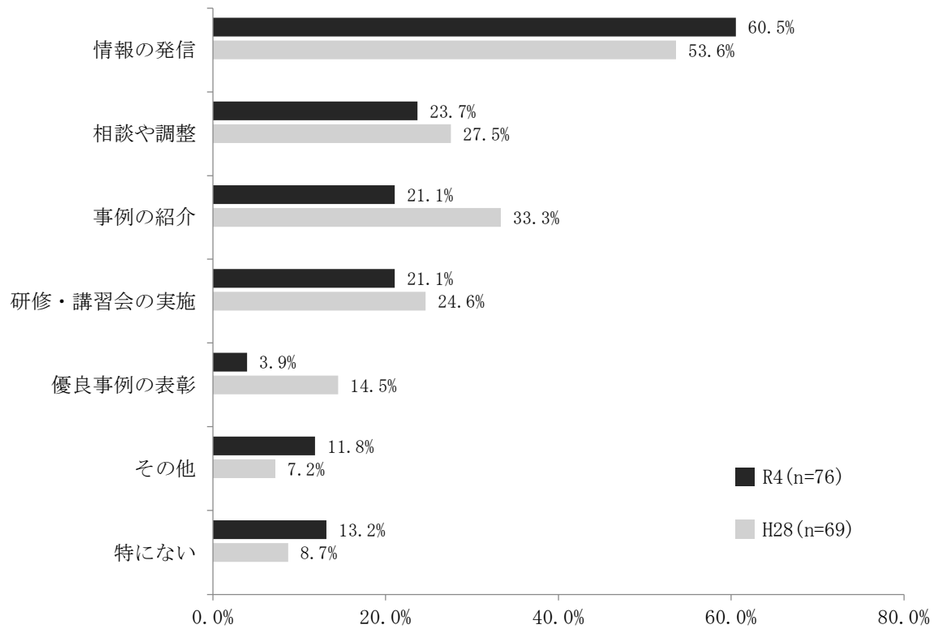


〈その他〉（抜粋）
・ロータリークラブ
・寺院仏閣
・商工会議所
・観光協会
・障がい者支援施設

〈連携・協働しなかった理由〉（抜粋）
・児童クラブ員とその父兄で実施のため、特に連携はしない。

問４　学校や事業者、行政などとの連携・協働によりＮＰＯが持つノウハウ、人材、施設等をさらに環境学習に活かすことで、より実践的に実感を伴った環境学習の実施につながることが期待されます。

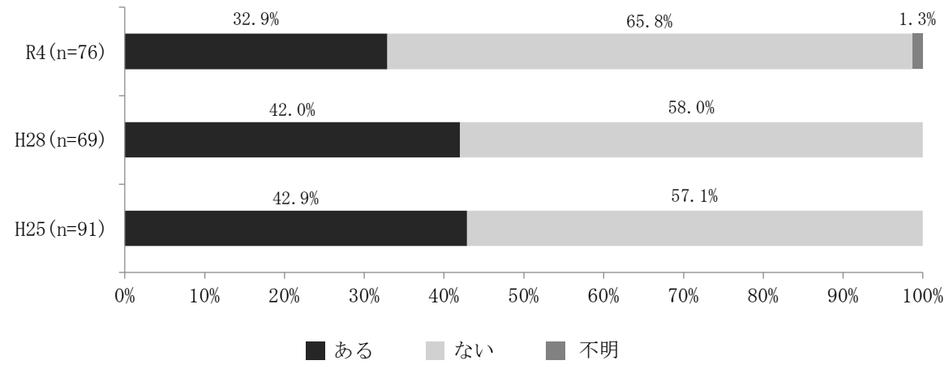
ＮＰＯのこうした取組を推進していくうえで、愛知県はどのような施策に力を入れるべきだと思いますか。【○は２つ】



〈その他〉（抜粋）
・場所の提供
・補助金等の資金的支援

問５　環境学習を推進するためには、環境学習を受けたい人と環境学習を提供したい人とをつなぎ、調整するコーディネーターの活用が有効です。

貴団体は、コーディネーターの役割（講師の派遣だけでなく、活動・学習内容の調整を含む）を担ったことがありますか。



問６　貴団体が実施している環境保全活動や環境学習で、力を入れている取組、紹介したい事例がありましたら、御記入ください。【自由記載】

３６事例

Ⅶ　ＰＴＡ

全体：689/1,588（43.4%）

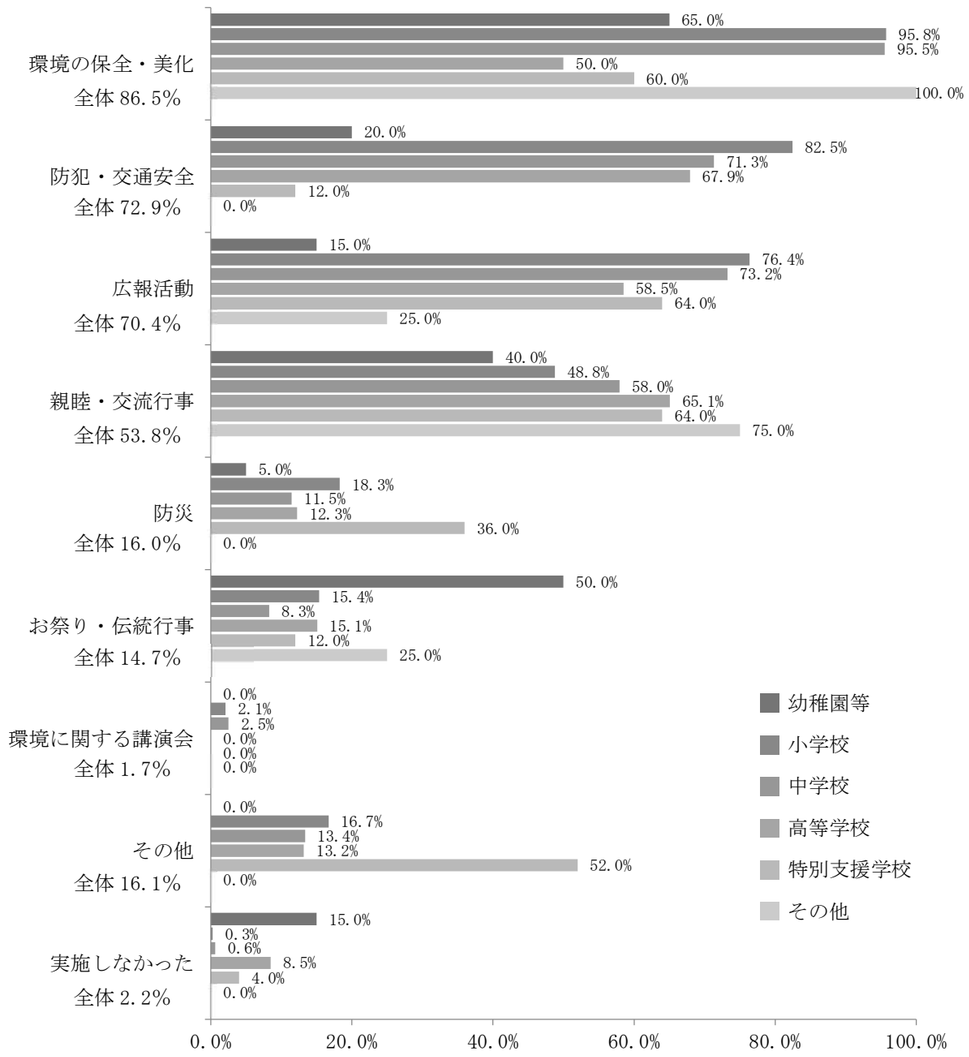
幼稚園等：20/336 園(6.0%)　　小学校：377/697 校(54.1%)

中学校：157/314 校(50.0%)　　高等学校：106/203 校(52.2%)

特別支援学校：25/33 校(75.8%)　　その他※:4/5 校（80%）

※義務教育学校、公立小学校・中学校、私立中学校・高等学校

問１　ＰＴＡの活動として、貴団体が取り組んでいることは何ですか。【○は複数可】



〈その他〉（抜粋）

・あいさつ運動

・講演会

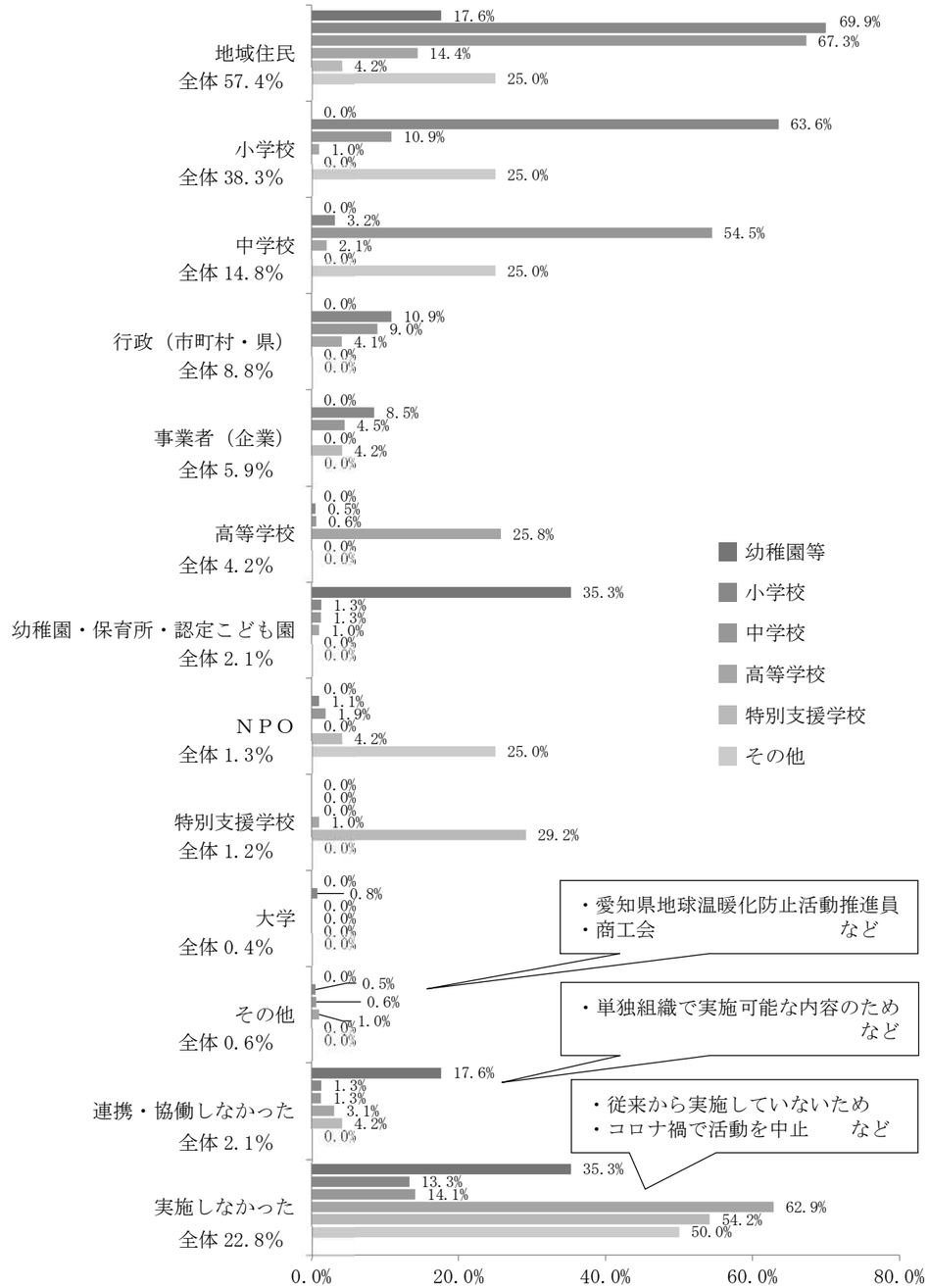
・学校保健委員会への参加

〈実施しなかった理由〉（抜粋）

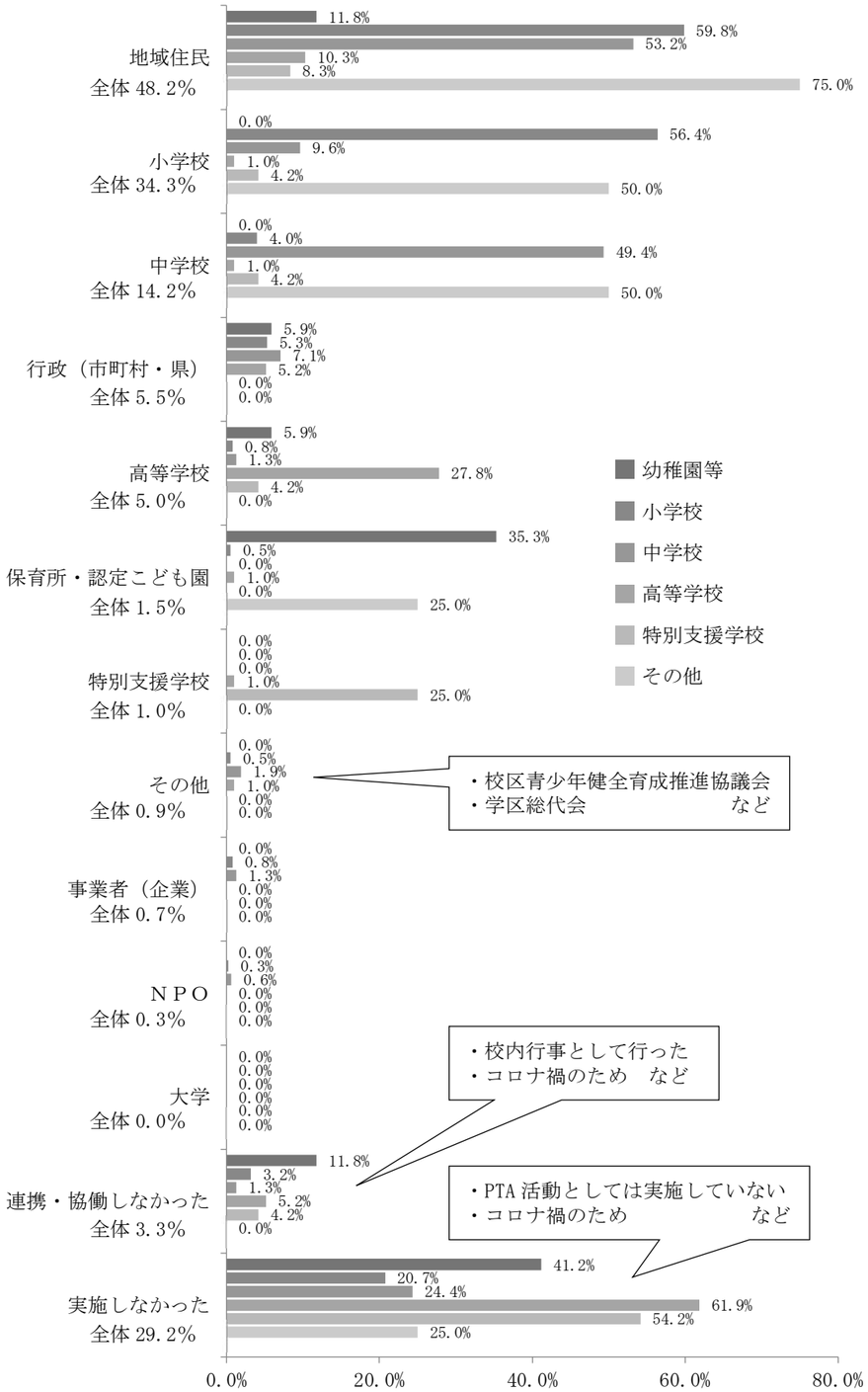
・コロナ禍により活動を自粛している

問２　（１）～（３）のそれぞれについて、どのような主体と連携・協働して実施しましたか。※幼稚園～特別支援学校については、貴団体を構成している主体である場合も含みます。

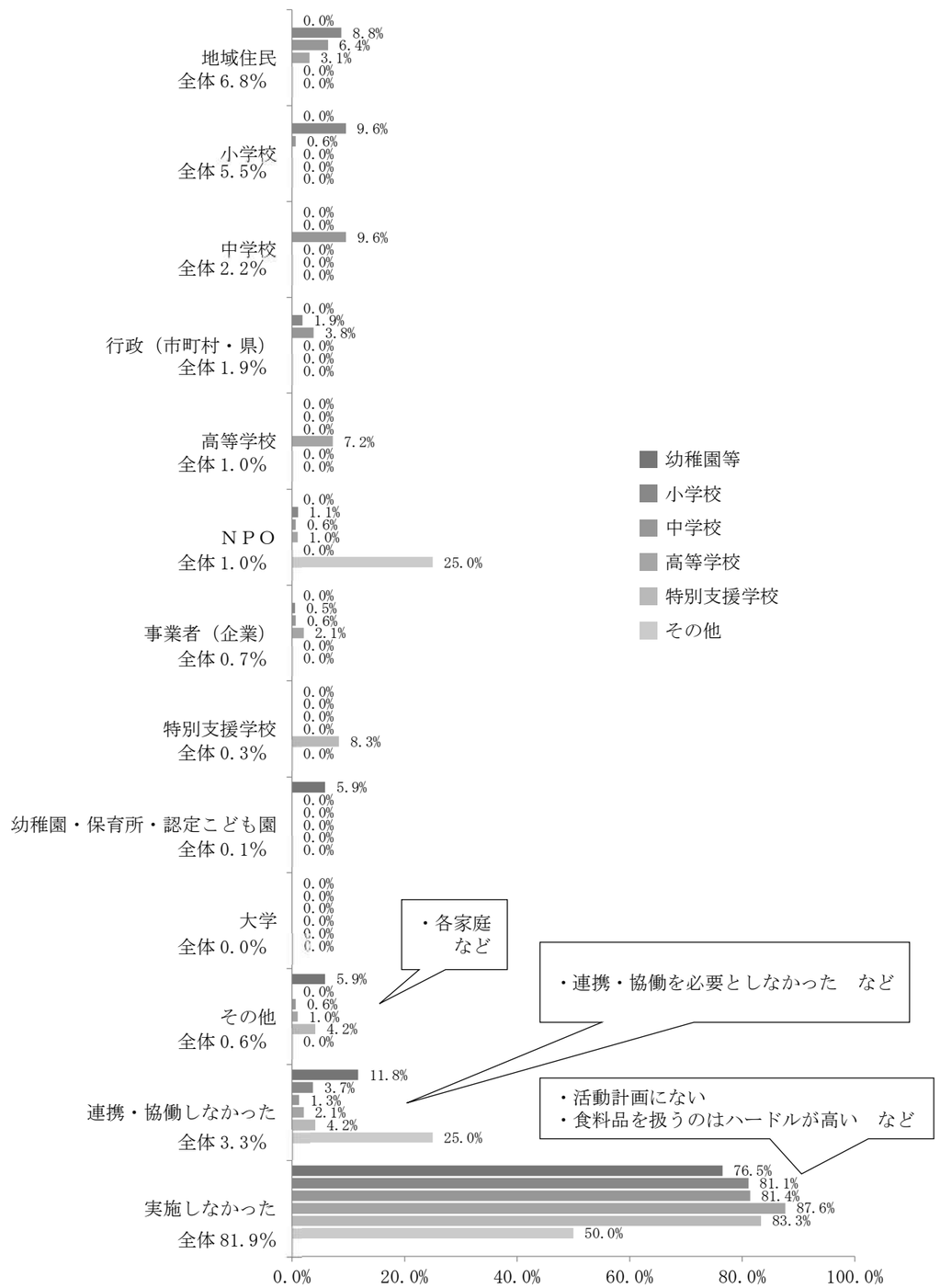
（１）地域のリサイクル活動、自然保護活動、地球温暖化対策に関する活動などの環境保全活動【○は複数可】



問２（２）　地域の清掃活動や草取りなどの環境美化活動【〇は複数可】



問２（３）　フードドライブ等の環境に関する活動【〇は複数可】



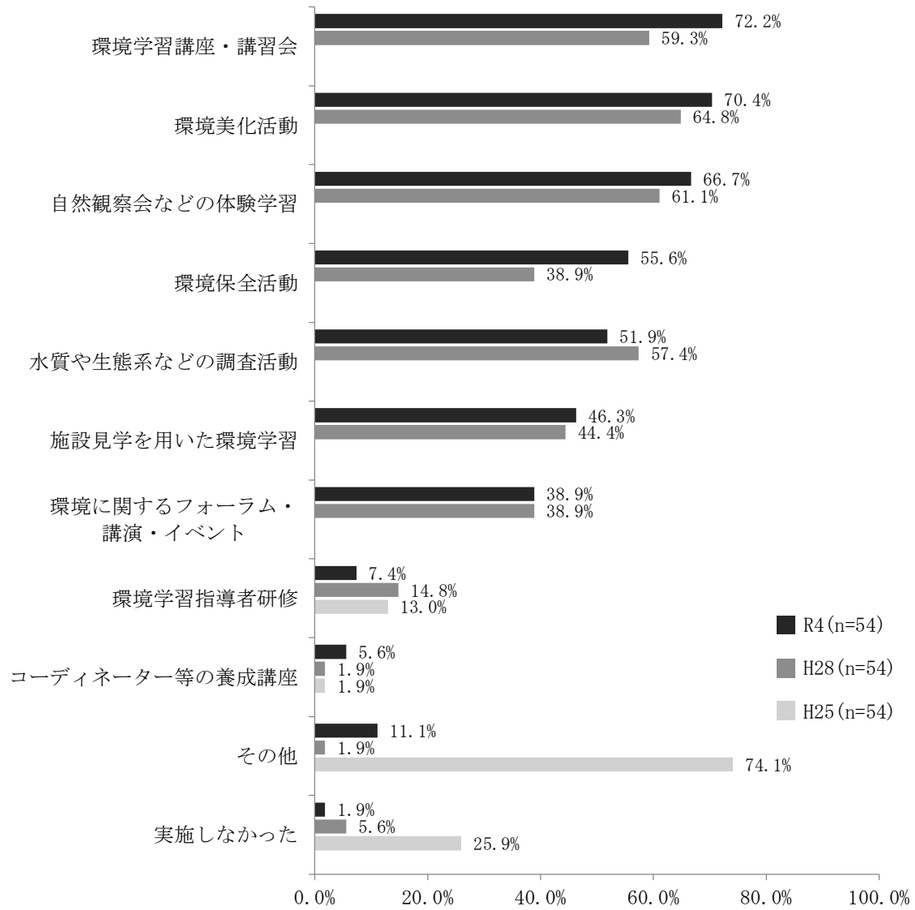
問３　貴団体が実施している環境保全活動（リサイクル活動、自然保護活動、地球温暖化対策に関する活動等）や環境美化活動（清掃活動、草取り等）で、力を入れている取組、紹介したい事例がありましたら、御記入ください。【自由記載】

回答合計	１３６事例
幼稚園等	２事例
小学校	７８事例
中学校	３６事例
高等学校	１２事例
特別支援学校	６事例
その他	２事例

Ⅷ　市町村

回答
2022(R4)　:54/54 市町村(100%)　2016(H28):54/54 市町村(100%)
2015(H27):54/54 市町村(100%)　2014(H26):54/54 市町村(100%)
2013(H25):54/54 市町村(100%)

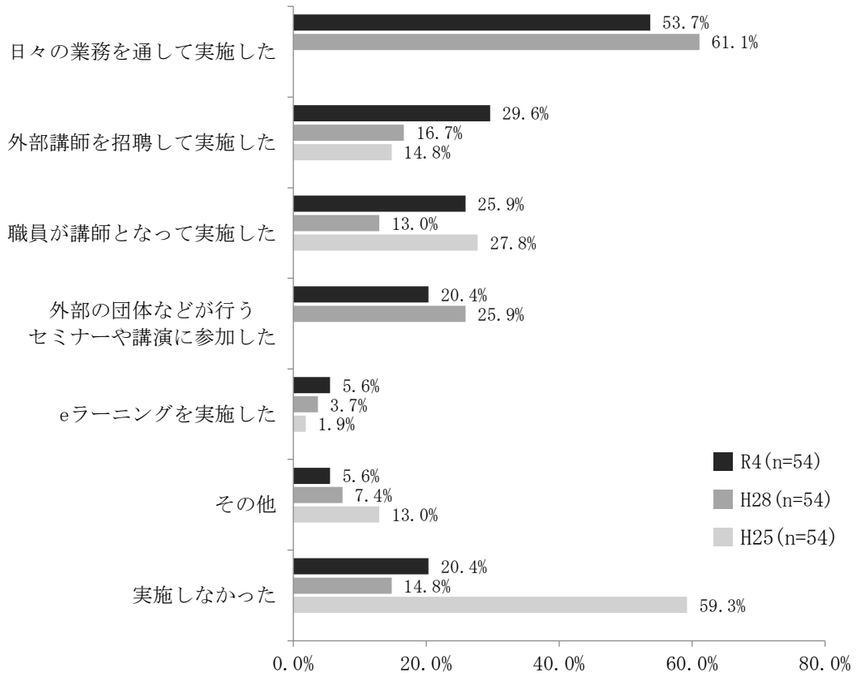
問１　貴市町村は、地球温暖化対策を始めとする様々な環境対策を進めるため、地域においてどのような環境学習や指導者の育成を実施しましたか。【○は複数可】



〈その他〉（抜粋）
・ボランティア養成講座
・アカウミガメ実態調査員養成講座、小学４、５年生向けの社会科資料集作成及び配布

〈実施しなかった理由〉（抜粋）
・人員不足

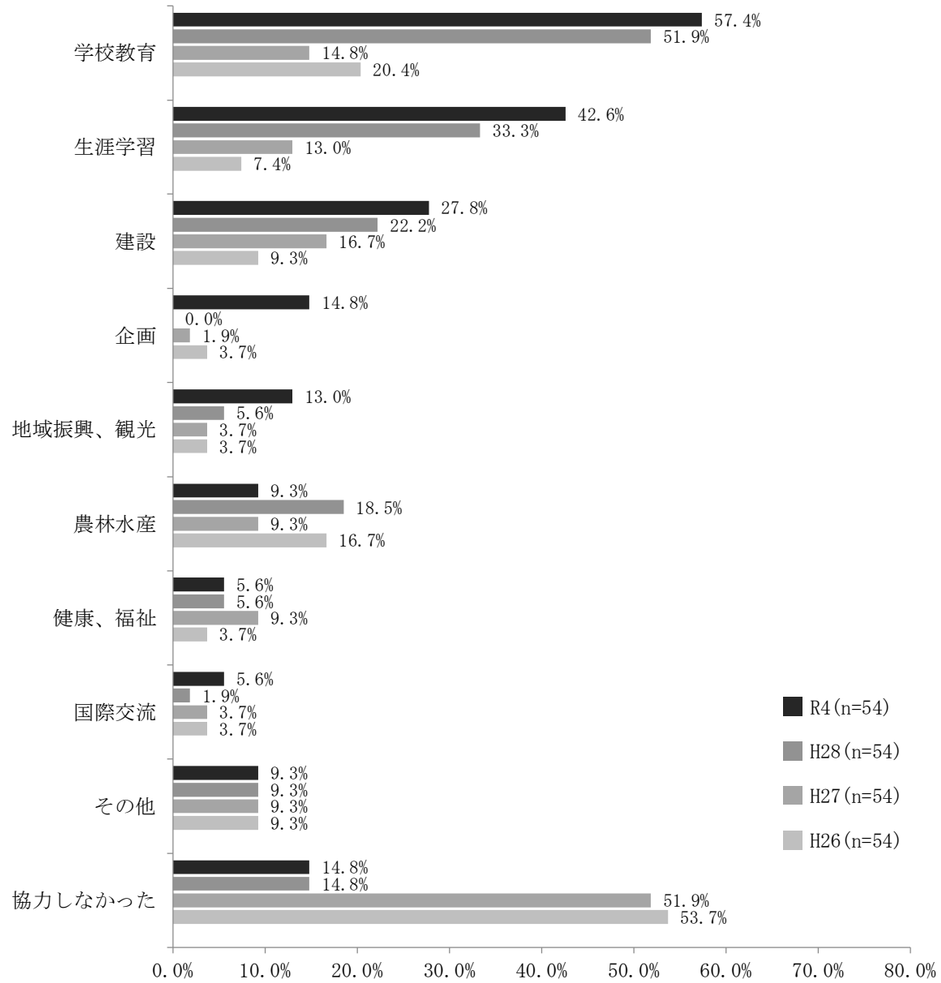
問２　貴市町村は、職員に対してどのように環境学習を実施しましたか。
【○は複数可】



〈その他〉（抜粋）
・定期的に通知を発出した
・温室効果ガスについての掲示物の配布

〈実施しなかった理由〉（抜粋）
・人員不足
・時間に余裕がない
・要望がなかったため
・幸田町地球温暖化対策実行計画（事務事業編）により各課に対し幸田町が取り組む環境政策をすでに共有しているため。

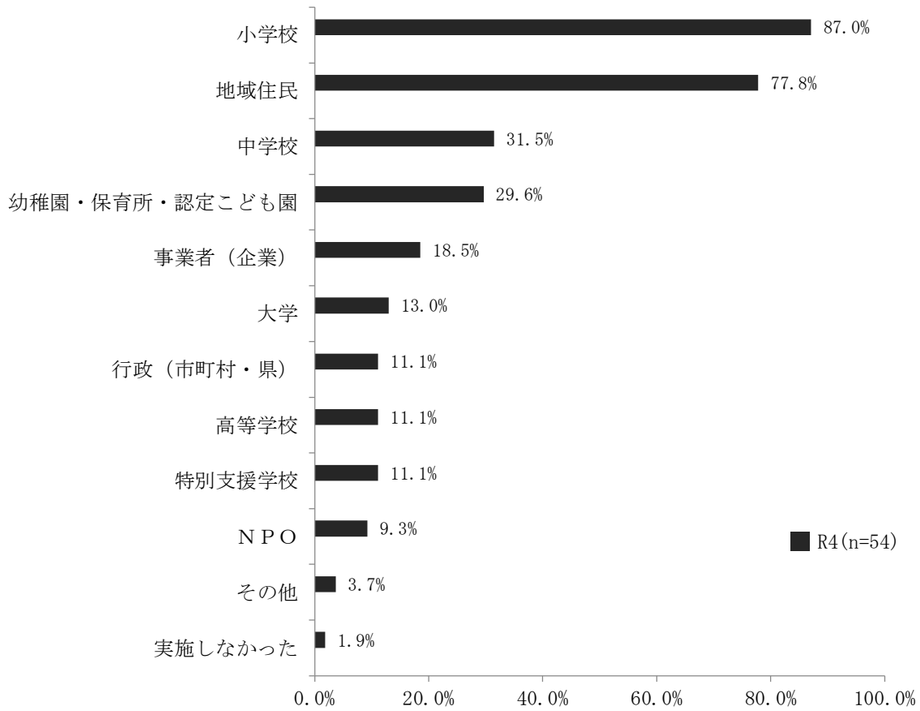
問３　環境学習を実施する際、環境部局のみならず、農林水産、学校教育、生涯学習、地域振興、国際交流等を所管する他部局と協力しましたか。【○は複数可】



〈その他〉（抜粋）
・文化財
・防災（市民安全課）
・スポーツ振興課
・子育て支援課
・上下水道局

〈協力しなかった理由〉（抜粋）
・必要がなかったため
・町が行う環境共育講座は地域住民等が対象で、知多自然観察会や地元のＮＰＯなどと協力して行うため、他部署との連携は特にありません。
・人員不足
・協力する事業がなかったため

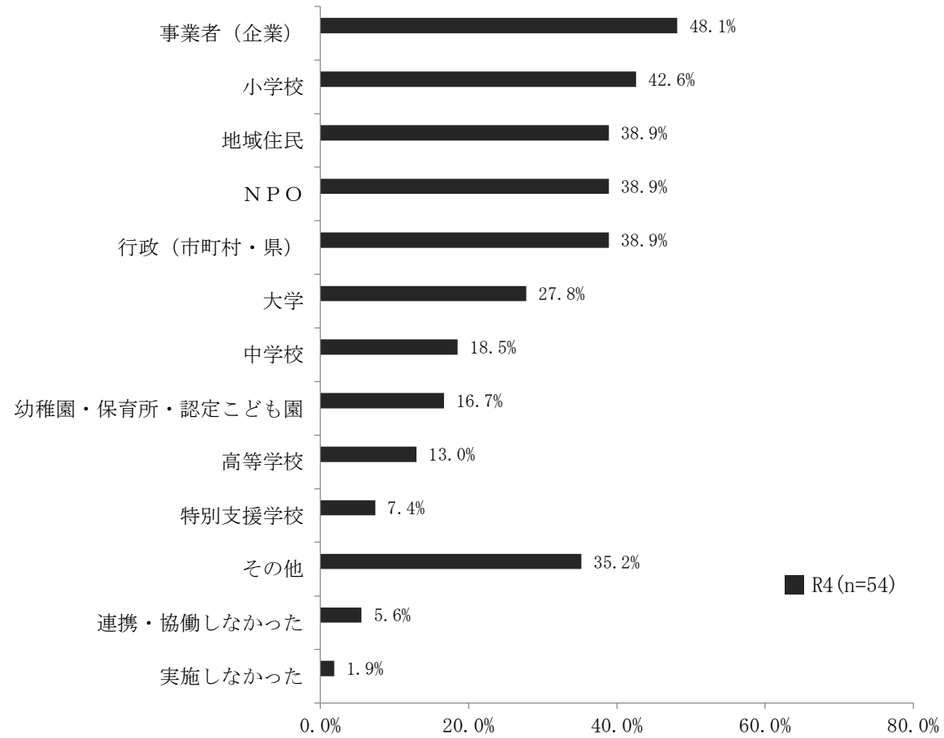
問４（１）　どのような主体に対し、環境学習を行いましたか。【〇は複数可】
（環境学習の例）環境学習講座・研修会、調査、体験学習 など



〈その他〉（抜粋）
・放課後子ども教室

〈実施しなかった理由〉（抜粋）
・人員不足

問４（２）　（１）を実施する際、どのような主体と連携・協働しましたか。【〇は複数可】
（環境学習の例）環境学習講座・研修会、調査、体験学習 など

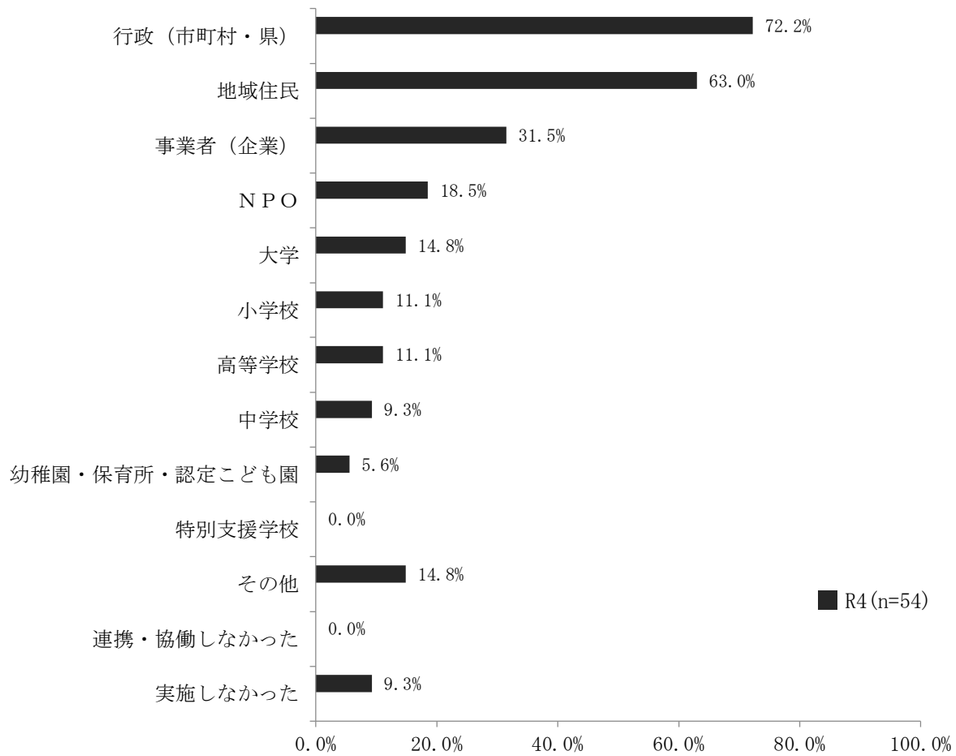


〈その他〉（抜粋）
・愛知県食品衛生協会、５３０運動環境協議会
・半田こどもエコクラブ
・キャンプカウンセラーサークル、都市緑化植物園みどりの相談所相談員
・自然観察会
・ごみ減量化等推進協議会、国（庄内川河川事務所）

〈連携・協働しなかった〉（抜粋）
・独自での実施
・必要がなかった

〈実施しなかった理由〉（抜粋）
・人員不足

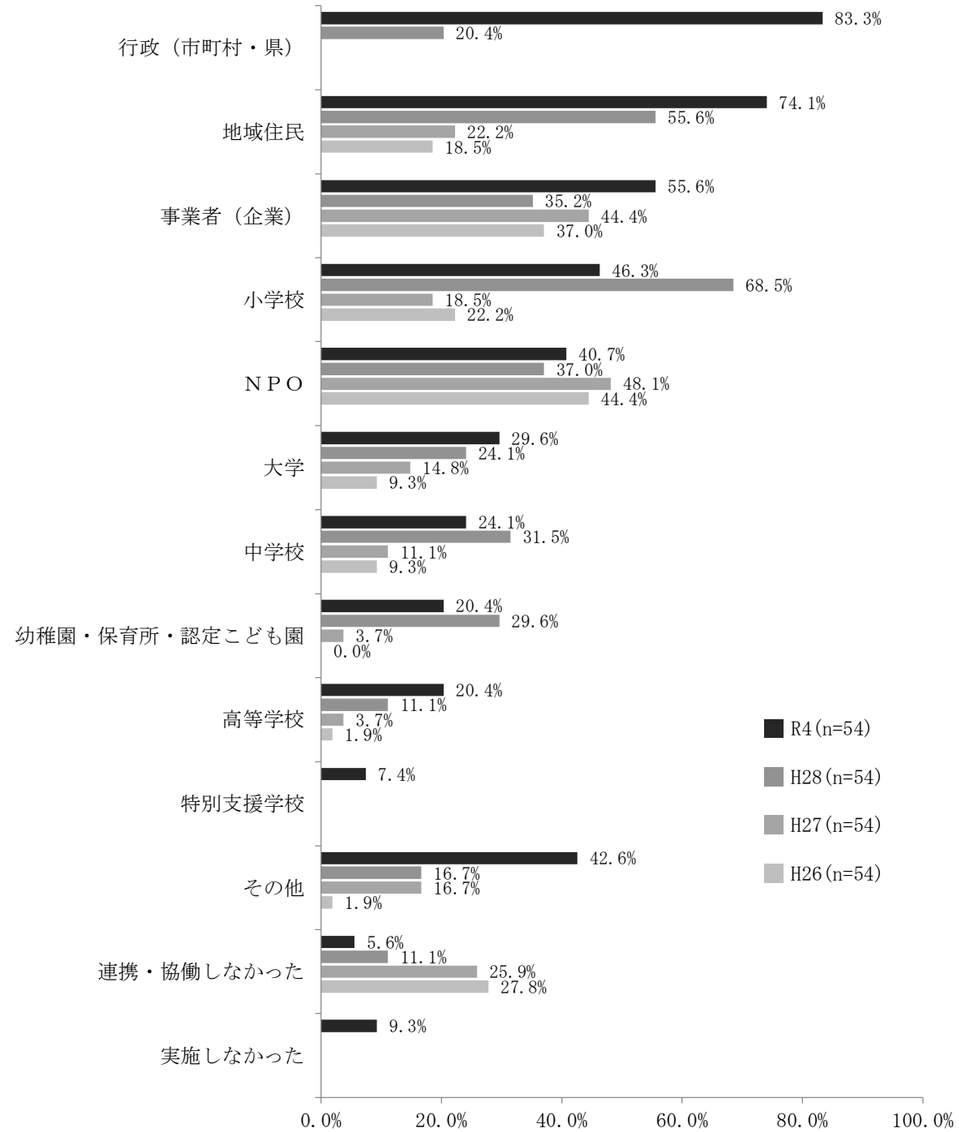
問４（３）　上記以外の場合、どのような主体と連携・協働しましたか。【〇は複数可】
（上記以外の例）地域の清掃活動、地域づくりのネットワーク形成、イベント開催、ＡＥＬネット環境学習スタンプラリーに参加 など



〈その他〉（抜粋）
・アウトドアタレント

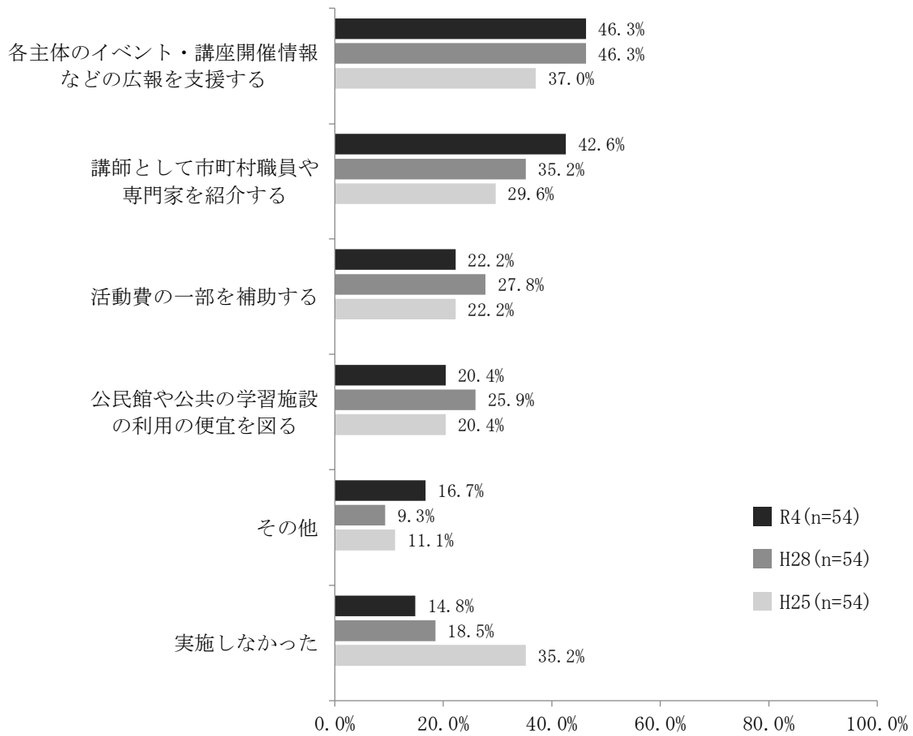
〈実施しなかった理由〉（抜粋）
・人員不足
・開催のノウハウが無いため

過去との比較
どのような主体と連携・協働して環境学習を実施しましたか。



・設問の主旨を踏まえ、問４（２）、（３）を併せて集計した結果と、2014(H26)～2016(H28)年度の結果を比較したもの。

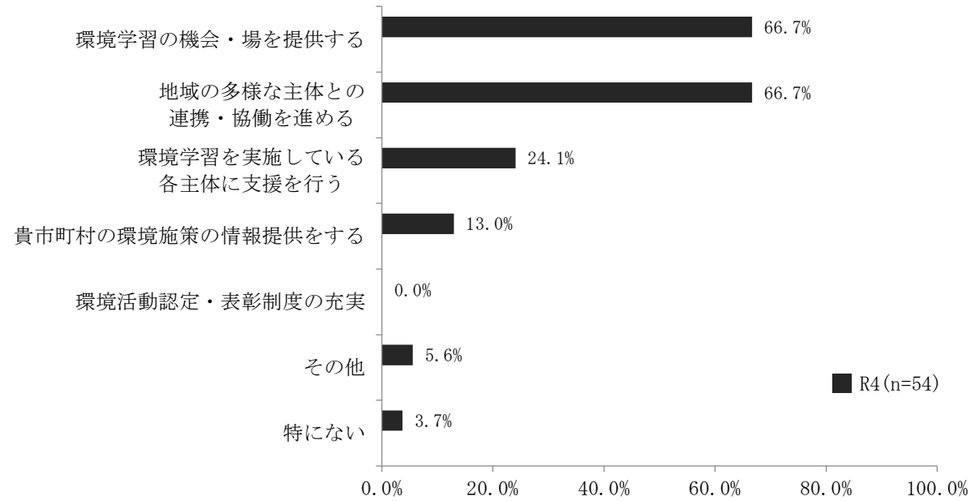
問５　ＮＰＯや事業者、学校等が実施している環境学習の内容について、どのような支援をしましたか。【○は複数可】



〈その他〉（抜粋）
・調査道具の貸出、資材の提供
・活動場所や他団体との協働のコーディネート
・大学生地域貢献事業団体と連携し、食品ロス削減への取組を支援
・職員によるお手伝い

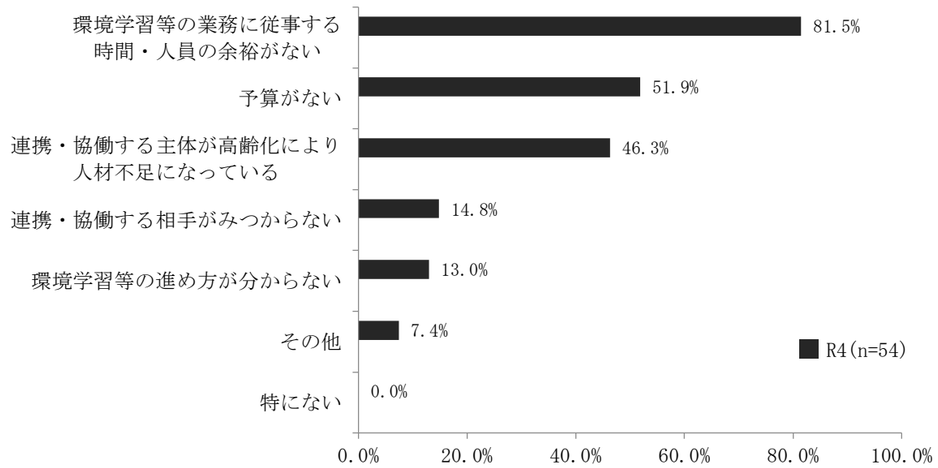
〈実施しなかった理由〉（抜粋）
・支援できる体制が整ってないため、時間、人員不足
・支援・連携の申出が特になかったため。
・実施している環境学習を把握していないため。

問６　今後、地域の多様な主体による地域特性を踏まえた環境学習等の取組を進めるために、重要だと考えることは何ですか。【○は２つ】



〈その他〉（抜粋）
・人材、予算
・新たな人材の発掘、育成

問７　今後、地域の多様な主体による地域特性を踏まえた環境学習等の取組を進めるうえで、妨げとなっていることは何ですか。【〇は複数可】



〈その他〉（抜粋）
・公園や河川などの施設管理者との調整
・「地域の多様な主体」がない

問８　地球温暖化対策を始めとする様々な環境対策を進めるため、貴市町村において実施している環境学習等で、力を入れている取組、紹介したい事例がありましたら、御記入ください。（自由記載）

１５事例

問９　地域の多様な主体による地域特性を踏まえた環境学習等の取組を進めるために、別添調査票１、２についても御回答ください。

調査票１：市町村と地域団体（自治会、コミュニティ、老人クラブ、子ども会）が連携・協働して行った環境保全活動や環境学習

調査票２：地域団体（自治会、コミュニティ、老人クラブ、子ども会）が行った環境保全活動や環境学習

調査票１　市町村と地域団体が連携・協働して行った環境保全活動や環境学習
・連携・協働している環境学習の分類と事例数の上位８市町村

	環境に関するイベント・講演※	環境学習講座・講習会	環境美化活動	環境保全活動	自然観察会などの体験学習	水質や生態系などの調査活動	その他	計
回答数	9	24	20	12	33	7	21	126
回答数のうち、事例数が上位８市町村								
岡崎市		3	5				20	28
日進市	1	7			8	1		17
田原市	3	1			10			14
春日井市			2	2	2	3		9
半田市		1			5			6
碧南市	1		3		2			6
西尾市				6				6
北名古屋市		6						6

※主催ではなくブース出展やパネル展示含む

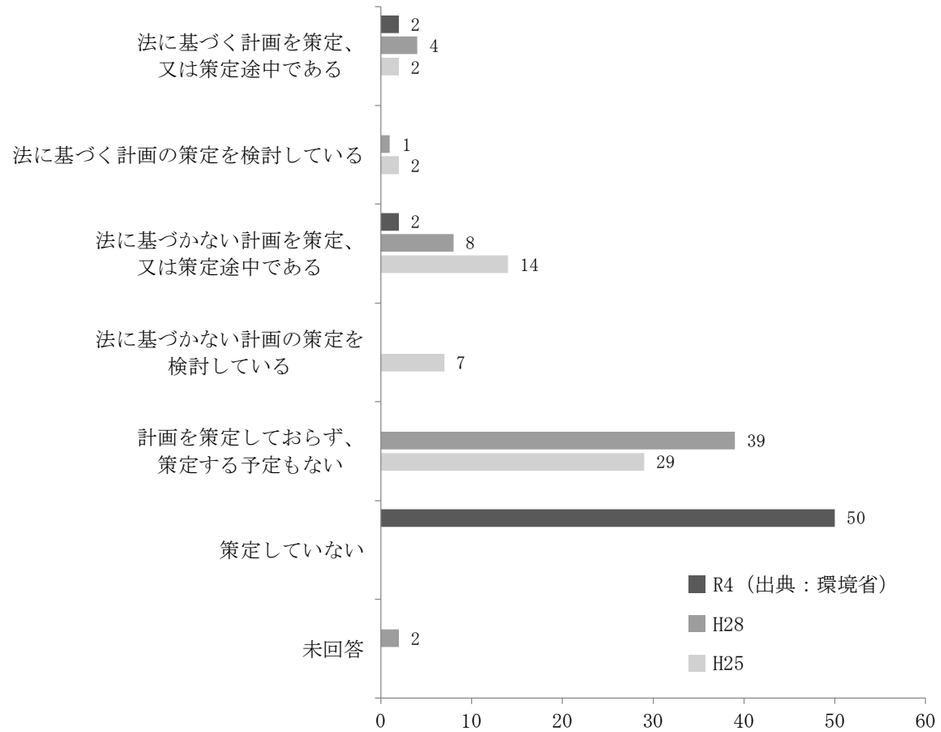
調査票２　地域団体が行った環境保全活動や環境学習

・実施した環境学習の分類と事例数の上位５市町村

	環境に関するイベント・講演※	環境学習講座・講習会	環境美化活動	環境保全活動	施設見学を用いた環境学習	自然観察会などの体験学習	水質や生態系などの調査活動	その他	計
回答数	3	1	40	47	1	9	2	1	104
回件数のうち、事例数が上位５市町村									
知立市			1	34					35
西尾市			28						28
日進市	2	1	1	2		3			9
半田市				1		4	1		6
犬山市			3	3					6

※主催ではなくブース出展やパネル展示含む

参考　環境学習に関する計画の策定状況



〈法に基づく行動計画〉
- なごや環境学習プラン（名古屋市、2016(H28).3）
- 第２次岡崎市環境基本計画（岡崎市、2021(R3).3）
- 岡崎市環境教育推進計画（岡崎市、2014(H26).3）

〈法に基づかない行動計画〉
- 第２次豊橋市環境基本計画（豊橋市、2016(H28).3）
- 豊橋市環境学習等実行計画（豊橋市、2013(H25).1）
- 豊橋市環境基本条例（豊橋市、1996(H8).4）
- 豊橋市地球温暖化対策地域推進計画（豊橋市、2016(H28).3）
- 第２次一宮市環境基本計画（一宮市、2014(H26).3）

※名古屋市、岡崎市には法に基づかない行動計画もあるが、法に基づく行動計画を優先して計上している。

資料３

愛知県環境学習等行動計画 2030 中間評価（定量的評価）

各主体に期待される主な取組の実施状況（県以外）

主体（調査方法）＜回答数／調査数＞			調査結果	
主な取組		アンケート内容	2022（R4）	2016（H28）
家庭（県民）	家庭（県民）（県政世論調査）＜1,575／3,000 者＞			
	直接体験（身近な自然の体験等）の機会の確保	環境学習や環境保全活動に参加したことがある人の割合	61.8%	66.0%
	エコアクションの実践	毎日の暮らしの中で何らかのエコアクションに取り組む人の割合	96.6%	95.7%
	世代間の学び合い・育ち合い	家族や友人で、環境についての話し合いや環境活動に参加した人の割合	65.0%	72.1%
学校	幼稚園等（アンケート調査　対象：私立幼稚園、私立幼稚園型認定こども園、特別支援学校幼稚部）＜58／344 園＞			
	発達段階に応じた環境教育の実施	実体験を取り入れた環境教育を実施した幼稚園等の割合	87.9%	97.7%
	体験学習・問題解決的な学習の充実			
	ESD の視点を意識した環境教育の実施			
	多様な主体との連携・協働による環境教育の実施	環境教育や環境保全活動を連携・協働により行った幼稚園等の割合	60.3%	57.3%
	学校の外へと発展する環境教育の実施			
	環境教育や ESD の推進のための人材育成と研究	教職員が環境教育に関する研修等に参加した幼稚園等の割合	36.2%	33.0%
	小・中・高・特支（アンケート調査　対象：県内各学校（国立・名古屋市立を除く））＜小 437／704 校＞　＜中 205／324 校＞　＜高 128／206 校＞　＜特支 30／36＞			
	発達段階に応じた環境教育の実施	実体験を取り入れた環境教育を実施した学校の割合	小　100.0% 中　98.5% 高　92.2% 特支 98.7%	小　100.0% 中　99.6% 高　94.6% 特支 100.0%
	体験学習・問題解決的な学習の充実			
	ESD の視点を意識した環境教育の実施	SDGs の視点を導入又は環境教育が SDGs の一部であると意識している学校の割合	小　99.8% 中　100.0% 高　98.4% 特支 97.4%	小　97.9% 中　96.9% 高　90.6% 特支　85.1%
		総合的な学習（探究）の時間等の授業における各種環境の視点を導入した学校の割合	小　98.9% 中　88.8% 高　82.0% 特支 80.5%	小　99.3% 中　77.6% 高　68.5% 特支　71.6%
	多様な主体との連携・協働による環境教育の実施	環境教育や環境保全活動を連携・協働により行った学校の割合	小　97.5% 中　92.2% 高　82.8% 特支 81.8%	小　96.8% 中　89.4% 高　77.2% 特支　61.2%
	学校の外へと発展する環境教育の実施			
	環境教育や ESD の推進のための人材育成と研究	教職員が環境教育に関する研修等に参加した学校の割合	小　61.6% 中　58.5% 高　57.0% 特支 39.0%	小　60.3% 中　59.2% 高　64.4% 特支　32.8%

主体（調査方法）＜回答数／調査数＞				調査結果	
	主な取組		アンケート内容	2022（R4）	2016（H28）
学校	大学（アンケート調査　対象：県内各大学（短期大学を含む））＜39／71 校＞				
		発達段階に応じた環境教育の実施	環境保全・環境教育や ESD に関する研究や講座、イベント等を実施した大学の割合	71.8%	51.3%
		体験学習・問題解決的な学習の充実			
		ESD の視点を意識した環境教育の実施			
		多様な主体との連携・協働による環境教育の実施	環境教育や環境保全活動を連携・協働により行った大学の割合	89.3%	85.0%
		学校の外へと発展する環境教育の実施			
		環境教育や ESD の推進のための人材育成と研究	教員養成カリキュラムのある大学のうち、環境教育の指導方法を教授するような授業を実施した大学の割合	39.3%	15.0%
社会	事業者（アンケート調査　対象：EPOC、名商エコクラブ）＜27／427 者＞				
		社員教育の中での環境学習等の実施	社員教育の中で環境教育を実施した事業者の割合	96.3%	100.0%
		事業活動での環境負荷低減を通した実践的な環境学習等の実施	サービスや情報提供などでの環境負荷低減の取組や、環境に配慮した製品・サービスの提供を行った事業者の割合	100.0%	97.1%
		多様な主体との連携・協働による環境学習等の実施	環境保全活動や環境教育を実施した事業者のうち、こうした活動を連携・協働により行った事業者の割合	85.2%	93.9%
	ＮＰＯ（アンケート調査　対象：環境保全を図る活動を行う者）＜76／387 者＞				
		地域における発展的な環境学習等の実施	環境保全活動や環境学習を実施した NPO の割合	77.6%	88.4%
			環境保全活動や環境学習を実施した NPO のうち、こうした活動を連携・協働により行った NPO の割合	94.9%	93.4%
			コーディネーターの役割を実施したことがある NPO の割合	32.9%	42.0%
	ＰＴＡ（アンケート調査　対象：幼稚園等、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校など）＜689／1,588＞				
		地域の行事や課題を素材にした環境学習等の実施	地域のリサイクル活動、自然保護活動、地球温暖化対策に関する活動などの環境保全活動を連携・協働により行った PTA の割合	75.1%	－
			地域の清掃活動や草刈りなどの環境美化活動を連携・協働により行った PTA の割合	67.5%	－
			その他の環境に関する活動を連携・協働により行った PTA の割合	14.8%	－
	市町村（アンケート調査）＜54／54 市町村＞				
		地域の特性を活かした環境学習等を実施できる環境づくり	地域住民向けの環境学習を実施又は地域の特性等を活かした環境学習を実施した市町村の割合	98.1%	94.4%
			連携・協働して環境学習を実施した市町村の割合	85.1%	88.9%
		事業体としての環境負荷低減に向けた、職員への環境学習等の実施	職員に対して環境学習を実施した市町村の割合	79.6%	85.2%
		環境学習等を行う各主体への支援	NPO や事業者、学校等が実施している環境学習への支援を行った市町村の割合	85.2%	81.5%

各主体に期待される主な取組の実施状況（県）

主体（調査方法）				調査結果	
	主な取組		県の主な施策の状況	2022（R4）	2017（H29）※
社会	県（関係機関への照会「愛知県の環境学習等に関する取組について」による）				
		地域の特性を活かした環境学習等を実施できる環境づくり	あいち環境学習プラザ来館者数	4,625 名	11,154 名
			プラザ環境学習講座開催回数 プラザ環境学習講座参加者数	121 回 3,179 名	53 回 1,612 名
			AEL ネット環境学習スタンプラリー参加者数	29,930 名	66,984 名
			環境学習副読本の作成・配布部数	52,500 部	56,000 部
		事業体としての環境負荷低減に向けた、職員への環境学習等の実施	中期新規採用職員研修受講者数（科目：あいちエコマネジメント）	454 名	375 名
		環境学習等を行う各主体への支援	中高年・シニア世代の環境学習講師（あいち eco ﾃｨｰﾁｬｰ）による環境学習講座実施回数 中高年・シニア世代の環境学習講師（あいち eco ﾃｨｰﾁｬｰ）の養成人数	36 回 19 人	－
			環境学習コーディネーターへの相談件数 環境学習コーディネーターによるコーディネート件数	6 件 10 件	13 件 21 件
		県内全域を対象とした環境学習等の推進のための環境づくり	愛知県環境学習施設等連絡協議会加盟施設等	186 施設等	181 施設等
			あいち森と緑づくり環境活動・学習推進事業交付対象事業件数	110 件	108 件
		環境、環境学習等に関する情報の収集・提供	環境白書・愛知の環境のあらましの作成	750 部 1,200 部	1,000 部 1,500 部
			生涯学習情報システム「学びネットあいち」により環境学習情報を提供、自然科学・環境分野の人材を情報提供	実施	実施
		学びを行動につなぐための環境学習等を通じて育む「五つの力」（体感する力、理解する力、探究する力、活用する力、共働する力）	◎：各事業に最も関連する力（一つのみ）	体感：22 理解：48 探究：４ 活用：24 共働：19 【計：117】	体感：25 理解：47 探究：４ 活用：23 共働：21 【計：120】
			○：各事業に関連する力（複数可）	体感：33 理解：43 探究：40 活用：29 共働：28 【計：173】	体感：27 理解：40 探究：34 活用：26 共働：16 【計：143】

※県の取組については、取組の実績を量的に把握し始めた 2017（平成 29）年度を基準年度とする。

体感する力

代表的な事業に対する定性的評価　ステップアップ・ワークシート

資料４

事業の名称等
2021（令和３）年度
もりの学舎ようちえん

ねらい

四季を通じて自然を体感し、親しんでもらう。
自然に親しむことで、自然の大切さについて考える動機づけ（きっかけ）とする。

学習者の状況

自然体験をほとんどしたことがない。
保護者が子どもに自然体験をさせたくても、やり方が分からない方が多い。

成果指標

四季を通じて自然を体感し、親しむことができたか。
自然に親しむことで、自然の大切さについて考える動機づけ（きっかけ）ができたか。

取組の内容	工夫	学習者の反応	学習の効果＆主に育まれる力
１　森の危険な生きものを紹介するなど、自然に親しんでもらうところからスタート（５月）	「森の危険な生きもの」 ･･･ハチに遭遇したときの対処方法を「ハチさんが飛んできた！」という遊びを通して楽しく練習。 ゲーム化 「初夏のしぜんおさんぽ」 ･･･モールで作った人形「もりんちゅ」と一緒にもりの学舎周辺を散歩。もりんちゅの視点で自然を観察し、新たな発見につなぐ。 本物体験 共感・納得	 ハチが飛んできた時には、動かないようにするよ！ 葉っぱの裏で何か動いたみたい。 あっ、小さな虫がいたよ！	森に入るときに注意することを学ぶことで、安全な過ごし方を知ってもらうことができた。 普段とは異なるもりんちゅの視点で森を散歩することで、生きものや植物への興味を高めることができた。 体感 理解 共働 探究 活用
２　生きものにふれる、森にある物を使った工作、森のめぐみの試食などにより、四季を通じた自然体験を行う（７月～１月）	「冬の森のおさんぽ」 ･･･冬という危険生物に遭遇しにくい季節を活かし、森の中を散歩。途中で落ち葉を集めたり、大きな葉っぱを飛ばしたり、冬の森を満喫。 本物体験 見守り	 いろいろな落ち葉があるね！ この葉っぱのほうが大きいよ！	森に入る機会がほとんどない冬でも、自然遊びを通して、新たな発見や楽しさを肌で感じることができた。 体感 理解 共働 探究 活用
３　まとめ（３月）	「春をみつける」 ･･･森が春を迎える準備をしていることを、春をみつける散歩や春の色の草木染めを通して体感。プログラム終了後も自然への興味が持続するような呼びかけ。 本物体験 見守り	 カエルの卵がある！オタマジャクシもいるね。 小さな花が咲いているよ！	もりの学舎周辺での自然体験をきっかけにして、今後の自然とのふれあいにつなげられるようにすることができた。 体感 理解 共働 探究 活用

■令和３年度もりの学舎ようちえん

- 平成 28 年度から４歳以上の未就学児向けにもりの学舎で実施している事業。
- もりの学舎の環境を活かして、森の案内人「インタープリター」とともに、大人と子どもが一緒に自然や生きものとふれあうことができる、全６回のプログラムである。

学習者の変容

【保護者へのアンケート結果より】
［当日アンケート結果より］
- 川の魚をとることが初めてで楽しかった。
- なかなか家庭でできないスプーン作り、風呂敷染め、森の散策と、１年間親子ともに楽しむことができた。

［半年後アンケート結果より］
- よく観察することへの興味が芽生えた。インタープリターとの交流がとても刺激になった。
- 葉っぱの色や形などの細かい部分に注目するようになった。
（子どもの行動や発言についてわかるほどの変化を約 78%の保護者が感じていた。）

成果と課題

【成果】
- 四季を通じ、工夫を凝らした自然体験の場を提供することで、自然に親しんでもらうことができた。
- 本事業参加後、子どもの自然体験の回数の増加や継続が見られた。
- 自然に関する子どもの行動や発言に変化が現れ、また、保護者自身も子どもと一緒に自然の大切さについて考えるきっかけとなったと推測できる。

【課題】
- 子どもや保護者自身に対し、プログラム終了後にも、自然の大切さを考えてもらえるような働きかけをする必要がある。

理解する力

代表的な事業に対する定性的評価　ステップアップ・ワークシート

事業の名称等

2022（令和４）年度

プラザ環境学習講座

ねらい

自然、生きもの、ごみ、水、地球温暖化などの環境問題について、体験型の学習講座を通して理解を深め、環境を守るために自分たちに何ができるかを考え、自身の行動につなげてもらう。

学習したことを家族や友達に話すことで、日常生活の中で行う地球にやさしい行動「エコアクション」を広めるきっかけとする。

学習者の状況

環境問題について聞いたことはあるけど、詳しくは知らない。

知識はあるが、「エコアクション」にまで結びついていない。

そもそも環境問題について聞いたこともない。

成果指標

環境問題について理解を深め、環境を守るために自分たちに何ができるかを考え、自身の行動につなげることができたか。

学習したことを家族や友達に話し、日常生活の中で行う地球にやさしい行動「エコアクション」を広めるきっかけとなったか。

取組の内容	工夫	学習者の反応	学習の効果＆主に育まれる力
１　導入 いま地球上でどんな問題が起きているのか、また、何が原因なのかについて伝える。	現実に起きている問題をイメージしやすくするため、写真や映像を使って説明。 身近で考えられる問いかけ（例「朝起きてから今の時間までに何に水を使ったか？」など）やクイズを交えながら、環境問題は身近な問題であることを説明。 見守り　ゆさぶり	「温暖化がどんどん進んでいることを改めて学ぶことができた。」 「クイズがおもしろかった。」	環境問題が身近な問題であること、世界中で様々な環境問題が起きており、多くの人や生きものが困っていることを実感しながら、自分たちの生活との関係に思いを巡らすことができた。 体感　理解　共働　探究　活用
２　展開 簡単な実験や工作などを行い、体験を通して環境問題についてより分かりやすく伝える。	環境問題への関心をより高めるため、普段体験できないような内容の実験や工作など、印象に残る体験を提供。 見たり、聴いたり、触ったり、感じたりして体感することで、驚きや発見を生み、環境問題のしくみ（水がなぜ汚れるのか）等をより分かりやすく、自分事として捉えられるようサポート。 驚き・感動　本物体験	「実際の木の幹の太さを測って CO_2 の吸収量を知ることができて、木の大切さを改めて感じた。」 「顕微鏡でヨーグルトのふたの裏を見たら、さといもの葉っぱ同様の細かいでこぼこがあり感動しました。」	体感することで、好奇心を高め、さらに、こうしたらどうだろう、もっと知りたいという探究心が高まった。 体感　理解　共働　探究　活用
３　ふりかえり 学んだことをふりかえり、普段の生活の中で自分にできることを考え、発表し、共有する。	身近に多くのエコアクションがあることに気づき、行動する意欲につなげるため、講座で学び、体験したことを振り返り、「わたしたちにできることは何かな？」と問いかけて発言を促し、皆で共有。 家庭や地域へ環境を守る行動「エコアクション」が広まるよう、最後に、「帰ったら、家族や友達に今日学んだことを話してね」と呼びかけ。 共感・納得　成果実感	「地球温暖化を防ぐ努力を家庭でも気を付けながら取り組んでいきたいと思った。」 「田んぼなどでカエルを見つけたら、どの種類か見分けてみたい。緑や自然の大切さを改めて考えさせられた。」 「日頃から自然の中で疑問に思ったことは調べてみようと思った。」 「SDGs をもっと意識しようと思った。」	自分にできることは何かを考えて気づくことができた。 他の人の意見を聞くことで、自分では気づかなかった、環境を守るためにできることがたくさんあることに気づくことができた。 学んだことを話すことで家庭や学校、地域でのエコアクションを広めるきっかけとなった。 体感　理解　共働　探究　活用

■令和４年度プラザ環境学習講座

・あいち環境学習プラザにおいて、主に小学生向けに、地球温暖化、生物多様性、水やごみなどの環境問題について、実験や工作を交えた体験型の学習講座を実施。

学習者の変容

【児童へのアンケート結果より】

・参加する前までは、カエルやイモリは苦手だったが、講座に参加してみて、イモリやカエルのことを知ってみると親近感がわき、生きものを大切にしたいと感じた。

・疑問に思ったことをどのようにして研究調査をして、試して結論を導き出すかというやり方が、ムササビのこととともによくわかった。

【依頼者（教師等）へのアンケート結果より】

・節水を心がけている様子が学校生活の中でも見られるようになった。

・エコアクションに書いたことを学校でやっている子がいた。

成果と課題

【成果】

・環境問題は身近な問題であることを理解してもらい、自分たちにできることを考え、行動に移す意欲を育むことができた。

・夏休み講座では自然や地球温暖化など、多岐にわたる分野を取り上げ、各分野への理解を深めてもらうことができた。

【課題】

・令和４年度に、中学生向けのプログラムを作成・拡充したが、今後も講座の内容について社会情勢の変化等に合わせて、更新をしていく必要がある。

探究する力

代表的な事業に対する定性的評価　ステップアップ・ワークシート

事業の名称等

2022（令和４）年度
あいちの未来クリエイト部

あいちの未来クリエイト部

ねらい

・高校生の環境問題に対する関心や環境意識を高め、課題発見能力や課題解決能力を育む。

・高校生が仲間とともに自分たちで考えながら取り組むことで、主体性、協調性を育む。

学習者の状況

・環境への興味や活動レベルは様々である。

・どのように調査に取り組めばよいのかわからない。

・顧問の指導に従い、活動に対して受け身の態度の生徒が多い。

成果指標

・高校生の環境問題に対する関心や環境意識を高め、課題発見能力や課題解決能力を育むことができたか。

・高校生が仲間とともに自分たちで考えながら取り組むことで、主体性、協調性を育むことができたか。

取組の内容	工夫	学習者の反応	学習の効果＆主に育まれる力
１　キックオフミーティングで活動のオリエンテーションを行い、今後に資する講義を受講後、活動内容を検討（６月）	・アドバイザーや講師から、伝えたいことをわかりやすく他者に伝えるコツや話し合いのコツについて講義を受け、活動開始の準備をサポート。 ・質疑応答の時間を設けて発言を求めることで、積極的な参加を促進。 共感・納得 ・ファシリテーターがサポートしつつ、高校生中心で今後の活動内容を検討。 見守り	・最初は何をするか不安だったけど、講義を受けて今後の活動のポイントがわかった！ ・講義の内容を消化して、質疑応答の時間に質問することができた！ ・どのような内容でこれから調査・研究を進めていこうかな？	・講義の内容から、今後の自分たちの活動の進め方を具体的にイメージしやすくなった。 ・自分の考えや疑問を発言する機会で積極性を育んだ。 ・調査・研究の内容や方向性を自分たちで決定することで、興味関心を高めた。 体感 理解 共働 探究 活用
２　専門家の支援を受けてフィールド調査やデータ分析等の調査・研究を実施（７月～11 月）	・高校生が主体的に調査・研究を行えるよう、高校ごとにテーマに沿った専門家が必要に応じて助言。 共感・納得 本物体験 驚き・感動	・専門家の意見を聞くことで、調査・研究検討の議論の幅を広げることができた！ ・今までに体験したことがないことができて、とても良い経験になった！	・体験から自ら感じ、学ぶことができた。 ・専門家からアドバイスをもらえるという貴重な体験を通して、自信がついた。 体感 理解 共働 探究 活用
３　調査研究発表会（中間発表会）を実施（11 月）	・調査・研究を振り返り、活動内容の理解を深めるため、成果を披露する調査研究発表会を実施。 ・調査研究発表会に過去の参加校も出席し、研究発表や交流の機会を提供。 成果実感	・他校の発表を見ることで、刺激を受けて、今後の調査・研究の発展や教材作成に向けて、より良いアイデアを練ることができた！ ・ステージでの発表は緊張したが、聞いてくださった皆さんに学んだことを伝えられた！	・発表に向けて自分のこれまでの活動を振り返ったり、発表を聞いた人から感想や質問等をもらったりすることで、新たな気づきや課題を見つけることができた。 体感 理解 共働 探究 活用

4　調査・研究の成果を基に、誰に何を伝えたいか話し合い、意見をまとめた環境学習教材を作成し、実践（12 月～３月）	・調査・研究で得た知識を基に、伝える対象・内容を意識して教材の作成を進められるよう、ファシリテーターが支援。 見守り ・作成した教材を体験した周囲の人から、感想や改善点などをフィードバック。 本物体験	・教材作成は、案がまとまるのは意外と早かったが、実際に作ってみるとやることが多すぎて大変だった！ ・自分達の作った教材をたくさんの人に楽しく遊んでもらえてうれしかった！	高校生が自ら考え、仲間とのディスカッションを行いながら、学んだ成果を教材という形にできた。
5　活動報告会を実施（３月）	・調査研究成果とそれをもとにした教材を発表し、実際に教材を体験。 ・大学生やあいち eco ティーチャーとの交流会を行い、世代間の交流の場を創出。 成果実感	・スライド発表で質問してもらうことで新たな発見ができた。教材体験の説明が上手くいくか不安だったけど、楽しんでもらえてそうで良かった！ ・大学生もあいち eco ティーチャーも私たちが持っている以上の知識があり、とても勉強になることが多かった！	教材を活用し、学びを周囲に広げることができた。

■令和４年度あいちの未来クリエイト部

高校生が、専門家の支援を受けて地域の環境問題に関する調査・研究を行い、その結果を基に環境学習教材を作成するとともに、その教材を活用し、普及啓発する。

学習者の変容

【高校生へのアンケート結果より】
・自分から意見を交わし、わからないところを調べていく積極的な姿勢が身についた。
・周りの意見を吸収してより良いアイデアを出すように努力することができるようになった。
【顧問へのアンケート結果より】
・引っ込み思案な生徒が多かったが、人前で話すことに自信が持てたように見える。
・意見を積極的に出そうとする姿勢が見られるようになった。また、根拠を持って話すことができるようになった。

成果と課題

【成果】
・活動の中で課題を見出し、それを解決するための調査・研究を検討して実践することにより、課題発見能力や解決能力が育まれた。
・自分の考えを積極的に述べ、仲間と協力しながら取り組むことができるようになり、主体性や協調性の向上につながった。
・令和３年度に「過去参加校との交流の機会を設ける等、活動を継続・発展させる工夫を実施しているが、不十分な状況のため、さらなる工夫が必要である」という課題を挙げていた。この課題に対し、令和４年度は活動報告会で大学生やあいち eco ティーチャーとの交流を行うことで、世代間の学び合いを行った。
【課題】
・令和４年度の事業終了後に教員に対してアンケートを行ったところ、「専門家の支援が受けられる」ことを期待していた教員が多かった。令和５年度の事業では、調査・研究時に生徒と専門家の接点をさらに増やすことができるようにしたい。

活用する力

代表的な事業に対する定性的評価　ステップアップ・ワークシート

事業の名称等

2022（令和４）年度
かがやけ☆あいちサスティナ研究所

ねらい

○持続可能な社会の実現のために必要な知識やスキルを身につけるとともに、それらを活用する能力を育む。

○参加した大学生、パートナー企業が、環境面における活動をより活発に実施するよう促す。

学習者の状況

○これまでに習得してきた知識やスキルを社会でどのように活用していくか、まだ具体的なイメージがわいていない様子である。

成果指標

○持続可能な社会の実現のために必要な知識やスキルを身につけるとともに、それを活用する能力を育むことができたか。

○参加した大学生、パートナー企業が、環境面における活動をより活発に実施するよう促すことができたか。

取組の内容	工夫	学習者の反応	学習の効果＆主に育まれる力
１　開所式で、学生、パートナー企業等との顔合わせ、活動や課題の説明等を実施（６月）	○愛知県知事の激励により士気を高めるとともに、学生、パートナー企業、ファシリテーターとの顔合わせ、活動や課題の説明等を行い、研究所活動を円滑に開始できるような機会を提供。 見通しOK	最初は不安だったが、学生同士で交流を行うことで、モチベーションの上昇や関係構築につながった！ 	○全体のスケジュールを理解し、期間内にやるべきことを順序立てて具体的にイメージできた。 体感 理解 共働 探究 活用
２　環境問題や SDGs、課題解決に関する基礎講座を受講（７月）	○今後の環境課題研究を行うに際し必要な知識や理解を深めるため、SDGs や課題解決の考え方の参考となる講座を実施。 ○昨年度の修了生から経験談や心構えを聞くことで、全体の活動のイメージをサポート。 共感・納得 ゆさぶり	環境や SDGs に関する知識が深まった！ 	○これから解決策を検討していくために必要な知識やスキルを習得した。 ○さらに必要なことについては自ら学習するなど、主体性を育んだ。 体感 理解 共働 探究 活用
３　研究所活動として、企業訪問による現場調査や企業担当者とのディスカッション、チームミーティングを実施（８月～11 月）	＜課題研究＞ 企業訪問による現場調査や企業担当者とのディスカッションにファシリテーターを交えることで、学生のインプット及びアウトプットが大きくなるよう橋渡し。 本物体験　驚き・感動　見守り ＜チームミーティング＞ 解決策を作り上げるためにチームミーティングを実施。 適切なタイミングでファシリテーターが助言を行うことで、学生の考えをうまく引き出し、議論が円滑に進むよう支援。	現場に行くと、企業が実際に行っている取組を体感できる！ チームでミーティングを行い、解決策に向けた議論を深めていった。 時間が足りない！ 	○実際に現地を調査し、企業担当者と議論することで、課題の意味を深く理解し、課題の解決がどのように持続可能な社会の実現につながるかに気づいた。 ○チームミーティングを重ねることで、解決策に向けた議論を深めると同時に、様々な視点で物事を考える力が育まれた。 体感 理解 共働 探究 活用

4　成果発表本番に向け、中間発表会を開催（10 月）	○成果発表会に向けたプレゼンテーション練習を実施し、出席者からのフィードバックを踏まえ、研究成果のブラッシュアップ等を促進。 共感・納得　ゆさぶり	練習会は他チームからの意見やプレゼンテーションの方法など、成果発表会に向けてとても参考になる！ 	○他者の意見により、新たな課題に気付くことができた。また、相手にわかりやすく伝える能力が育まれた。 体感 理解 共働 探究 活用
5　成果発表会・修了式で、研究所活動の成果である解決策を提案（12 月）	○提案した解決策をパートナー企業が評価。 成果実感 ○審査員による審査と合わせてオーディエンス賞を設け、来場者の参加性を高めることにより、来場者に伝わりやすいプレゼンテーションを行うよう学生に促進。	○チームみんなで考えたアイデアや発表の工夫がパートナー企業や来場者に伝わるといいな！ ○大勢の前での発表は緊張したが、今まで取り組んできた成果を練習したとおり発表できた！	○企業からの評価や審査員からの講評を受け、これまでの活動を振り返ることで、課題解決に必要なスキルや他者への伝え方の改善点を見つけることができた。 体感 理解 共働 探究 活用
6　県内の大学等で出張成果発表を実施（２月）	○学生自身の知識の習得や理解の増進、チーム内での研究だけにとどまらず、これまでの研究成果を発信。 共感・納得 成果実感	ともに行動する仲間を増やしたい！ 	○研究成果を広く発信することで、自身の活動の成果を実感し、継続的なエコアクションの実施につながった。 体感 理解 共働 探究 活用

■令和４年度かがやけ☆あいちサスティナ研究所

パートナー企業から提示された環境課題に対し、研究員である大学生が現場での調査や企業担当者とのディスカッションを実施し解決策を研究する。解決策を企業側に提案し、活動の成果を広くＰＲする。

学習者の変容

【学生へのアンケート結果より】
・初めて企業と連携した取組を行ったため、責任感や計画性を持って進めることができた。全体を通して、誰かに効果的に伝える方法等、多くの経験をさせていただくことができた。
・違う大学の学生でチームが構成されていたことや、基礎講座での他チームとの交流により、普段関わらないような学部の方から新しい発見や学びを得られ、楽しかった。参加する前は SDGs を何となくしか知らなかったが、参加後は自分事のように考えやすくなったし、普段の生活でも何かできることはないか自主的に考えるようになった。
【パートナー企業へのアンケート結果より】
・学生の新鮮な視点で企業が抱える課題を見直していただき、企業の中だけでは気づかなかった社会一般、特に Z 世代の課題の捉え方に気づくことができた。
【ファシリテーターへのアンケート結果より】
・学部や文化の異なるチームメンバーが意見を出し合い、それぞれの視点で感じたアイデアが反映されていった点が良かった。

成果と課題

【成果】
・企業から提示された課題の解決策を研究し、提案することで、知識やスキルを習得するだけでなく、活用する能力が育まれた。
・企業によっては提案された解決策を採用し、実施する見込みである。
・学生の柔軟な発想や考え方を取り入れることができ、本業とのシナジーにもなる。
・前回（令和 3 年度）の課題である「学生がチーム内だけでなく他のチームのメンバーと交流する機会を増やすことで、様々な視点から課題を理解できるようにする必要がある」については、今回（令和 4 年度）、7 月に実施した基礎講座においてチームをシャッフルしてのグループワークの時間を新たに設けており、改善できている。
【課題】
・学生が課題解決に向けた活動を実施したり、チーム間での交流・意見交換を行ったりするための機会をより充実させることで、熟度の高い提案を行えるようサポートしていく必要がある。

共働する力

代表的な事業に対する定性的評価　ステップアップ・ワークシート

事業の名称等	ねらい	学習者（依頼者）の状況	成果指標
2022（令和４）年度 環境学習コーディネート事業	環境学習を受けたい方と、環境学習を提供できる方の橋渡しを行うことで、県民、事業者、NPO、行政、学校等の様々な主体が各々のノウハウ等を活かしあい、環境学習の幅を広げ、より効果的な環境学習ができるようにする。	環境学習ってどうやってやるのか分からない。 講師は誰に頼めばいいのだろう。 どうやれば効果的な環境学習ができるのだろう。	県民、事業者、NPO、行政、学校等の様々な主体が各々のノウハウ等を活かしあい、環境学習の幅を広げ、より効果的な環境学習につなげることができたか。

取組の内容	（コーディネーターの）工夫	学習者（依頼者・講師）の反応	学習の効果＆主に育まれる力（取組の効果）
1　環境学習に関する相談・講師の依頼	学校、行政、事業者など依頼者の主体に合わせて、あいち環境学習プラザに相談するメリットを紹介したチラシを作成し、Web ページ等で周知。 過去のコーディネート事例を Web ページに掲載。 あいち環境学習プラザの来所者（社会見学申込者等）へ、コーディネート事業の説明を実施。 共感・納得	（依頼者） 「緑のカーテン講座の講師を紹介してほしい。」 「ビオトープや水に関する環境学習及び環境学習の進め方のアドバイスをもらえる講師を紹介してほしい。」 「高校生が興味を持てるような内容の環境問題の授業を実施したい。」	どのような講師を紹介してもらえるのか、どのような授業が作れるのか、何をしてもらえるのかがイメージしやすくなり、コーディネーターへの相談がしやすくなった。 体感 理解 共働 探究 活用
2　依頼内容に応じ、講師や施設等を提案	依頼の目的や学習の目標、授業内容の希望等を詳細にヒアリングすることにより、ニーズに合った講師や施設等を複数提案。 コーディネート終了後も依頼者と講師が関係性を保てるよう、コーディネーターが同席して打合せを行うことで早期に信頼関係が構築できるよう配慮。 共感・納得	（依頼者の反応） 「こちらが望んでいたテーマに対する講師を紹介いただけた。」 「児童の今までの学習を踏まえた内容にしていただけたのがよかった。」	コーディネーターの持つ幅広いネットワークから学習内容に適した外部講師や活動場所を選定することができた。 体感 理解 共働 探究 活用
3　学習日程や学校等の授業の目的に合わせたプログラム等の事前調整	依頼者と講師の双方と連絡を密にし、信頼関係を構築することで、講師が安心して授業に臨めるよう調整。 依頼者に対して、一過性の授業で終わらないように、事前・事後の学習の実施や、他の教科、総合学習との連携について提案。 講師が依頼者の求める内容をプログラムに取り入れることができるように、依頼者からヒアリングした内容を講師に伝えるとともに、より良い授業となるよう、伝えてほしい事や工夫する点も講師に助言。 見通しOK	（依頼者の反応） 「一学期から継続的に連絡調整をしてくださり、本当に心強くありがたかった。こちらの要望（今までの学習内容や児童の実態）を丁寧に聞き取り、適した講師を紹介してくださり、児童にとってよい学びにつながった。」 （講師の反応） 「授業の総まとめとして、講義させていただいたので、子供たちの反応が良くてやりやすかった。」	事前･事後の学習の実施や他の教科との連携を図ることで、より効果的な環境学習とすることができた。 相談者の希望する学習内容と外部講師の持つプログラムの調整ができた。 事前に依頼者の希望を聞くことで、講師が安心して授業に臨むことができた。 体感 理解 共働 探究 活用

4　講師を派遣し、環境学習を実施 ふり返り、改善提案の実施	コーディネーターが学習当日に立ち会い、講師と共にふり返りを行い、事後学習の提案やプログラム改善の提案を実施。事後学習として、どうしたら学習したことを生活の中で行動につなげられるのか、グループワーク等で話し合う時間を設けるなどの提案を実施。 驚き・感動　本物体験　成果実感	（依頼者の反応） 「私たちにできること」資源・環境を大切にするために、学校で取り組めることを考えていきたい。 （講師の反応） 「毎回子供さんからの温かいお手紙をいただき、大変励みになる。このように対応頂ける学校の姿勢に、大変好意を持ち、また是非ご協力したいという気持ちになる。」	振り返りにより、事後学習やプログラム改善の提案をすることで、より効果的な環境学習につなげることができた。 体感　理解　共働　探究　活用

■令和４年度環境学習コーディネート事業

・あいち環境学習プラザに窓口を設け、環境学習の連携・協働に関する相談業務や連携・協働先の紹介・マッチング等のコーディネート業務を実施。

学習者の変容

【依頼者へのアンケート結果より】
・地球温暖化を防ぐのは、１人１人の小さな取組からというメッセージを受け、緑のカーテンという１つの取り組みから、地球温暖化防止という大きな課題への取組の視点及び意識の移動が見られた。
・普段の生活の中で意識が変わった。
・ビオトープの良さについて改めて感じられた。

【講師へのアンケート結果より】
・小学生に接する機会を頂けたことで、スキルアップにつながった。
・〇〇業界と初めての協働で新しい発見があった。

成果と課題

【成果】
・学校における環境学習の機会の増加に加え、環境学習講師等のノウハウの有効活用を図ることができ、環境学習の幅が広がった。
・児童の意識が変わり、真剣に環境問題に取り組むなど効果的な学習につなげることができた。
・教育委員会、AEL ネット協議会、市町村、図書館等でチラシを配布したことにより、令和 3 年度とは違う団体からの依頼も多く、より多くの方に本事業をご活用いただいた。

【課題】
・依頼者からの授業内容や講師及び施設等に対する要望は様々であるため、紹介する講師の人数を増やす必要がある。

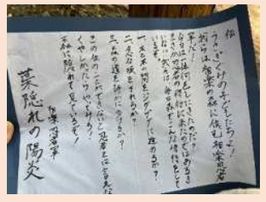
体感する力

各主体の取組事例に対する定性的評価　ステップアップ・ワークシート

資料５

取組事例の名称等

蒲郡あさひこ幼稚園

取組の内容	工夫	園児や関係者の反応	学習の効果＆主に育まれる力
１　園内での保育 ①日常保育 ②「あさひこ農園」での野菜作り ③園のお祭り	①子ども自ら何度も試し、確かめ、試行錯誤を繰り返しながら育っていけるような環境作りをし、自然豊かな園庭での遊び、廃材を使った製作活動等、創造力や自己課題を見つける力を育てる。教職員においては、情報共有タイムを毎日設け、園内外の研修にも積極的に参加。 ②苗付けから、草取り、収穫まで子どもたちが行い食育につなげる。 ③園で開催するお祭りでは、企画、準備、運営を年長児が主体的に実施できるよう支える。 見守り　本物体験　成果実感	①自由に遊ぶのって楽しい！友だち、先生大好き！ ②野菜が苦手な子も自ら育てた野菜は食べることができた。 ③友だちと協力して一つのものを作り上げる経験から達成感を感じることができた。 	お祭りの準備として、看板やメニュー表を作成するため、文字を書こうとしたり、お客さんの人数に合わせて商品の数を計算したりと、遊びの中で必要に駆られ、自ら方法を考えたり、友だちと協力し合いながら文字や数字に興味を持ち、使うことができた。 体感 理解 共働 探究 活用
２　自然教育 ①園児が自然とふれあう機会として、３年間にわたり月１回ごとに近隣の里山で園外保育を実施。 ②年中は「忍者修行」、年長は「季節の山の絵」を通して自然体験を実施。	①同じ場所に何度も出かけることで、動植物に触れ、五感を通して豊かな季節感を育む。大人が遊びを用意しすぎないようにし、子どもの発想・発見を大切にした活動を実施。 ②「忍者修行」では、里山に住んでいる忍者からの手紙による「修行」という名のチャレンジングな遊びを通して、達成感を味わえるように工夫。年長は同じ場所で季節ごとに山の絵を描く。目で見たものだけでなく、音・匂い・空気等、五感を通して感じたものを絵に描いていくことによって表現力を養う。 本物体験　ゲーム化	①お山の中にはおもしろいものがいっぱい！あれもこれもやってみたい、さわってみたい！ ②同じ場所なのに、季節によって全然違う絵ができた！春はお花がいっぱい、秋は葉っぱが赤や黄色になってる！  	同じ場所に何度も出かけることで、五感を使って季節の変化を感じとることができた。さらに、年長になると、感じたことを絵として表現することができた。 体感 理解 共働 探究 活用
３　関係者との連携・協働 ①「お父さんウィーク」として、父親が自由に保育に参加できる日を設定。 ②ブログ、SNS 等で毎日発信。 ③地域の方と園児が、昔の遊びを通して交流。	①「お父さんウィーク」は、父親にも幼稚園での子どもの様子を知ってもらうために実施。幼稚園と家庭をつなぐとともに、地域で子育ての楽しさを共有。 ②保育ドキュメンテーションにより、保護者に保育内容を共有。 ③地域の高齢者が、子どもに昔の遊びを伝えることで、世代を超えて交流。 見守り　本物体験　共感・納得	①家庭と園での様子が違うことに驚き。家ではお片付けしないのに園ではしっかりしている。社会性が育っていることを実感。 ②園での様子がよく分かる。 ③子どもたちとふれあうことで元気をもらえました！ 	幼稚園での様子を「お父さんウィーク」「保育ドキュメンテーション」等で積極的に共有することで、保護者や地域の方と良好な関係を築くことができた。 体感 理解 共働 探究 活用

ねらい

“生きる力”を育てるために、自然体験等を活用した五感を使った保育を行う。

園児の状況

各家庭における園児の自然体験の状況は様々である。
満３歳児から入園可能である。

成果指標

五感を使った保育ができたか。

■蒲郡あさひこ幼稚園

・自然体験を大切にした保育を実施している。

・園庭には「砂場」「動物舎」「かまど」、園庭の奥には斜面を利用した「あさひこランド」という、芝滑り、虫捕り等ができるエリアがあり、季節の虫や草花が遊び心を誘う。

・他にも「あさひこガーデン」というエリアには、トキワヤマボウシ等食べられる実のなる木が植えてあり、子どもたちにとって「癒しの森」となっている。さらに食育の一環として園児が季節の野菜を育てている「あさひこ農園」がある。育てた野菜はそのまま食べたり、干し野菜にしておやつで食べたりしている。

・また、「火」を使う体験を大切にしており、収穫した野菜を蒸篭で蒸すために、かまどで薪をくべ、火の便利さ・危険さ等を体験から学べるような環境を用意している。

かまど

あさひこガーデン

園庭での遊び

五感を使った自然体験

園児の変容

【先生のコメント】

・年中の「忍者修行」では、長所を互いに伸ばすような工夫として、それぞれの子の修行の成果をクラス全体で共有することで、一人一人の良いところを認め合えるようになった。全体の場で発言をすることに抵抗感があった子も、自分の意見を言えるようになり自信がついた。また視野が広がり、友だちの意見に耳を傾けようとする姿も見られるようになってきた。

【保護者のコメント】

・保育者が子どもに対して、自己肯定感を持てるような声かけをしてくれたり、全面的に受容してくれることで、子ども自身にも優しさや思いやりの心が育っている。

・虫が苦手で見るのも嫌と言っていた我が子が、園生活の中で虫への抵抗感が薄れ、「虫見つけたよ」と報告してくれるようになり、人と生き物とのつながりを感じることができるようになってきた。

・「お父さんウィーク」で経験した園での遊びを「家でもやってみよう」ということになり、我が子との関わりがさらに増えた。

・年中、年長と園で過ごすことによって、言葉での表現に広がりができ、自己主張ができるようになった。

成果と課題

【成果】

・五感を使った自然体験を通して、とことんのめりこんで遊ぶことにより、工夫する力、創造力、自己課題を見つける力が育った。

・子どもの主体性を重視した保育が、小学校入学後、指示待ちではなく状況に応じて自分で判断して行動する児童の姿勢の形成につなげることができた。

・人や自然と関わりながら過ごしていくことにより、「ぼく、わたしって素敵」という自己肯定感のベースを作ることができた。

【課題等】

・本園での取組をさらに幅広く伝え、地域全体で温かい子育てをしていけるようにする。
また、小学校教諭と交流をし、スムーズに就学できるよう、子どもの育ちを共有する。

・継続して注意していく点として、自然体験を行う上での安全管理が大切なので、環境の確認や、園外保育の下見等をこまめに行い、危険がないように気をつけていく。

体感する力、理解する力、共働する力

各主体の取組事例に対する定性的評価　ステップアップ・ワークシート

取組事例の名称等
犬山市立羽黒小学校
（第５学年 総合的な学習の時間
お米から食を見つめよう）

ねらい

米作り体験を通して、地域の環境や食の大切さを理解するとともに、地域の方と一緒に活動することで、地域社会との協働を学ぶ。

学習者の状況

米については、教科書で学んでおり知識はあるが、実際に米作りを体験したことがない児童がほとんどである。

成果指標

米作りを通して、水田をとりまく環境や食の大切さを理解するとともに、地域の方と一緒に取り組むことで、地域社会との協働を学ぶことができたか。

取組の内容	工夫	学習者の反応	学習の効果＆主に育まれる力
１　米作りについて学ぶ（導入）	・社会科の授業でも取り扱った米という身近なものをテーマとすることで、児童の学習意欲を高めるように展開。 ・米作りから、自然環境、歴史、食などの多くの知識を得られるように、また、SDGs に関連づけた内容にするよう、授業構成を工夫。 ・米作りの工程にはどのような意味があるのかを考え、作業の流れを理解しながら学習。 ・電子黒板などを利用して、視覚的に米作りが学べるように工夫。 共感・納得　見通しOK	・米作りについて知っていることを児童同士で共有すると、新たな気づきがあり、驚きの声が上がった。	・自然環境、歴史、食などに関する知識同士を結び付けることで、横断的な学びとすることができた。
２　米作り体験（体験） ・肥振り（４月） ・田植え（５月） ・稲刈り（１０月） ・脱穀（１０月）	・学校近くの学習田で、羽黒コミュニティの方が、田植えの準備や稲の植え方をレクチャー。 ・羽黒コミュニティの方の指導を受けながら、鎌での刈り取り、刈り取った稲を束ね、稲架（はさ）掛けする作業や、農家が使っているバインダーによる刈り取りも体験。 ・稲架（はさ）掛けし乾燥させた稲を脱穀。羽黒コミュニティの方が昔ながらの脱穀の道具も紹介しながら、米作りの歴史も学習。 驚き・感動　本物体験	・自らの手で植えることができ、楽しそうな様子であった。 ・稲刈り、脱穀により米作りを体験した後の児童には、達成感に満ちた笑顔があふれていた。 	・普段食べているお米がどのように生産されているか、田植えから脱穀までの一連の作業を通した実体験をもって学習することができた。
３　発表会（まとめ） １月に米作りを通して学んだことを発表する場を設けている。	・自分たちが体験した米作りの工程を振り返り、苦労したことや驚いたことなどを発表。 ・体験を通じて感じたことや気づいたことを積極的に発信。 共感・納得　成果実感	・相手に分かりやすいように、言葉や図を工夫して発表した。 炊き上がったお米	・発表の手順や内容を考え準備する活動を通して、自分たちが経験した米作りを再度振り返り、学習した内容を深めることができた。

4　関係者との連携・協働
・羽黒コミュニティ
・保護者

・羽黒コミュニティのもつ豊富な知識・経験による米作りは、児童が普段の授業ではできない、貴重な体験。
・お世話になった羽黒コミュニティの方を招待した感謝の会を開催し、世代を超えた交流の場を設定。
・保護者も米作り体験に参加することで、普段の学校での様子を知ることができ、家庭での振り返りに活用。

本物体験　見守り　成果実感

・保護者とは異なる年代の人から米作りを直接指導していただき、安心して作業を体感することができた。
・保護者が見守り、適度に手助けも得られたため、普段以上に張り切って体験に参加できていた。

・学校だけではできない体験を、地域との連携・共働により実現することで、広がりをもった学習にすることができた。
・学校の取組を家庭と共有し、家庭での振り返りに活用することで、家庭内での学び合いにつなげることができた。

■犬山市立羽黒小学校（第５学年 総合的な学習の時間 お米から食を見つめよう）

・学校教育目標に「自主」「創造」「協力」を掲げている。
・第５学年の総合的な学習の時間では、児童の主体的学習や地域、世代間の学び合いを促していくために、羽黒コミュニティという地域の方の協力を得て、約 20 年にわたり米作り体験を実施している。
・総合の発表では、米の学習からさらに広げて、「食」のテーマで調べ学習を行った。
・身近な給食や、日本の食事・世界の食事など、様々なテーマから、自分が興味関心のあることについて調べ、スライドなどを使用して人に伝える学習を行った。

４月の肥振りで、土に養分を与えてから、５月に田植えを行った。コミュニティの方の指導で、米作りのための段取りや準備を理解し、作業体験することができた。

米の収穫後に、お世話になったコミュニティの方に感謝の会を開き、世代を超えて、会話やゲームを楽しんだ。
学校給食に、収穫米を使用し、全校児童に食べてもらった。

学習者の変容

【児童のコメント】
・自分が普段食べているお米が、こんなに手間をかけて作られていることを知り、ありがたいと感じた。
・脱穀では、千歯こきや輪転機など、昔使っていた道具を体感でき、作業の大変さを実感できた。

【先生のコメント】
・手での田植えや、いろいろな道具を使っての脱穀など、普段経験できない活動によって、子どもたちの学びがより深まったと感じる。
・昔の人の苦労、米作りの楽しさなど、体験を通して学び、食材や、作る方への感謝の気持ちが高まった。

【保護者のコメント】
・子どもと一緒に米作り体験に参加することで、分かったこと、気づいたことを子どもと共有することができた。
・泥の中に素足をつけ作業したり、笑顔で友達と汗をかいてがんばったり、普段は家では見ることのできない子どもの姿を見ることができた。

【羽黒コミュニティのコメント】
・米作りを通して児童と交流することで、身近な地域について知ってもらうことができた。
・地域の子どもたちとふれ合い、感謝されることで自分たちも力をもらった気がする。

成果と課題

【成果】
・米作りを通して、水田にすむ生きもの、地域の環境を知ることができた。
・自ら収穫したお米を食べることで、お米一粒一粒のありがたみを感じることができ、食育にもつなげることができた。
・地域の方と一緒に実施することで、他者と力を合わせて取り組むことの大切さを理解することができた。

【課題等】
・地域の米作り農家が減少傾向にあり、担い手不足と高齢化に直面している。指導していただく米作りのエキスパートの方も減少しているため、いつまで今の形で続けられるか不安はある。

体感する力、理解する力、共働する力

各主体の取組事例に対する定性的評価　ステップアップ・ワークシート

取組事例の名称等

豊田市立猿投台中学校
（第１学年 総合的な学習の時間
菜の花プロジェクト）

ねらい

菜の花プロジェクトを通して、地域貢献活動に参加し、地域の一員としての自覚を高める。

環境問題や SDGs について学ぶことで、持続可能な社会を作り上げるために必要な力を身に付けさせる。

学習者の状況

環境問題や SDGs に関する興味・関心の程度は様々である。

成果指標

菜の花プロジェクトを通して、地域貢献活動に参加し、地域の一員としての自覚を高めることができたか。

環境問題や SDGs について学ぶことで、持続可能な社会を作り上げるために必要な力を身に付けることができたか。

■取組の内容（学校）

１　導入、講義、体験学習
①オリエンテーション、種まき
②講話、ろうそく作り
③BDF 説明、廃油石けんによる洗濯体験、トラクターとの綱引き、菜の花の手入れ

工夫

①持続可能な社会のためにできることを具体化するために、身近な菜の花をテーマに設定。菜の花プロジェクトを通して、NPO を始めとする地域の方との交流を深め、地域社会との関わりを再認識。

②リサイクルやごみの減量も踏まえた実習として、ろうそく作りを行い、環境問題を楽しく学べるよう工夫。

③育てた菜の花を卒業式で飾ることで、保護者等を始めとする関係者へ菜の花プロジェクトを周知。

本物体験　驚き・感動　ゲーム化

学習者の反応

①自分で菜の花を育てること、プロジェクトを通して環境問題を学べることを楽しみにしている様子であった。

②ろうそくの作り方を習ったので、家の廃油を再利用して作ってみた。

③燃料として BDF を使ったトラクターとの綱引きが印象的だった。排気ガスも天ぷらのようなにおいで美味しそうだった。

学習の効果＆主に育まれる力

・家でも使用済みの廃油からろうそくを作ったというように、実践しやすい内容を題材とすることで、リサイクルやゴミの減量を家庭でも考えるきっかけとなった。
・菜の花プロジェクトを通して取り組んできたものが、教科を横断した学習や、生活と深く関わっていることを理解することができた。

２　まとめ
①発表会（校内）
②発表会（校外）

①菜の花プロジェクトを通して学び得た知識を深めるため、校内で発表会を開催。自分の考えをまとめ、他者へ伝えるために分かりやすい表現を工夫する過程で、新たな気づきを得られるよう促す。

②学年代表が、菜の花楽習会で発表を行う。校外での発表ができることで、生徒の意欲を高める。

成果実感

①級友の発表を聞き、自身が調べていただけでは知りえなかったことも知ることができ、さらに環境問題について理解を深めることができた。

②自分たちの活動を、様々な方に発表するために発表練習を行った。何度も練習し発表することで、自信を持って発表することができた。

・生徒自身が興味を持った環境問題を探求し、その問題の解決策を実践することで、より自分事としてその問題を捉えることができた。
・他者の発表を聞くことで、様々な環境問題について理解を深めることができた。

■取組の内容（関係者）

NPO 法人豊田・加茂菜の花プロジェクト、
太田油脂（株）等の関係者との連携

工夫

・生徒の興味を引き出すために、五感を使った体験を提供できるように学校と調整。

・菜種を搾油機で絞った後のしぼりかす、菜種を使った醤油等の試食や、BDF の馬力を体験するためにトラクターと綱引きなど、生徒の興味を引き出すように工夫。

本物体験　驚き・感動　ゲーム化

学習者の反応

・菜種が油になり、利用され、BDF にリサイクルされる一連の流れを見ることで、菜の花プロジェクトへの理解が深まった様子であった。

・トラクターとの綱引きというゲーム要素が生徒の記憶に残った様子であった。

学習の効果＆主に育まれる力

・五感を使った体験により、生徒の理解を深めることができた。

・NPO や企業と連携・協働することで、地域社会を意識した学びにつなげることができた。

■豊田市立猿投台中学校（第１学年 総合的な学習の時間　菜の花プロジェクト）

・菜の花プロジェクトを通して、環境問題や SDGs について学ぶことで、持続可能な社会を作り上げるために必要な力を身に付けさせることを目的として、NPO、企業等の関係者と連携・協働により、長年にわたり実施している。

廃油を原料にした石鹸を使用して洗濯体験をする様子

探究活動
学級発表会の様子

学習者の変容

【生徒のコメント】
・菜の花は、様々なものへと形を変えながら循環させることができ、地球温暖化を防止できることが分かった。
・廃油を使い石鹸やろうそくを作れるということを知り、限りある資源を有効に使うことの大切さが分かった。
・今後は廃油を捨てるのではなく、リサイクルをしていきたい。また家族や周りの人にも菜の花プロジェクトで学んだことを広げていきたい。

【先生のコメント】
・体験活動を行うことにより、自分事として捉えながら活動することができ、環境問題への意識が以前よりも高まった。

【関係者のコメント】
・自分たちの活動をどれだけ理解してもらえているのか知りたいと思っていたが、先生のフォローもあり、生徒に話した内容をしっかり理解してくれていることが確認でき、とても有意義だった。

成果と課題

【成果】
・菜の花プロジェクトを通して、学校、地域の関係者が連携・協働し、充実した体験活動を実施することで、地域の特色を活かした学びにつなげることができた。
・環境問題や SDGs について多面的に捉え、知識を結びつけていくことで、横断的な学びとすることができた。

【課題等】
・探究活動時に行った、環境問題を解決するための実践を、継続的に行うことができていない。
・生徒たちが育てた菜の花を、卒業式や入学式で飾ることで、会場を華やかに彩り、菜の花プロジェクトの周知を図っていく。

探究する力、共働する力

各主体の取組事例に対する定性的評価　ステップアップ・ワークシート

取組事例の名称等

愛知県立安城高等学校
（普通科全学年 総合的な探究の時間
ＡＢＰ ＳＤＧｓ探究学習）
※ＡＢＰは安城高校における
「総合的な探究の時間」の呼称
ANKO Bridge Project

ねらい

安城高校で学ぶ３年間で“社会とともに生きる自分”を目指す。

❶ 主体性・協働性を伸ばし、自ら学びに向かう態度を養う。
❷ 社会に貢献できる自己の在り方・生き方を考える。
❸ 他者との協働活動を通して、寛容の精神を涵養する。

学習者の状況

第１学年の総合的な探究の時間でＳＤＧｓの概要をクラス単位で探究的に学んでいく。

第２・３学年の同時間で、興味のあるＳＤＧｓのテーマを選択し、ゼミナール形式で深めていく。ゼミナールは地域の企業等がそれぞれアドバイザーとして参加。

成果指標

“社会とともに生きる自分”を目指すことができたか。

❶ 主体性・協働性を高められたか。
❷ 自己の在り方・生き方に気づけたか。
❸ 寛容の精神を涵養できたか。

■取組の内容（学校）

学校の工夫

学習者の反応

学習の効果＆主に育まれる力

１　ＳＤＧｓの 17 の目標の中から生徒自らテーマを設定

・第１学年でＳＤＧｓに関して得た知識を活かし、興味・関心を持って探究できるよう、生徒自身がテーマを選択。
・各テーマは、第２・３学年各 20 人の計 40 人からなり、クラス・学年の枠を超えた構成とすることで、生徒同士が学び合いにより、幅広い視点を持てるよう工夫。

共感・納得　見通しOK　見守り

・第３学年は前年度までの成果を深化させ、後輩を指導しながら関心を一層深められた。
・第２学年は身近な関心の中から具体的な行動案を第３学年とともに検討した。

・第１学年で学んだ全体像から、第２・３学年でさらに興味・関心のあるテーマを選択することで、主体的な学びにつなげることができた。

２　あんじょうＳＤＧｓ共創パートナーとともにＳＤＧｓテーマで探究学習

・学んだ知識や集めた情報を活用し、具体的な行動に移すことができるように促す。
・あんじょうＳＤＧｓ共創パートナーをアドバイザーとし、体験学習等も取り入れながら、地域社会とのつながりができるよう工夫。
・パートナー企業と対面で検討・振り返りの場を設定し、企業と連携することで、学校と企業の信頼関係を構築。

見守り　本物体験　見通しOK

・学校の先生と企業担当者の視点がそれぞれ異なり、多角的に検討できるため、アイデアの幅が広がった。
・先輩と一緒にグループワークをすることで、先輩の取り組む姿から探究の仕方について直接参考にすることができた。

・パートナー企業との連携や体験学習により、学習の幅や深まりを生み出すことができた。
・クラス・学年の枠を超えたグループ編成で活動することで、生徒同士の学び合いにつなげることができた。

３　３学年合同の成果発表会

・成果発表会に向けて、内容を分析することや、発表資料としてまとめることで、学びを深める。
・新たな課題や気づきが得られるよう、互いの発表を聞き合いグループごとの成果を共有することや、企業から直接コメントをもらうように工夫した発表会を開催。第１学年は、クラスで班別に制作したポスターを体育館の展示し、上級生や企業の方に観覧してもらい、助言をいただく。第２・３学年は、取り組んできたアクションプランについて各ゼミナールより報告し、参加企業からコメントをいただく。
・企業とのやり取りの中から生徒の社会性を育て、キャリア意識を高められるよう工夫。

ゆさぶり　共感・納得　成果実感

・展示を見た企業の方や先輩からの質問や感想を聞いて、他者に思いを伝えるにはさらなる工夫が必要だと感じた。（第１学年）
・一つの発表に対し複数の企業がコメントする中で、SDGs のすべてのテーマが根っこでつながっていることや、できることから少しずつ行動を起こすことの重要性に気づいた。（第２・３学年）

・上級生の取組を下級生が見ることで、次年度の学びに対し、後輩が見通しを持つことができた。
・一つのゼミ報告に対し、複数の企業から助言を受け、企業目線で社会のリアルを考察できた。

■取組の内容（企業）	企業の工夫	学習者の反応	学習の効果＆主に育まれる力
豊通物流（株） ・あんじょうＳＤＧｓ共創パートナーとして、生徒の学習をサポート ・テーマ　１ 貧困をなくそう 　　２ 飢餓をゼロに	・生徒の主体性を伸ばすために、新たな気づきを促すような学びの場をサポート。自社とつながりのある団体、担当者の個人的なつながりで、別の企業や大学関係者とゼミナールとを接続し、生徒の学びを膨らませた。 ・積極的に企業の方が来校され、生徒とのセッションを重ねたことで生徒の見方・考え方がより深められた。 ゆさぶり　本物体験　成果実感	・昆虫食について調べていく際に、実際にコオロギパウダーを製造している会社の方が来校されて、セッションをしていると探究が面白く感じた。 ・電話やメールでも、大学の先生とコンタクトを取れた。現地インタビューにも行けて勉強になった。 	・関心ある事柄を探究すると、様々な関連があることに気づき、課題が複雑に絡み合っていることに気づいた。 ・大学や会社が、高校生の学びに協力的であることに感動した。
ニチバン（株） ・あんじょうＳＤＧｓ共創パートナーとして、生徒の学習をサポート ・テーマ　13　気候変動に具体的な対策を	・生徒が主体的に考え、探究することができるよう、実物等を使って生徒の興味・関心を引き出し、具体的なアクションを考察できるようにした。 ・実際の製造工場と教室をオンラインで結んで、日常の製造工程において、工場が徹底している工夫改善の仕組みをリアルに体験することができた。 本物体験　驚き・感動　成果実感	・コロナ禍の当時は、実際に工場に足を運ぶことは難しかったが、工場とオンラインで結ぶことで、よりリアルに感じ取ることができた。 ・教科書では学べない社会の実際の状況を感じ取ることができ、自分には何ができるか考えてみた。 	・学校の外へ視点を向けることで、リアル体験を通して社会の実情をつかみ取ることができる。 ・ネット情報だけの理解に留まらず、社会の動きに一層関心を持てるようになった。

■愛知県立安城高等学校（普通科全学年 総合的な探究の時間 ＡＢＰ ＳＤＧｓ探究学習）

・総合的な探究の時間を“ANKO Bridge Project”（ＡＢＰ）として実施している。令和４年度からは、ＳＤＧｓを手掛かりに、生徒が自ら課題を設定して、仲間と協働し問題解決に向けて考えることを学び、社会貢献を目指す取組として実施している。

・ＡＢＰはＳＤＧｓ探究学習だけでなく、キャリア教育や道徳、情報モラルなども取り扱い、社会に貢献できる人材を目指して取り組んでいる。

・高校生のうちからキャリアに視点を置いて、自らの在り方・生き方を考えられるように学校教育活動全体で学びを進めており、あんじょうＳＤＧｓ共創パートナーとなっている地元企業等 12 社から協力を得て連携するＳＤＧｓ探究学習がその中核となっている。

・ＡＢＰは生徒の主体性や協働性を育て、地域貢献する気持ちを高めることをねらいとし、外部講師を招くことが学校と社会をつなぐチャネルとして機能するように企図している。

・「ただ話を聞いて終わり」とならないように、生徒同士が話し合う場面を確保したり、生徒が発表する時間を保証したりして、生徒の探究心や学び続ける姿勢が安城高校卒業後にも続くように期待している。

学習者の変容

【生徒のコメント】

・世の中で自分が将来どう生きていきたいかをＡＢＰの活動から考えることができた。（第３学年）

・ＡＢＰで企業の方と直接話す機会があるのは、世界への視野が広がって、どのような進路を選べばよいか考えるきっかけになった。（第２学年）

【先生のコメント】

・普段の授業では見られない生徒の表情を見ることができて、普段の授業の形も再考する機会になった。

【企業のコメント】

・2022（令和４）年度の第２学年が、2023（令和５）年度は第３学年として、グループ内をうまく取りまとめ、リーダーシップを発揮できるようになっていた。

・当初は受動的な様子であったが、回を重ねるごとに、学生側から課題解決に向けた提案があるなど、積極的に活動するようになった。

成果と課題

【成果】

・クラス・学年や教科の枠を超えてＳＤＧｓのテーマに取り組むことで、発展的な活動や課題への意識を高めることができた。

・あんじょうＳＤＧｓ共創パートナーと協働することで、社会との一員として、よりよい社会の実現に向けて主体的に行動することができた。

・時代の流れに敏感になり、学校内で見ている常識以上に世の中の変化が目まぐるしいことに生徒・教師が気づかされた。

【課題等】

・ＳＤＧｓや時代の変化に対応していくための学びとしては有効だが、校内で必要となる他の活動とのバランスを考えると、十分な時間を確保するのが難しい。

・総合的な探究の時間の指導を充実させるために、教員研修の機会が拡充されれば、子どもたちへの関わりや支援が一層充実すると思われる。

体感する力、共働する力

各主体の取組事例に対する定性的評価　ステップアップ・ワークシート

取組事例の名称等

愛知県立みあい特別支援学校 高等部
（農福連携の取組）

ねらい

卒業後の積極的かつ持続的な社会参加を目指し、体験的な学習等により実践力を積み上げ、課題を解決したり個々の手段で思いやりや考えを伝えたりする力を育成する。

学習者の状況

生徒一人一人の障害特性は様々である。

成果指標

卒業後の積極的かつ持続的な社会参加を目指し、体験的な学習等による実践力を積み上げ、課題を解決したり個々の手段で思いやりや考えを伝えたりする力を育成できたか。

取組の内容	工夫	学習者の反応	学習の効果＆主に育まれる力
1　ユニバーサル農園の活用・整備（通年）	・四季を通じた作業の中で、地域の方と共同で季節ごとの野菜を栽培。 ・地域と連携し、世代を超えた交流の場を整えるため、各関係者と定期的にオンライン会議を実施。 ・耕運機の作業では、生徒が地域の方へ操作方法を教えることで、生徒が学んだ知識を活かす機会を設け、学びを深めることや、主体性を引き出すよう工夫。 ・地域の方に生徒の実態を知ってもらうため、構造化、視覚化を取り入れた支援方法の伝達。 ・校内で販売学習を実施。 ・本校の取組を積極的に発信するため、マスメディアに取材を依頼。 本物体験　見守り	・初めてだけど、楽しくお話しながら収穫できた！ ・岡崎市全体で農福連携を盛り上げようと会議全体の熱量の高まりが感じられた。 ・初めての体験で、優しく丁寧に教えてもらい嬉しかったです。（地域の方） ・去年に比べてたくさん野菜が育っている！ ・自分たちが育てた野菜を売ることの満足感や充実感を感じていた。 ・取材は緊張したけど、新聞に載って嬉しかった！ 	・関係者との定期的な報告会の開催による学校運営体制を整えることで、生徒の地域との交流の幅が広がり、社会性が育まれた。 ・新聞やテレビ、関係機関の SNS 等で本校の取組を発信してもらうことで、本校の教育活動の理解とアピールに有効的であり、取組を知った方や企業から新しい活動や、励ましの手紙や電話、製作に必要な材料をいただくこともあり、さらなる学びにつなげることができた。
2　フラワーアレンジメント制作（通年）	・制作したフラワーアレンジメントを岡崎市社会福祉協議会へ生徒自らが納品に行くことで、地域の方とコミュニケーションを図る機会を設定。 ・フラワーアレンジメント講師からの、主となる色を決める、グリーンを活用するなどの具体的なアドバイス。 ・生徒同士が対話し、よりよいアイデアを出し合えるような環境づくり。 本物体験　見守り	・講師からのアドバイスを取り入れてフラワーアレンジメント作品に、生徒自身も満足している様子で、笑顔が見られた。 ・緊張していたが、制作した思いを伝えるなど感情を込めて納品していた。 	・講師からのアドバイスにより、作品の完成度が高まり、その成果を生徒同士や納品時に共有することで、達成感を得て、次回の制作に活かすことができた。
3　県立農業大学校との連携（９～３月）	・同校の近隣にある愛知県立農業大学校と、校外作業学習（野菜の栽培、収穫等）で連携を行うことで、生徒の経験を広げる機会を設定。 本物体験　見守り	・状態のよい野菜の見分け方を学びました！ ・愛情を込めて育てると、野菜も大きく成長すると教えてくれました！ 	・栽培方法や収穫するタイミングなど、専門性の高い知識を学ぶことができた。 ・普段関わりのない方とも、農業を通じて交流することで会話が弾み、社会性が身に付いた。

■愛知県立みあい特別支援学校 高等部（農福連携の取組）

・岡崎市と幸田町を通学区域とする知的障害の児童・生徒を対象にしている学校。
・高等部の作業学習の一環として、2022（令和４）年度から本格的に活動。園芸班を中心に農福連携に携わっている。
・地域とのつながりを大切にし、岡崎市社会福祉協議会、柴久園、JA あいち三河を始めとする各関係者との連携を図っている。
・地域だけでなく、本校小学部、中学部にも農業体験を呼びかけ、校内の活性化を図っている。

法性寺ねぎの苗植え体験をおかざき農遊会から指導を受けている様子

市内のキッチンカーと提携し、収穫したさつまいもを調理してもらい、収穫に関わった関係機関や本校児童を呼んで喫食体験を行っている様子

学習者の変容

【生徒のコメント】
・僕たちが一生懸命育てたさつまいもを、こんなにも美味しく調理してもらい、みんなに喜んでもらえてすごく嬉しかったです。
・私たちが作ったフラワーアレンジメントを飾ってもらえて嬉しいです。

【先生のコメント】
・地域の方々との関わりの中で、質問で聞かれたことだけを答えていた生徒が、自らコミュニケーションを図ろうとする場面が何度も見られた。

【各関係者のコメント】
・フラワーアレンジメント制作を通して、人も花と同じようにみんなで支え合いながら存在しているということを理解してもらうことができた。
・納品に来るたび、生徒さんたちの挨拶の声が大きくなってきて、表情も明るくなっている。

成果と課題

【成果】
・野菜の栽培、フラワーアレンジメント等の取組を地域と連携･協働して実践的な学習活動とすることで､生徒の経験の幅を広げることができた。
・一人一人の特性に配慮しながら、体験的な学習等を実施することで､課題解決に向けた活動とすることができた。
・専門的な知識や作業能力だけでなく､「対話力」「思考力」「表現力」といった社会性が身に付き、教育的効果がかなり高まったと感じている。

【課題等】
・地域の方々や外部関係機関と関わる中で、本校の取組に非常に協力いただいているが､お互いの思いを合わせて活動していくにはコミュニケーションがさらに必要であると感じる｡双方の思いを汲み取り、方向性を同じくし、時間と場を設けて持続ある活動を行っていきたい。

体感する力、理解する力、探究する力、活用する力、共働する力

各主体の取組事例に対する定性的評価　ステップアップ・ワークシート

取組事例の名称等

愛知淑徳大学
（コミュニティ・コラボレーションセンター（CCC））

ねらい

基本理念「違いを共に生きる」を体現するために、異なる価値観を認め合い、理解し合い、地域社会に役立つ人材を育成する。

学生の状況

新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受けた学年もあることなど、学生一人一人が持つバックグラウンドは様々である。

成果指標

基本理念「違いを共に生きる」を体現するために、異なる価値観を認め合い、理解し合い、地域社会に役立つ人材を育成できたか。

■取組の内容（CCC）

■取組の内容（CCC）	CCC の工夫	学生の反応	学生における学習の効果＆主に育まれる力
1　開設科目の履修	・学生のレベルに応じて科目選択ができるように、複数の講座を開設。広い視野と行動力を身に付けることできるように地域活動へも参加。 ・ステレオタイプの講義だけでなく、卒業生や NPO の方々の体験談を交えるように工夫。 ・講義等で響いたものを体現するために、活動内容の立案や実施を仲間とともに実践。 見守り　共感・納得　成果実感	・卒業生や NPO の方々の体験談を直接聞くことで、活動の意義が心に響いた。 ・仲間と共に活動することで達成感ややりがいを感じた。 	・ボランティア・社会貢献活動を受動的な姿勢で取り組むものではないという認識の変化が見られるようになった。 ・実際にボランティア活動等を行うことで、多様な人との出会いを通して新しい生き方を実現する行動様式であることに気づくよう促すことができた。
2　学生団体の支援	・学生自らが関心を持った地域課題の解決に向けて、継続した活動ができるように、学生の成長ステップを伴走支援。また、連携・協働先との調整をサポート。 見守り　成果実感	・小学生への環境学習において、伝わりやすいように表現等工夫した結果、参加した小学生から好評であったことで、やりがいを感じた。 	・教職課程を履修していない学生も参加することで、学生同士が意見交換をしながら、多角的な視点で子どもたちへの環境学習を提供することができた。

■取組の内容（学生）

■取組の内容（学生）	学生の工夫	参加者の反応	学生における学習の効果＆主に育まれる力
1　パスレル コロナ禍における飲食店の休業で食品ロスに関心を持った学生が新しく立ち上げた団体。 フードドライブや子ども食堂などを中心に活動中。	・団体の立ち上げに際し、フードバンク活動を行う NPO 法人などへ出向くことで、知識を増やすとともに、必要な支援ができるように準備。 ・豊田市等において、子どもたちへ直接食品を届ける活動を定期的に実施することで、地域とのつながりを深める。 ・大学全体にもフードバンク支援を広げたいとの思いから、売り上げの一部が名古屋市内のフードバンクへ寄附される自動販売機を設置。 見通しOK　成果実感	・毎月大学生に会うことを楽しみにしている。 ・小学生向けにおこなう食品ロス講座では、楽しく食品ロスの状況を学ぶことができました！ ・自動販売機の利用がフードバンクへの支援になることで、気軽に参加できるのがよかった。 	・団体活動の企画立案、進行管理、ふりかえりという PDCA を実行することで、主体的な活動を実施することができた。 ・各関係者と連携することで、社会とのつながりを実感し、生きた学びとなった。

２　エコのつぼみ

竹林整備とワークショップを主として活動。

NPO モリビトの会とともに美浜町で竹の伐採や竹炭作りを行うほか、ショッピングモールや小学校でのワークショップを実施。

・NPO と連携し、竹林整備として竹林の伐採、竹炭作りのほか、伐採した竹の有効活用のため、花々を育てる竹プランターのワークショップ等も実施。
・2007（平成 19）年から活動を実施しているが、継続した活動とするために、学生同士でやりたいこと、挑戦したいことを明確化し、主体的に取り組めるよう留意。
・コロナ禍ではオンラインでの講座やワークショップを行い、活動の幅を広げるように工夫。

本物体験　成果実感

・活動をする大半が高齢者となっており、継続しても終わりのない状況に限界を感じる時もありましたが、若者が一緒に参加してくれることで、活動を続ける糧になりました。
・竹炭消臭 POT をつくりながら、里山保全の大切さや間伐活動について知りました。
・楽しく環境について学べました。

・自主的、継続的に活動を続けた経験から、地域課題を解決する当事者として自分を位置づけられるようになった。

■愛知淑徳大学（コミュニティ・コラボレーションセンター（CCC））

・愛知淑徳大学は、「違いを共に生きる」という理念を掲げている。その理念を支え、具体的に実現していくべきテーマのひとつとして、「地域に根ざし、世界に開く」がある。
・CCC は、地域社会との連携により、理念を実現していくために、2006（平成 18）年 9 月に開設された。学生が様々な地域コミュニティとの交流や活動を通して、実践的な生きた知識や技術を学べるよう支援しており、現在約 30 の団体が活動している。

CCC

地域の方と稲刈り作業

商店街での文化交流ブース

山間地域の活性化（茶摘み作業）

学生の変容

【学生のコメント】
・誰かのために活動したいと思ったことを、様々な過程を経て実現させる中で、自らが主体的に行動するための「行動力」が大切であると気付き、この力が培われたと思う。
・様々な組織の方々と協力することで環境保全活動を続けられている。多くの出会いを積み重ねることで「対話力」「共感力」が育まれた。

【CCC のコメント】
・学生が変容していく姿と学生が地域を変化させていく姿をみながら、伴走者として、より地域によいコーディネートを意識していく。

成果と課題

【成果】
・授業内外における活動で、学生の主体性を尊重し、実践につなげることができた。
・事業者、NPO、行政等の多様な主体と連携するために、学生が積極的に関係者との調整を図るなど立場や状況に応じた役割を担うことで、地域社会への貢献につなげることができた。

【課題等】
・少子化等で地域の担い手が減少していく中、若者の必要性はより増している。学びが多い継続活動を行う若者の割合はまだまだパーセンテージが低いので、活動が必要な地域に必要なパワーとして入れる学生が増えるように促していくことを目指している。

活用する力、共働する力

各主体の取組事例に対する定性的評価　ステップアップ・ワークシート

取組事例の名称等

株式会社ダイセキ

ねらい

限られた資源を活かして使う「環境を通じ社会に貢献する環境創造企業」として事業活動を進める。

学習者の状況

資源循環型社会の構築のために必要な情報への理解度には差がある。

成果指標

限られた資源を活かして使う「環境を通じ社会に貢献する環境創造企業」として、事業活動ができたか。

■取組の内容（事業活動）

1　社員に対する環境教育の実施
- 月１回のコンプライアンス研修
- 階層別研修

2　環境保全の実施
- リサイクル事業
- 大気・水質環境の保全
- 災害･事故に伴う緊急工事

工夫

- 持続可能な社会の構築に向けた会社の経営戦略の実現のために社員を人的資本と捉えて、積極的な研修を実施。
- 様々な研修等の機会を捉えて、社員の環境に対する意識を高めるように工夫。

見通しOK　成果実感

- 廃油・廃液・汚泥、汚染土壌・石膏ボード等を燃料や原料等にリサイクルし、限られた資源を有効活用。
- 排出水には環境法令で定められる基準値よりも厳しい自社基準を設定し、環境負荷を低減。
- 災害・事故などによって漏えいした油や、火事発生後の消火剤などを回収し、拡散を防止して、災害・事故の復旧を実施。

見通しOK　成果実感

社員の反応

- 研修で勉強した内容を、今後の自身のキャリアアップにつなげていけるようにしたいと思います。（中堅社員）
- サーキュラーエコノミーなどについて、地球環境や社会のために、行っていく必要があることを理解しました。（管理部門社員）

中堅社員に対する研修の様子

- 社員一丸となってリサイクルに取り組む姿勢が、工場などからも高く評価されている。
- 特に災害時対応については、自治体などからの信頼につながっている。

東日本大震災時の復旧支援の様子

学習の効果＆主に育まれる力

- 事業活動と環境との関係について理解を深めることで、社会情勢の変化にも柔軟に対応できるような人材育成につなげることができた。

- 廃棄物を資源と捉え、多様な技術を組み合わせることで再資源化を行い、排出者と利用者をつなぐ役割を担っている。

■取組の内容（社外への環境学習）

1　工場見学の実施

工夫

- 様々な団体や地域住民等に対し、工場見学を実施することで、事業活動に伴う環境負荷低減に関する取組を周知。
- どんなことをやっているのか、においや色など、現場を五感で体験。
- 見学者からの意見は全社で共有するとともに、工場等の現場にも反映することで業務改善を実施。

本物体験　成果実感

参加者や社員の反応

- 工場のイメージとは異なり、きれいな施設等であることが分かり、環境に配慮していることが分かった。（参加者）
- 地域の人に自分たちが誇りを持って仕事をしていることを知ってもらえる機会だと思っている。（社員）

環境への取り組みの紹介の様子

工場見学の様子

学習の効果＆主に育まれる力

- 事業活動を理解してもらうことで、廃棄物に対するネガティブなイメージを払拭し、資源の有効活用に向けた周知ができた。

2　各主体へのセミナーの実施

・環境学を学んでいる大学生・大学院生を中心に、環境ビジネスに関するセミナーを実施。

・セミナーでは、工場見学も取り入れ、事業者が実施している取組への理解を深めるよう工夫。

・大学プログラムへ参画し、長期インターンシップも受入。長期インターンシップでは、大学生・大学院生に対し、工場見学やリサイクル体験を通じ環境保護とビジネスの両立をするための思考ができるよう工夫。

本物体験　共感・納得

・企業や環境を支えている現場を見ることができて、そこで働く方々がかっこいいと感じた。（大学３年生）

・学生でありながら事業展開について考え、実際に取り組める可能性があるということについて大変嬉しく思います。（大学院生）

大学生を対象としたセミナーの様子

長期インターンシップでの実験風景

・事業者の強みを活かしたセミナーや工場見学により、大学生等への環境ビジネスの理解を深めることができた。

・長期インターンシップの受入を通じ、社員が学生に対し最新の科学的知見に触れる機会を提供することで、意見交換を行うなど、学び合うことができた。

■株式会社ダイセキ

・1945（昭和 20）年創業、1958（昭和 33）年名古屋市に会社を設立。

・設立当初から、時代に先駆け廃棄物を資源として再利用することに着眼し、焼却処理施設や最終処分場を有しない産業廃棄物の中間処理・リサイクルのパイオニアとして業界をリードしている。

リサイクル工場の様子

社会の中での役割

学習者の変容

【社員】

・環境問題に対しさらに関心を持つようになった。具体的な取組のために、何が必要か考えるようになった。

・普段の業務がどのように環境を良くすることにつながっているかを意識するようになった。

【見学者、参加者】

・環境問題への取り組みについて、より身近に感じるとともに、関心を寄せるようになった。

【長期インターンシップ参加者】

・環境問題を解決するためには技術的側面だけでなく経済性や社会とのつながりの側面も重要であることを理解できるようになった。

成果と課題

【成果】

・事業活動と環境との関係について理解を深め、社会情勢の変化にも柔軟に対応できるような人材育成を進めることで、循環型社会の構築を推進することができた。

・セミナーや工場見学により、環境への理解を促すことで、持続可能な社会の発展に貢献することができた。

【課題等】

・社員への環境教育のさらなる充実

・より幅広いステークホルダーへの情報発信、業界イメージの向上に向けた取組

体感する力、活用する力、共働する力

各主体の取組事例に対する定性的評価　ステップアップ・ワークシート

取組事例の名称等

特定非営利活動法人犬山里山学研究所

ねらい

大学や研究機関ではできない役割を担い、「市民がつくる里山学」形成を目指す。

学習者の状況

学習者の自然への興味・関心は、様々である。

成果指標

大学や研究機関ではできない役割を担い、「市民がつくる里山学」形成を目指すことができたか。

取組の内容	工夫	学習者（参加者）の反応	学習の効果＆主に育まれる力
1　環境講座、観察会 生物・環境講座や観察会の開催や、保全活動を行っている。	・犬山市周辺の里山における調査研究結果を活用し、環境講座や観察会等の機会を捉えて、幅広い世代に向けて里山の大切さについて発信。 ・環境講座や観察会等では、小さな変化に自ら気づくことができるよう、伝えるタイミングを工夫。 本物体験　共感・納得	・参加するたびに新たな発見があり感動します。 ・色々な生き物が採れて面白かった。 ・子供の頃よくつかまえた生き物を改めて観察できた。 ・名前がわかると興味がわいて面白い！ 	・植物や生き物などの環境講座により、身近な自然への関心を高めることができた。 ・視線・視点が変わり、今まで気が付かなかったことに気が付けるようになった。
2　調査研究、展示 自然資料の収集や分析及び展示を行い、成果を広く発信している。	・旬の話題に関連した企画展示、植物の性質を活かした体験できる仕掛けづくりなど、来館者が楽しく学べるよう工夫。 ・できるだけ標本、剥製、ジオラマなど具体性と視覚性を具えた展示になるよう工夫。 本物体験　ゲーム化　共感・納得	・「生きもの探偵」やオナモミを使った「魚釣りの展示」が子供たちに大人気です。 ・魚釣りが楽しかった！ ・生き物がどんなところにいるか分かった！ ・里山の姿が模型でよく分かって良いと思います。 	・工夫を凝らした展示により、地域の自然環境に親しむ場として、実感を伴った学びを提供することができた。 ・観察、探究の中に「遊び」の要素を入れることで、親しみを増す学びの場を提供できた。
3　他の主体との連携 ①小学校の総合的な学習の時間等における自然体験学習を実施している。	・生き物や植物などの様子を、匂い、音、感触などの五感を使って体験。先入観に捉われた体験にならないよう「現地で体感すること」「自分で体験すること」を大切にし、現地体験を先に行うよう、学びの順番を工夫。 ・犬山市内の小学校に対して、自然資料の収集や分析で得た知識・経験を活用し、身近な自然との触れ合いや学びを支援。 本物体験　見守り　成果実感	・春は中島池・新池周辺の自然、秋は田口大洞池・田口洞川の役割と周辺の自然、冬は里山について学び、最後に発表会・感謝の会で、これまで学んだことを発表し、お礼の手紙を渡しました。 ・校区を流れる五条川の生き物環境調査では、予想以上に生き物がいっぱいとれて、五条川ってすごいなと感じました。 	・小学生の感性を通じると、ふだん見落とすものが見えてくることを、スタッフ自身が学び直す機会になった。「忘れてしまったもの」を取り戻すには、多くの人とのつながりが大切だと再認識できた。 ・専門的な知識や経験を活かし、五感を使った体験の機会を提供することで、豊かな感性を育むきっかけとすることができた。

②地域の方等とともに、ふれあいの森や水生生物園を整備している。

・地域の方等と連携しながら、里地里山の自然環境を保全するために、ふれあいの森や水生生物園を整備。
・ふれあいの森を整備する際には、森の将来像を考えながら間伐や除伐を実施。
・水生生物園の整備活動では、草が繁茂してしまわないよう除草作業を継続しており、動物や植物がこれからも生存できる場所となるよう、そして、人と自然が共生していくことができるよう、それぞれの環境に合わせた整備を実施するよう工夫。

本物体験　見守り　成果実感

・暑さ寒さが厳しい日の作業は大変ですが、仲間がいるから頑張れます。
・守るべき動物、植物があるので、何とかしようという思いを仲間と共有できる。

・里地里山の自然環境の保全を地域の方と連携して行うことで、自然との関わり方や触れ合い方を共有することができた。

■特定非営利活動法人犬山里山学研究所

・環境学習講座や観察会、標本の展示・保存、調査研究などを通して、里山に親しみながら生活する人づくりを進めている。
・平成 18 年にオープンした犬山里山学センターの受付管理を行い、収集した自然資料を常設展示や企画展示などで来館者が見られるようにしている。

犬山里山学センター

近くの小川での
水生生物調査・観察

自然体験学習講座「昆虫教室」
にてチョウの幼虫を観察

学習者（参加者）の変容

【環境講座、観察会の参加者のコメント】
・家では触れない虫や、あまり有名ではない虫もじっくり見て楽しむようになった。
・図鑑を見るようになった。
（様々なものへの好奇心と観察力向上。）

【来館者のコメント】
・生き物がどんなところにすんでいるかわかった。
・色々な工作ができてうれしい。
・見たことがない鳥や昆虫がいて感動した。
（生き物や自然に対する興味が向上。）

【小学生からの手紙より】
・お魚をとるのをいろいろな方法で教えてもらった。家で弟と一緒に教えてもらった方法で魚を捕まえてみた。
（教えてもらったことを家で実践することから、反復学習や他者への共有が見られる。）

成果と課題

【成果】
・犬山市周辺の里山の調査研究を活用し、地域の環境学習の場として実感を伴った学びを提供することができた。
・小学校等への自然体験学習では、学校ではできない五感を使った体験により、子どもたちに豊かな感性を育むきっかけとすることができた。
・「学び」、「実践」、「伝承」が一体となって初めて自然財産を守っていけることを再確認できた。
・生物や環境の見方、関わり方の多様な価値観をどのように包括していくべきかを考える機会となった。

【課題等】
・話の運び方などで子供たちに先入観を持たせてしまう可能性があるため、伝え方などの難しさを実感した。それらも含め毎回の反省会で、お互い気が付いたことを共有し、補い合うことが大切である。
・ボランティアスタッフの高齢化に伴い、人員の確保等が課題となる。

小学校から寄せられた自然体験学習へのコメントのご紹介

▌犬山市立城東小学校

【児童のコメント】
・野鳥の写真を見せてもらって、こんなにたくさんの野鳥が中島池に来ていたことに驚きました。でも、自然破壊によって、野鳥が減っていると聞いて残念です。私はエコ用紙を使って、自然を守りたいと思いました。
・アメリカザリガニ等の外来種が在来種を減らしていることを知りました。外来種のペットは最後まで責任をもって飼います。皆にも呼びかけたいです。
・城東の里山の自然は地域のボランティアの方々の活動のおかげで守られていると気付きました。私もボランティアに参加したいと思いました。

【先生のコメント】
・児童は実際に昆虫や植物を見たり、写真や標本を見せてもらったりして、城東の里山が自然豊かな地域であることに気付きました。しかし、年々その自然が減少していることを知り、自分たちにできる活動をしたいという思いを持ちました。ポスターやチラシ製作して環境を守るよう校内で呼び掛けたり、中島池・田口洞川のごみ拾い等の活動を行ったりしました。

▌犬山市立羽黒小学校

【児童のコメント】
・タモロコがとれたことがうれしかったです。でも、一番たくさんとれたのはアメリカザリガニでした。外来種をどうしたら減らしていけるか勉強したいです。

【先生のコメント】
・毎年継続して行っている生き物調査から、徐々に五条川の環境がよくなってきていることに子どもたちは気付きました。今後も羽黒小学校のみんなで五条川の環境をよくしていきたいと子どもたちは考えるようになりました。

共働する力

各主体の取組事例に対する定性的評価　ステップアップ・ワークシート

取組事例の名称等

刈谷市立双葉小学校 PTA・地域学校協働活動

ねらい

地域、家庭、学校が一体となって、子どもたちの健やかな成長を見守る。

児童の状況

授業、給食、課外活動等で新たなことを学ぶ際には、児童は不安と期待が入り交じっている。

成果指標

地域、家庭、学校が一体となって、子どもたちの健やかな成長を見守ることができたか。

取組の内容

1　PTA 等の活動
- 校内の除草作業、苗植え
- あいさつ運動
- リユース品販売
- 教室の扇風機の清掃
- 広報活動

工夫

- 保護者、地域の方が校内の除草作業や苗植えを実施することで、子どもたちが気持ちよく生活でき、季節を感じることのできる場所を創出。
- あいさつ運動をしながら、子どもたちの様子を地域ぐるみで見守り。
- 各家庭から集まった学用品のリユース品販売を行い、家庭でも学校でも物を大切にすることを通して、限りある資源を有効に使うよう工夫。
- 保護者、地域の方が教室の扇風機を清掃することで、子どもたちが気持ちよく生活できるようにサポート。
- PTA やおやじの会の活動について、おたよりを配付して多くの方の参加を呼びかけている。PTA 新聞には、写真や活動してくれた方の声を掲載し、活動の様子が分かりやすくなるように工夫。

見守り　本物体験　成果実感

児童や関係者の反応

- 教職員、児童から美しい環境になったことを喜ぶ声や感謝の声があった。
- 保護者、教職員は、子どもたちのために、多くの活動をしてくれていることに感謝している。
- PTA の方と一緒に植えた苗が大きく育ち、きれいな花を咲かせてほしい。

学習の効果＆主に育まれる力

- 学校の整備等を通して、児童や関係者が世代を超えて交流することができた。子どもが自然に親しんだり、美しい環境で過ごしたりすることができた。
- 広報活動をすることで、学校、PTA が一体となって、児童の学びや成長を支えていることを周知することができた。

2　地域学校協働活動
- 双葉ガーデン（中庭ガーデン）の整備
- 授業活動の補助

- 地域学校協働活動コーディネーターが学校と学校サポーター（PTA 会員の保護者、地域の方）と連携しながら、児童の学習活動を支援。
- 保護者、地域の方、児童が一緒に中庭の整備を実施することで、思い入れのある憩いの場にするとともに、世代間の交流の機会を提供。また、四季折々の植物を育てることで、生き物が集まるような場所にもなり、自然に親しむ機会を創出。
- 第１学年の給食の配膳や、第５・６学年の家庭科の調理実習の補助を通して、食育推進となるように工夫。

見守り　見通しOK

- 双葉ガーデンを整備した方々は、子どもたちの憩いの場となり、自分たちも楽しめる場となることを願っている。
- 子どもたちは、双葉ガーデンで四季折々の植物にくる生き物を見つけ、楽しんでいる。整備した方が、双葉ガーデンで育った植物でリースなどを作り、子どもたちは、その飾りを見て自然のすばらしさを感じている。

- 地域学校協働活動として、児童を補助することで、きめ細やかな学習につなげることができた。
- 家庭や地域での学び合い、育ち合いのきっかけとなった。

・教職員、保護者からは、多くの方が学校サポーターとして子どもを見守り、子どもたちの成長を感じてくれるので、ありがたいとの声があった。

・地域の方は、子どもたちの取組への真剣さや成長を喜んでいる。

・児童は、スムーズに活動を進めることができて感謝している。また、活動に困ったら優しく教えてくれ、できるようになるので、うれしいと思っている。

■刈谷市立双葉小学校 PTA・地域学校協働活動

・PTA の主な活動としては、環境の保全・美化、防災、防犯・交通安全、広報活動等であり、地域、学校、家庭をつなぐ役割を担っている。
・令和４年度から刈谷市で始まった「地域学校協働活動」のモデル校として、地域、学校が一体となって活動している。
・地域学校協働活動コーディネーター２名が、学校と学校サポーター（保護者、地域の方）との架け橋となり、学校活動を連携・協働して進めるように取り組んでいる。
・学校サポーターは、第１学年給食配膳補助、第５・６学年家庭科授業補助などを実施している。
・PTA、おやじの会、地域学校協働活動（コーディネーター、学校サポーター）、地域団体（パトロール隊、保全会、JA など）、ボランティア団体などが、児童の見守りや学校運営のサポートを行っている。

PTA による苗植え

ミシンサポート

児童や関係者の変容

【児童のコメント】
・PTA の方と一緒に植えた苗が大きく育ち、きれいな花を咲かせてほしい。

【先生のコメント】
・子どもたちは、困ったときに、助けてほしいと伝えられるようになった。

【PTA のコメント】
・活動を通して、子どもたちの様子をよく見ることができるようになった。

【地域学校協働活動コーディネーターのコメント】
・多くの人が、子どものためによりよい支援をし、子どもたちの成長も見ることができるようになった。

【学校サポーターのコメント】
・子どもたちが活動に真剣に取り組む姿や成長していく姿を見ることができてうれしかった。

成果と課題

【成果】
・PTA や地域学校協働活動を通して、地域、学校、保護者等が一体となって、児童の学びや成長を支えることができた。
・学校が、児童、地域の方、保護者がともに学び合う場となり、世代間の学び合い、育ち合いにつなげることができた。

【課題等】
・現状としては、それぞれの団体が、別で活動している。子どもたちのためという思いは一緒なので、一体化するといい。

体感する力、活用する力、共働する力

各主体の取組事例に対する定性的評価　ステップアップ・ワークシート

取組事例の名称等
大府市
（大府市環境パートナーシップ）

ねらい

一人ひとりが自分のこととして環境を意識し、学び、気づき、そして行動する市民を育む。

市民の状況

パートナーシップのメンバーが実施している環境保全活動等の参加者である市民の環境に対する理解度には幅がある。

成果指標

一人ひとりが自分のこととして環境を意識し、学び、気づき、そして行動する市民を育むことができたか。

■取組の内容（大府市）

大府市環境パートナーシップ会議の開催
（年２回程度）
　メンバーからの提案、活動実績報告及び意見交換

大府市の工夫

・2019（令和元）年度に、従来までの行政主導で行う会議形式から、メンバー同士が課題・提案を持ち寄り、その解決に向けた意見交換ができる場へと方向転換。
・各主体が連携・協働し、意見交換をしやすい環境にするため、オープンスペースで会議を開催。メンバー同士が互いを尊重し合うためのルールを説明。

見通しOK　共感・納得　成果実感

メンバーの反応

・提案や課題に対して、質問や助言等の活発な意見交換があった。
・難しい課題にも、解決に向けた類似例などが挙げられるなど、前向きな議論であった。

学習の効果＆主に育まれる力

・各メンバーが持つ専門的な知識や経験を活かし合うことができた。
・メンバー同士が会議を通して、連携・協働先を見つけることができた。

■取組の内容（メンバー）

活動事例１
（株）豊田自動織機 長草工場
　①水槽展示
　②松ぼっくり等のプレゼント

メンバーの工夫

①地元の河川で捕獲した生き物等を水槽で飼育し、保育園や小学校等へ貸出。至学館大学の学生に社会活動の一つの場として参画してもらい、全体企画、魚の捕獲、手紙のやり取り、ミニ観察会、魚タッチイベント等を協働で実施。
②工場でとれた松ぼっくりは焼却処分をしていたが、有効活用するために、大府市内の保育園等へ松ぼっくりや松ぼっくりを使った作品をプレゼント。子どもたちに自然の恵みを通した自然とのふれあいの機会を提供。

本物体験　驚き・感動　見守り

市民の反応

①保育園や小学校等から届く手紙には、「魚が好きになった」「生き物のことをもっと知りたくなった」などの声があった。魚タッチイベントで園児たちが大興奮した。
②園児たちは目を輝かせながら笑顔で松ぼっくりに色や飾り付けを行った。多くの笑顔があふれた。

学習の効果＆主に育まれる力

①子どもたちとの手紙のやりとり・ミニ観察会を通して生き物への興味を高めてもらった。学生も教育体験ができた。魚に触れることで命の大切さを実感できた。
②子どもたちが松ぼっくりを使って工作をすることで、身近な自然を感じることができた。

活動事例２
子育て支援サークルあそびのいっぽ
　①フードドライブによる生活困窮家庭への食品支援
　②アダプトプログラムへの参加
　③子どもたちへの体験活動の場を提供

メンバーの工夫

①フードドライブの実施等により集めた食品を、子育て中の生活困窮家庭への食品支援。
②事務所の花壇で四季折々の植物を育てるアダプトプログラムへ参加。
③子どもたちが楽しく参加できるような、じゃがいも収穫体験、竹水鉄砲作りなどの体験活動の場を提供。

成果実感　本物体験

市民の反応

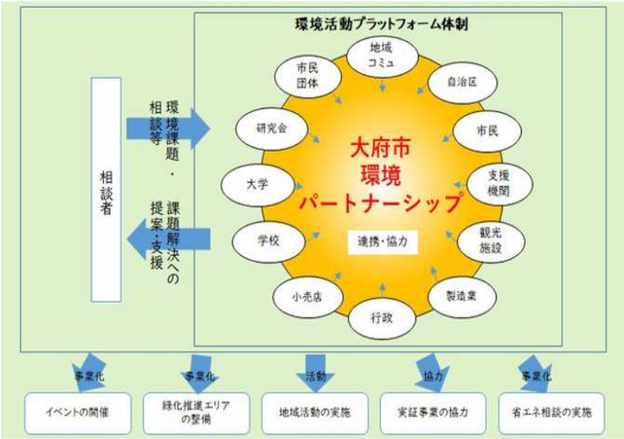
①子どもだけではなく、親の分も支援することで、家族で食について学ぶきっかけとなった。
②近隣の方から「花壇の前を通ると気持ちが温まる。ありがとう」など声をかけられるようになった。
③ノコギリ・キリなどを使い、自分で竹水鉄砲を作ることができ、子どもたちがとても喜んでいた。親も「子どものあんな楽しそうな顔を見たのは久しぶり」と喜んでいた。

学習の効果＆主に育まれる力

①フードドライブの実施を通して、地域のためにできることを子どもたちが考えるきっかけとなった。
②四季折々の植物を育てることを通して、季節の変化を感じることで、自然に親しんでもらうことができた。
③一人親家庭の子は体験活動の機会が少ないので、体験活動を通じて視野を広げることができた。また、環境を学ぶ機会を提供することで、地域の連携・協働につなげることができた。

■大府市（大府市環境パートナーシップ）

・市民団体・地域コミュニティ・事業者など、環境づくりに関心のある地域に密着したプレイヤーの組織として 2003（平成 15）年度に発足した「環境活動プラットフォーム」。
・地域の環境課題等の解決に向けて、連携・協力して活動を実施。
・環境パートナーシップ会議において提案のあった事業を中心に、環境パートナーシップ会議参加者の協力のもとそれぞれ活動を進めている。



各関係者の変容

【パートナーシップ】
［大府市のコメント］
・環境パートナーシップ会議の形式を変更してから、メンバー同士の交流が活発になり、環境学習等を実施できる環境づくりができた。
・他自治体からもパートナーシップの運営等についての問い合わせがあるなど、行政のメリットを活かす取組となった。
［メンバーのコメント］
・行政の持つ「信用力」「紹介力」「情報力」「発信力」を活用することができ、他団体との関係の構築がしやすかった。

【メンバーが実施した取組】
［参加者のコメント］
・保育園や小学校等から届く手紙には、「魚が好きになった」「生き物のことをもっと知りたくなった」などの声があった。
［メンバーのコメント］
・高校生までの家族を対象に食品支援を実施しているが、子どもから高校卒業前に勇気を持って自立したので、他者の支援をしてほしいという申し出があった事例が、支援者として嬉しかった。

成果と課題

【成果】
・会議形式を変えたことで、パートナーシップ会議のメンバーが主体的に環境保全活動等に取り組むことができるようになった。
・地域の環境課題の解決に向けて、多様な主体が自らの強みを活かし合いながら連携・協働することができた。

【課題】
・本プラットフォームに参加していただける新たなプレイヤーの発掘

資料６

各主体の事例から得られた知見～学びをサポートするためのポイント～

五つの力	何が大事か	そのための工夫
体感する力 自然の素晴らしさや環境の大切さを感じ取る力	**〇興味・関心を高める。** **〇一過性で終わらせない。** **〇気付きや発見を大切にする。**	〇見る・触れる・手を動かす（実験、工作等）など、興味を引きながら楽しめる要素を取り入れ、関心を高める。 〇自然にふれ合うコツを学んでもらう（虫への抵抗感をなくすことや、安全なふれ合い方を知ってもらうことなど）。 〇学習の最後に振り返りの機会を設けることで、学習者同士で思い出を共有し、記憶に残る体験とする。 〇日常的に見る・使用する物を工作等で作って持ち帰る、親子で参加し保護者にも体験の方法を学んでもらうことにより、家庭での振り返りや継続的な体験につなげる。 〇同じ場所へ何度も出かけることで、季節の変化を五感を使って感じとれるようにする。 〇学習者の気付きを大切にし、発見の楽しさや嬉しさを知的好奇心につなげる。
理解する力 私たちの活動が環境に影響を与えていることを、自分のこととして捉える力	**〇単なる知識でなく、自分のこととして捉える。** **〇学んだことを表現することで、理解を深める。**	〇見る・触れる・手を動かす（実験、工作等）ことにより、興味を引きながら環境問題の仕組みを分かりやすく伝える。 〇身近な環境問題に関する問いかけやクイズを交えることで、自分のこととして理解する。 〇自分にできること（エコアクション）は何かと問い掛けて発言を促すとともに、他の学習者と議論し、共有することにより、多くのエコアクションがあることに気付き、行動意欲や更なる学習意欲につなげる。 〇学んだことを言葉や絵などの方法で表現することを通して、学習者自身の理解を深める。
探究する力 環境問題を多面的に考察し、その本質や解決策を見つけ出す力	**〇知識・経験を高める。** **〇新たな課題を発見し、自ら深掘りする力を身に付ける。**	〇関心を持った課題について、学習者が主体となって議論しながら調査・研究することにより、知識・経験を主体的に高める。 〇学習者同士の対話や、豊富な知識・経験を持つ人からのサポートにより、多面的に物事を捉えることができるように促す。 〇成果を披露する発表会を開催することで、調査・研究を振り返り、新たな気付きや課題の発見につなげるとともに、継続的な探究の意欲を高める。
活用する力 環境を守るために必要な知識やスキルを自ら身に付け、活かす力	**〇学びを実践につなげる力を身に付ける。**	〇具体的な課題について、課題を有する企業等の現場調査や担当者とのディスカッションを交えながら検討することにより、探究すべきことや制約、実現性など様々な視点から物事を考える力や、これまで習得した知識やスキルを社会で活用する力を養う。 〇検討の成果について、企業等から評価を受けることなどにより、取組の成果を実感できるようにする。 〇学習者が関心を持った社会的課題の解決に向けて、継続した活動ができるように、無理をさせ過ぎないようにするなどのサポートを行う。
共働する力 共に未来を創り出すために、みんなとつながる力	**〇様々な主体とつながり、学習・活動の幅を広げる。**	〇共働しようとする主体が、事前にヒアリングを綿密に行うなどにより、それぞれのニーズやノウハウを詳細に把握するとともに、信頼関係を構築する。 〇多様な主体が意見交換する場を設けることで、主体同士の交流から、連携・協働へと発展させる。
（共通）	〇より効果的な学習・活動に向け、事後に成果や課題の抽出を行い、改善を図る。 〇様々な機会を環境学習等の場として活用する。	

資料７

愛知県環境教育等推進協議会開催要領

（目的）

第１条　愛知県環境教育等推進協議会（以下「協議会」という。）は、環境教育等による環境保全の取組の促進に関する法律第８条に基づく、愛知県の自然的社会的条件に応じた環境保全活動、環境保全の意欲の増進及び環境教育並びに協働取組の推進に関する行動計画（以下「行動計画」という。）の作成に関する協議及び行動計画の実施に係る連絡調整を行うとともに、協議会構成員が行動計画の実施に関し、相協力して、環境保全活動、環境保全の意欲の増進及び環境教育並びに協働取組の推進に努めることを目的とし、開催する。

（所掌事項）

第２条　協議会の所掌事項は、次のとおりとする。

（１）行動計画の作成に関する協議及び行動計画の実施に係る連絡調整を行い、行動計画の作成事項は以下のとおりとする。

①　環境保全活動、環境保全の意欲の増進及び環境教育並びに協働取組の推進に関する基本的な事項

②　環境保全活動、環境保全の意欲の増進及び環境教育並びに協働取組の推進に関し実施すべき施策に関する事項

③　その他環境保全活動、環境保全の意欲の増進及び環境教育並びに協働取組の推進に関する重要な事項

（２）行動計画の実施に関し、相協力して、環境保全活動、環境保全の意欲の増進及び環境教育並びに協働取組を推進する。

（組織）

第３条　協議会は、１６名以内の委員をもって構成し、環境局長が任命する。

２　委員の任期は、２年以内とする。ただし、委員が欠けた場合における補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

３　前項の委員は、再任されることができる。

４　協議会には会長及び会長代理を置き、会長は委員の互選によって定め、会長代理は会長が指名する。

５　会長は、会議を総括し、会議の進行にあたる。

６　会長代理は、会長を補佐し、会長に事故あるときはその職務を代理する。

（会議）

第４条　協議会の会議は、会長が招集し、議長となる。

２　委員（公募委員、学識経験者を除く）が会議に出席できない場合には、代理の者が出席することができるものとする。

３　会議には、必要に応じ、委員以外の者の出席を求めることができる。
４　会議は、公開とする。
５　会議終了後に会議録を作成し、５年間保存する。
（分科会）
第５条　協議会に、会長が指定した事項について調査検討させるため、分科会を置くことができる。
２　分科会は、会長が指名する委員及び臨時委員をもって構成する。
３　分科会には座長及び座長代理を置き、座長は委員の互選によって定め、座長代理は座長が指名する。
４　座長は、分科会の会議を総括し、会議の進行にあたるとともに、分科会における検討事項の経過等について、協議会に報告する。
５　分科会の会議は、座長が招集し、議長となる。
（庶務）
第６条　協議会及び分科会に関する庶務は、環境局環境政策部環境活動推進課において処理する。
（その他）
第７条　この要領に定めるもののほか、会議の運営に必要な事項は、会長が定める。

附　則

この要領は、平成２４年７月４日から施行する。

この要領は、平成２５年２月７日から施行する。

この要領は、平成２５年６月１日から施行する。

この要領は、平成２６年５月１６日から施行する。

この要領は、平成２７年６月１日から施行する。

この要領は、平成２８年９月１日から施行する。

この要領は、平成３１年４月１日から施行する。

資料８

愛知県環境教育等推進協議会委員名簿

2024（令和６）年３月現在（敬称略）

区　　分		氏　　名	職　　名
愛知県教育委員会		栗木（くりき） 晴久（はるひさ）	愛知県教育委員会教育部長
学校教育	高等学校（公立）	川手（かわて） 文男（ふみお）	愛知県立津島高等学校長
	私　学	伊藤（いとう） 憲人（のりひと）	名城大学附属高等学校長
	義務教育（公立）	吉川（よしかわ） 博（ひろし）	蟹江町立蟹江小学校長
	幼児教育	松尾（まつお） 琢二（たくじ）	公益社団法人愛知県私立幼稚園連盟 第２教育研究部副部長
社会教育		今井（いまい） 智樹（ともき）	愛知県教育委員会教育部あいちの学び推進課担当課長
県　　民		守安（もりやす） 悠子（ゆうこ）	公募委員
民間団体	ＮＰＯ等	篠田（しのだ） 陽作（ようさく）	ネイチャークラブ東海　代表
		新海（しんかい） 洋子（ようこ）	特定非営利活動法人ボランタリーネイバーズ 主任研究員
	事業者団体	藤岡（ふじおか） 昌也（まさや）	環境パートナーシップ・ＣＬＵＢ幹事長 （ブラザー工業（株）気候変動対応戦略部長）
		中野（なかの） 康治（こうじ）	東邦ガス(株)ＣＳＲ環境部長
学識経験者		千頭（ちかみ） 聡（さとし）	日本福祉大学国際福祉開発学部特任教授
		大鹿（おおしか） 聖公（きよゆき）	愛知教育大学教授
市　町　村		冨田（とみた） 俊晴（としはる）	長久手市くらし文化部環境課長
		近藤（こんどう） 伸繁（のぶしげ）	幸田町環境経済部環境課長
愛　知　県		川村（かわむら） 正人（まさと）	愛知県環境局長

愛知県環境学習等行動計画 2030

－持続可能な社会を支える「行動する人づくり」－

中間評価

2024（令和６）年３月

愛知県環境局環境政策部環境活動推進課
〒460-8501　名古屋市中区三の丸三丁目１番２号
TEL　052－954－6208（ダイヤルイン）
FAX　052－954－6914
ホームページ　https://www.pref.aichi.jp/site/kankyo/katsudo-ka.html

愛知県